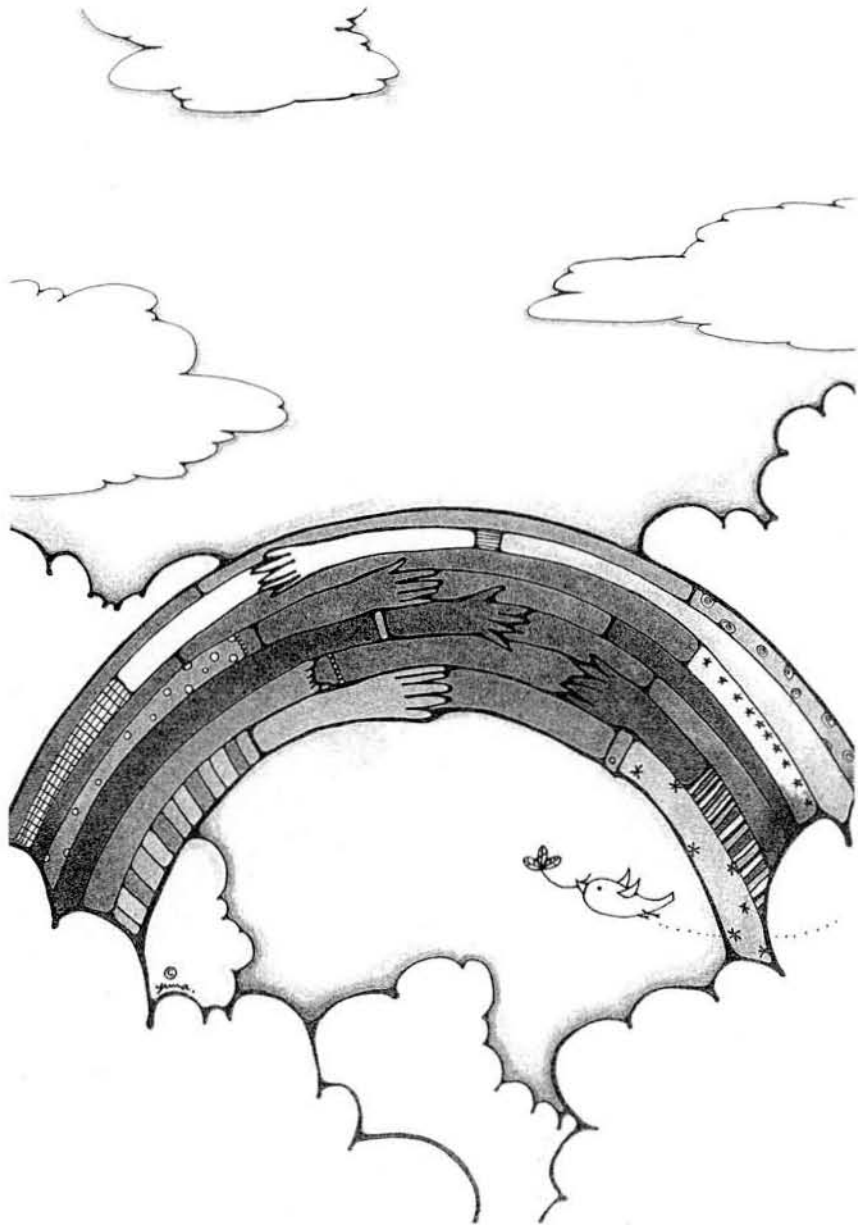


教会学校教案誌

2009.7.8.9月号



No.34

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2009年7～9月カリキュラム（第34号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月5日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63-66、ハイデ104
		ヨハネ19:25-27	出エジプト20:12 前半
わたしたちの人間関係は、十字架のもとに置かれている。父母を敬おう			
12日	第六戒 殺してはならない	問53, 54	ウ小67-69、ハイデ105-107
		マタイ5:21-26	出エジプト20:13
命は主のもの。人の命の尊さを知ろう。自らの内に殺人の根があることを知ろう			
19日	第七戒 姦淫してはならない	問55, 56	ウ小70-72、ハイデ108, 109
		マタイ19:3-6	出エジプト20:14
人は男と女につくられた。その祝福を学ぼう。結婚の尊さ、神聖さを知ろう			
26日	第八戒 盗んではならない	問57, 58	ウ小73-75、ハイデ110-111
		マタイ25:14-30	出エジプト20:15
すべては主なる神から与えられたもの。神にささげて用いよう			
8月2日	第九戒 偽証してはならない	問59, 60	ウ小76-78、ハイデ112
		ヨシュア7章	出エジプト20:16
神の御前で偽りはしりぞけられる。神はわたしたちに真実を求めておられる			
9日 (平和)	平和を創り出す	—	—
		ローマ12:9-21	ローマ12:18
神は平和の神である。互いに祝福を祈り、身の周りで平和を創り出して歩もう			
16日	第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62	ウ小79-81、ハイデ113
		コリントー13章	出エジプト20:17 前半
むさぼって自分のために生きるのではない。愛と感謝をもって、仕えて歩もう			
23日	神のおきてを喜ぶ生活	問63	ウ小87, 89, 90、ハイデ86-91
		テサロニケー1:2-10	詩編119:105
聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、主イエスにならう者として歩もう			
30日	十戒の完成者キリスト	問64	ウ小82-87、ハイデ114, 115
		マタイ5:17-20	マタイ5:17
十戒（律法）を完成するために、主イエスは来られた。十字架の贖いを喜ぼう			
9月6日	教会に生きる（一）	問65	ウ小85、ハイデ54
		ローマ12:1-8	ローマ12:1 後半
聖霊によって結ばれた教会と一つにされて、自らを神にささげて歩もう			
13日	教会に生きる（二）	問66	ウ小85, 86、ハイデ65
		マタイ28:16-20	マタイ28:20 後半
天に上げられた主イエスが豊かな祝福を注いでくださる。主と共に歩もう			
20日 (敬老)	信仰と悔い改め	問67	ウ小86、ハイデ60
		ヨハネ4:1-30	使徒20:21
主イエスと出会い、霊の水をいただいて、神の前に立ち帰ろう			
27日	恵み的手段	問68	ウ小88、ハイデ65
		使徒2:42-47	コリントー3:7
御言葉と礼典と祈りが教会生活の土台である。教会の恵みに生きよう			

も く じ

2009年7・8・9月カリキュラム	
まえがき	長谷川潤 4
巻頭説教	中山 仰 5
日曜学校・教会学校訪問	
CRC メディア・ミニストリーの紹介	山下正雄 9
寄稿	
「引き出す」ことと「響かせる」こと	三川栄二 13
2008年度中部中会教会学校教師研修会講演への応答	
初心に立ち帰って	長谷川潤 15
副読本のご案内	18
『いのちのパン』（「子どもカテキズム」による聖書日課）のご案内	19
自由募金のお願い	20
聖書研究・説教展開例・分級展開例	
7月 5日	22
7月12日	31
7月19日	39
7月26日	47
8月 2日	56
8月 9日	64
8月16日	71
8月23日	80
8月30日	88
9月 6日	97
9月13日	106
9月20日	114
9月27日	122
2009年10・11・12月カリキュラム 130	
2009年度年間カリキュラム 131	
教案誌会計報告 133	
執筆者よりひとこと・あとがき 134	

まえがき

長谷川潤（四日市教会牧師）

今は、新書版書籍の出版ラッシュです。先日、書店の新書コーナーに行きましたら、ある本が目にとまり、早速購入して読んでみました。本の帯には「ミーイズムが日本を滅ぼす！」とあります。昔、非常識だったことが、今日、「常識」となり、昔、非日常だったことが、今日、「日常」に名を変えて、大手を振って闊歩している、そんな事例が数多く紹介されているのですが、要するに、公共の領域でも「自己中」が平気で行われるようになった、このままでは、日本社会は滅ぶと、警鐘を鳴らしているのです。こういった類の本を読む時、今時の若い者は！といった思いを持ってしまいがちですが、年齢に関係なく、老いも若きも日本人が「自己中」に陥ってしまっている事例の連続です。読みながら、我が身を振り返らざるを得ません。

その上で、敢えて、今の子どもたちのことを記させていただきますが、先日、ある中学校で、席替えへの不満から、複数の生徒が「流産させる会」を結成して、担任で妊婦の教師への陰湿ないじめを繰り返していたことが発覚しました。「自己中」による仕返しとしか言いようがありません。このような事件の報道に接する度に、彼らには福音の種がまかれていなかったのだろうかと思わざるを得ません。福音の種がまかれているならば、そのような事件が決して起こらないとは断言できませんが、一人でも福音を知っている子どもがいたならば、事態は変わっていたかも知れません。

私が受洗した80年代は、日曜学校に地域の子どもたちがたくさんいました。それ以前から、ちょっとした日曜学校ブームだったと思います。子どもは誘い合わせて日曜学校に来ていました。ウルトラマン・シリーズの何かは記憶に

ありませんが、地球を宇宙怪獣から守る警備隊の隊長の娘さんが日曜学校の生徒で、隊長が彼女を迎えに行く場面でエンディングというのがありました。地域の子もたちがたくさん通っている分、福音の種まきが広範囲にできたのです。

それが、90年代、オウム真理教事件以来でしょうか、潮が引くように日曜学校から地域の子もたちが姿を消すようになりました。小学校の近くで、日曜学校のチラシを配るのも難しくなってきました。今は、子どもたちへと福音の種まきさえ難しい状況なのです。

しかし、子どもたちによる「自己中」の闊歩にブレーキをかけることができるのは、教会が提供できる福音しかありません。教会の脇の小道を朝に夕に通る、小学生、中・高生たちを眺めながら、今、教会とは無縁の彼らをどのように招いて、どのように福音の種をまいたら良いのかを考えさせられます。しかし、眺めて考えてばかりいると、彼らはすぐに大人になってしまいます。「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、『わたしにはなんの楽しみもない』と言うようにならない前に」（伝道12:1、口語訳）は真理です。

今がチャンスです。危機は好機、チャンスであると言われます。子どもたちが自己中で危機的状况にあるならば、彼らと真っ正面から向かい合って、「自己中」を「神中」へと、それゆえに自分を大切に、隣人を愛し、自然を慈しむ人間へとチェンジさせる福音の種まきができるチャンスです。レッツ、ビギン！ とにかく福音の種まきをしようのスピリットで、全てを聖霊なる神様にお委ねしながら、地域の子もたちを招き続けたいと願います。

「真の幸い」

—ルカによる福音書 11章29～32節による説教—

中山 仰（東ヒロシマ伝道所宣教教師）

群衆の数がますます増えてきたので、イエスは話し始められた。

「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナがニネベの人々に対してしるしとなったように、人の子も今の時代の者たちに対してしるしとなる。南の国の女王は、裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。また、ニネベの人々は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。」

（ルカによる福音書 11章29～32節）

童話メーテルリンクの『青い鳥』を皆さんはご存じでしょう。貧しいけれど、屈託無く生きるチルチルとミチルの兄妹が主人公のお話です。本当の幸せとは何かということ強く私たちに訴えるお話です。

場面は、向かいの豊かな家のクリスマス・パーティをこちらから見つめているチルチルとミチルの兄弟の会話から始まります。突然魔法使いが現れ、向かいの裕福な家の豪華な料理や贈り物をうらやましくはないかいと二人に尋ねます。彼らは、ううん別に。僕たちにはパンもスープも十分与えられていますと答えます。魔法使いは、今時珍しい清らかな心を持っているねと感心します。そこで、幸せになるために「青い鳥」を探してごらんと誘います。「青い鳥」ならこの籠の中にいるよとキジバトを指しますが、その鳥は首のところに灰色の毛が混じっていて、本物の「青い鳥」ではないと魔法使いは言います。魔法使いはチルチルに、額にダイヤが着いている帽子をかぶらせました。そのダイヤを回すと、いろいろな国に行けるのです。そこで「青い鳥」を捜しに出発です。

さあ私たちもチルチルとミチルと一緒に、聖書の世界にタイム・スリップしましょう。ダイヤのスイッチをかちっとひねると、そこはなんと大きな魚のお腹の中です。一人の男の人がいます。どうしてこんな暗い、寂しい船底のような魚のお腹の中にいるのですかと尋ねると彼は預言者であると答えます。彼の名はポニョではなくヨナ。ヨナは預言者ですから、命じられる神さまの言葉をいつでもどこでも伝えなくてはなりません。主なる神は、異邦人の住むニネベの町があまりにも無法で悪が満ちているので神の裁きが迫っていることを伝えに行きなさいとヨナに命令しました。ヨナはそれを断ります。彼はなまけ者ではありません。あんなに悪い町でも、神の言葉を聞いて悔い改めたら神さまは赦してしまわれるからいやだというのが彼の言い分です。ですからヨナはその命令を守りたくなくて、ニネベとは反対に行く船に乗り込みました。ところが暫くすると天候が急に悪くなり、大きな波の前に船は今にも沈みそうになりました。船員たちやお客も混じえて船荷を海に捨てたり、対策を施し、ついに為す術がないので彼

らの神にそれぞれ祈っています。ところがヨナだけは、ひとり何もしないで船底で眠っているではありませんか。この船に乗っている誰かが原因でこの嵐が起きていると確信し、彼らはくじを作ってめいめいが引くとヨナに当たったではありませんか。そこでヨナは自分が神の命令に逆らって、ニネベとは逆の船に乗り込んだことを告白します。それでも彼らは、なんとか努力して船を帰しに戻そうとしますがどうしようもありません。ヨナは、私を海に投げ込んだらこの嵐がおさまりますよと言うし、ますます荒れ狂う嵐の前に、こいつのために私たちみんなを滅ぼさないでくださいと、ヨナを海に投げ込みます。すると、嵐は何事もなかったかのようにぴたっと止んでしまったのでした。

ヨナは海に投げ込まれた後、大きな魚に呑み込まれてしまいました。その魚のお腹の中に三日三晩いてから、陸へはき出されるとそこはあのニネベの町でした。彼は悪徳に満ちた一回りに三日もかかる巨大なニネベの町を歩きながら「あと四十日もすれば、ニネベの都は滅びる」と叫びながら歩きました。すると彼の期待に反して、ニネベの人々は神の言葉を信じ、断食を呼び掛け合い、身分の高い者も低い者も身に荒布をまとって悔い改めました。王様も大臣たちに命令し、全市民が断食をして神の前に悔い改めたのでした。主なる神はそれを見て、裁きをくだすことを止められました。面白くないのはヨナです。ほらやっぱり思った通りだ。神さまは慈しみ深く、恵みに富んでおられるので、あんな悪い奴らでさえ悔い改めたらその悪を帳消しにされてしまった。彼は怒ったまま座り込んでしまいます。そこは日の当たる暑い場所だったので、神さまはヨナにとうごまの木を生えさせ日よけを作って彼の暑さをしのがせます。彼の怒りはおさまりましたが、そのとうごまの木の葉を虫が食い尽くすと、ヨナは神に向かって文句をいいます。「生きているよりも、死ぬ方がましです」と。(ヨナ4：10-11) すると、

主はこう言われた。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

次にスイッチを回すと、幸せの国です。幸せを求めて人々が熱心に働いている姿が目に見え込んできました。みんなで力を合わせて、国を富ませ、みんなで豊かになろうと一所懸命働いている人々が暮らす国でした。どうしたら効率よく生産力が上がるかを日夜研究し、一週間の内何日も眠らない日々が続くほど熱心に勉強していました。他の国に負けないように勉強し、国力を上げ、効率を上げるために機械化し、技術力を上げ、能率を上げ、国民が丸丸となって働くことを目標に立てて努力していました。ですから生産力の上がないような人々を排除し、疎んじていました。勉強のできる人だけが重んじられていました。科学が研究され、目に見えない非科学的なことなど無視されていました。周りにたくさんの鳥や獣も大量に捕獲され、食糧にされたり、商売の利益になっていました。ほとんどの動植物が絶滅の危機にあっていました。もちろん動植物が、減ったら食糧に困るので、養殖、プロイラーや温室栽培、バイオ・テクノロジーを駆使して生産力を上げています。しかし役に立たない動植物など目もくれませんが、相手にされません。

人間の心の優しさ、相手に配慮する気持ちなどほとんど無視されています。神など目に見えないものなど全く信用していません。能率を上げ、自分たちが物質的に富むための利益になる神が崇められています。神の前に一人静かに立ち、神の言葉に聞いて生きようとする人たちはほとんど相手にされません。

しかしなんと、この国には目指す青い鳥がい

ました。青い鳥は無数にいて、観賞用にするために保護されています。かろうじて一羽を捕まえることができました。誰かに見つからないうちに急いでその国を出た途端、青い鳥の毛はすべて真っ黒に変わってしまったのでした。その国の幸福とは何だったのでしょうか。

さて青い鳥が真っ黒になった途端、周りが漆黒で隣の人さえ見えないようなところに放り出されました。およそ私たちが経験したことの無いような深い闇の世界、それ以上に心の中まで黒く染まりそうな深き闇、恐怖で身が固まり身動きできない、希望のない闇です。

何とそこでは、ある人が十字架刑で処刑される所でした。処刑に先だって悲しみに暮れていた婦人たちに向かって、その方は十字架の上から（ルカ23：28-31）

イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言い始める。『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」と言われました。

その十字架上のイエスという御方が、息を引き取られ亡くられるときが来ました。（ルカ23：44-48）

既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの

出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。のでした。異邦人であるローマ帝国の百人隊長は、この有様を一部始終見ていてここに「真の救い」を見たのでした。

その次は光の国です。どこまでも透明な明るい、喜びのあふれる国です。あの十字架で処刑されたイエス・キリストが復活されると弟子たちは喜びを隠しようがありません。ヨナが三日間魚のお腹にいたように、イエスもまた死んで葬られ三日目にお甦りになられたのでした。魚のお腹の中にいるという信じられない出来事は、私たちの愚かしさを象徴するようです。何よりも十字架ということ自体が愚かしい行為なのです。しかしこの十字架により、それまで逃げ隠れしていたお弟子さんたちは彼らの恥を取り去られ、彼らの不義を赦されたと人々に確信をもって話しているではありませんか。

サタンによって肉眼の目は見えていたのですが、実は全く見えていないことに気がつかされたのです。私たちが完全な闇から救い出されるためには、この手段しかなかったと聖霊に満たされて言っています。チルチルとミチルも十字架の中に、十字架を通して貫く光りをはっきりと見たのでした。

自分たちは光の中において、すべてのものが当たり前に見えるということは当たり前ではないということをその時知ります。実は光りしかない処で、私たちは実は何も見えないのです。陰があつて初めてモノが見えるのです。殊に私たちの心は罪を見つめて初めて救いの光を見出すことができるのです。生まれながらの私たちは、その「救いを見る」ことができないのです。ですから、主イエス・キリストが十字架におかかりになることによって、陰になってくれたので私たちはその救いを鮮やかに見ることができます。

チルチルとミチルがそれに気がついた瞬間、

自分たちの家に帰っていたことに気がつきました。彼らは青い鳥を見つけることができなかつたけれども、それに代わる、それ以上の真理を知ることができたのでした。飼っていたキジバトはそのままの青さを保っていました。しかしよく見ると、今や完全な青い鳥になっていることに気がつきます。

二人は幸福の「青い鳥」を捜す旅を終えて、今一度与えられた恵みに対して、心豊かに思い出しながら、聖書を開いて読みました。コリントの信徒への手紙一 1章18節が目にとまりました。私たちも見てみましょう。そこには知恵について、真の知恵について、すなわち真の幸いについて次のように書かれています。

十字架の言葉は、減んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を減らし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」……

兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇るようなにしないためです。神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

聖書のこの箇所を読み終わったとき、足の悪い娘さんを持ったベルランゴー叔母さんが訪ね

て来ました。足の悪い娘のために、その幸せの「青い鳥」を貸してくれないかと申し出ます。二人は、自分たちは幸せですから喜んでその「青い鳥」を叔母さんに渡します。

ちょうど主イエス・キリストの救いの業が、使徒パウロという説教者を通して、キリストの福音の光りが人々の示されたように、彼らは「青い鳥」を叔母さんに託して娘さんに救いの光りを伝えます。私たちには見えないようにサタンがすべての心の目を閉ざしています。それで目が曇り、心はよこしまになっています。2人は真の幸せを捜しに出かけて行って、「闇から光りが輝き出でよ」とおっしゃられる神が、彼らの心の目に光りを与えてくださったのです。ですからチルチルとミチルはイエス・キリストの栄光の福音に接し、救いを見ることができたのです。教会に来られている方々にも、同じ祝福と幸いが提供されています。

その喜びを二人で分かち合い祈っていると、向こうからベルランゴー叔母さんの足が悪く歩くことができなかつた娘さんが、その「青い鳥」を抱いてこちらに向かって来るではありませんか。二人は驚いて喜んで彼女を迎えに家の外に出ました。その娘さんはキリストの言葉を受け入れて、足が治り、全身が輝きに満ちていました。

祈ります。

(エフェソ1:17-18) どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるよう。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。主イエス・キリストのお名前によっておささげします。アーメン。

CRC メディア・ミニストリーの紹介

山下正雄 (CRC メディア・ミニストリー)

インターネットが一般の人たちに利用できるようになって、今年で14年になります。この4月に総務省から発表された数字によれば、日本国内のインターネット利用者数は9,091万人、人口普及率75.3%だそうです。わずか15年に満たない期間でこれほどに普及するのは、通信メディアとしてはいまだかつてない驚異的な速さです。ちなみに自動車電話・携帯電話が15年、FAXが18年かかってやっと全世帯の10%に普及したにすぎないことを思うと、どれほどインターネットが急速に普及していったか、お分かりいただけるとと思います。

CRC メディア・ミニストリーがラジオ放送伝道と並行してインターネット伝道に取り組み始めたのは1997年7月からです。当時キリスト教関係のホームページで検索にヒットするものは、日本国内にわずか20にも満たないくらいの数でした。現在では日本キリスト改革派教会だけでもざっと90近いホームページがありますから、インターネットのキリスト教会への浸透はもはや既成の事実と言わざるを得ません。

インターネットが誰にでも利用できるようになった当初、インターネットが青少年に与える悪影響が多くメディアで取りざたされたことは、まだ記憶に新しいことと思います。特に衝撃を与えたのは、自殺方法を教えるサイトに影響されて、自殺志願者が連れ立って相次いで自殺を図った事件です。あるいは携帯電話とインターネットの普及があいまって、学校の裏サイト掲示板などが特定の生徒の誹謗中傷の場となり、いじめの温床となっている事実も見逃すことはできません。

こうしたインターネットの持つマイナス面

は、残念ながら今なお完全に克服されているわけではありません。そういう事情もあって、インターネットに対して否定的な意見がキリスト教会内に根強くあるというのも否定できません。

しかし、冒頭で掲げた数字が示すとおり、もはやこの勢いを押しとどめることはできません。このインターネットという道具をいかに善い目的のため用いるのか、そして、どのようにしてインターネットの悪用から身を守るのかということ、これからも頭の片隅置いておくべき重要な課題です。



ラジオキャンプにて



ふくいんのなま (メディアミニストリーのホームページ)

さて、いきなりこのような話題で話を始めたのは、インターネットに対する過度の楽観的な見解にも、悲観的な見解にも注意を払う必要を念頭におきながら、記事を読んでいただきたいからです。

CRCメディア・ミニストリーがインターネット伝道に着手したのは、上にも述べたとおり、1997年7月ですから、すでに12年近く携わっていることとなります。CRCメディア・ミニストリーはかつてラジオ伝道部と呼ばれていた通り、1967年に放送を開始した「あさのことば」のラジオ番組がメディアを使った伝道の初めてでした。したがってラジオ放送開始から30周年目にインターネット伝道をはじめたこととなります。

インターネット伝道を始めたばかりの頃は、音声と文字によるラジオ番組の再配信を中心に行っていました。番組素材をそのまま利用できるということもあって、毎日新しい内容を提供することができました。

また、せっかくのインターネット伝道ですので、双方向のやり取りをできるだけ緊密におこなうことができるように、掲示板やチャットルーム、メーリンググループも並行して設置し

ました。これら双方向の活動は限られた数のスタッフでは限界があり、残念ながら数年で活動を見合わせざるを得ませんでした。一晩で700通以上のメールに返事を書いたり、毎晩遅くまでチャットの相手をするのは、一人の人間の能力を超えています。ただ、数年間の活動の中で洗礼を受ける決心をした方たちも何人か現れましたから、訓練されたスタッフさえそろえることができれば、なお有効な伝道の手段であるとしても確信しています。

インターネットを使った伝道を始めた当初からひとつ心にかけていたことは、子供が楽しめる内容を充実させたいということでした。手始めに「キッズコーナー」のページを設けて、子供たちの描いた絵を募集して掲載したり、藤城清治の影絵と聖書のおはなしを掲載したりしました。2003年秋にはラジオ番組「キッズコーナー」を制作し、ラジオとインターネットで放送を始めました。この番組は残念ながら資金難のために今年6月をもって終了してしまいましたが、ホームページ上では引き続き2006年10月以降の過去番組をすべてお聴きいただくことができます。

予算とスタッフの関係でインターネットを使った子供への伝道は思うように進んでいませんが、親子で楽しめる子供向けホームページの充実はこれからも望まれるところではないかと思われます。



キッズコーナー収録風景

もうひとつインターネット伝道を始めたときから心にあったことは、若い層への伝道です。1970年代はラジオ全盛の時代で、この時代には多くの若者がラジオを通してキリスト教会に入ってきました。同じようなことがインターネットでも起こりうることを期待して、ラジオとインターネットをリンクした番組を二つ、1999年4月から制作し始めました。一つは大学受験世代を対象とした「バイブル・ウェーブ」、もう一つはコンテンポラリー・クリスチャン・ミュージックを扱った「CCM+」です。

「バイブル・ウェーブ」は放送開始当時は大学受験番組の直後に放送されていたので、最初からその世代をターゲットにしてきました。番組名自体もインターネットで一般公募し、神奈川県の大學生が命名しました。もっとも、民放から番組がおりた時からで、番組のターゲットを大学受験層の若者よりももう少し広く設定しています。

「CCM+」は今でも日本で放送されている数少ないコンテンポラリー・クリスチャン・ミュージック（以下 CCM と略記）の番組です。おそらく CCM を扱った日本語番組は日本に二つしかないのではないかと思います。CCM を単なるゴスペルやワーシップソングに限定しないで、広く現代クリスチャンによる音楽的自己表現ととらえる点で他番組にないユニークな内容になっています。

まだまだインターネットを十分に駆使して若い世代をつかんでいるとは言えませんが、それよりも、インターネット自体がもはや若者だけのツールではなくなっていますので、あらゆる年齢層を意識したインターネットの使い方が求められているのではないかと思います。

ちなみに去年一年間のホームページ訪問者数は延べ332,232名、閲覧したページ数は延べ159万ページを超えています。訪問者の中には首相官邸や衆議院のサーバからのアクセスもありますから、インターネット伝道の果たす役割

は今後もますます大きくなるのではないかと思います。

ところで今まで述べてきたホームページ伝道に加えて、2007年春から別のタイプのインターネット伝道をスタートさせています。ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) と呼ばれるタイプのインターネットの活用方法です。SNS をどう説明したらよいのか、文章で表現するのはとても難しいのですが、要するに社会的なネットワークをインターネット上に構築し、人と人とのつながりを作り上げていこうとする参加者型のウェブサイトと呼ぶことができます。具体的にはアメリカのフェイスブック、日本のミクシなどがその代表例です。それらの SNS は会員数1,000万を超える大規模な SNS ですが、CRC メディア・ミニストリーが目指しているものはもっと小規模なものです。まだ大々的に宣伝していないこともあって参加者は数百名規模です。



SNS ばじゃばじゃ

この SNS が伝道とどう結びつくのかは、参加者の意識次第だと思います。伝道に直結するというよりも、むしろ相互牧会的な働きや、アイデアや情報の緊密な交換場所としての利用価値の方が大きいのかもかもしれません。参加するためには、すでに参加している人たちからの招待

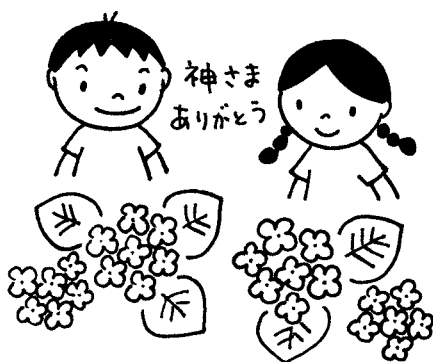
がなければメンバーになることができません。そういう意味では閉鎖されたコミュニティですから、伝道とは縁遠いようにも思われるかもしれません。しかし、会員同士のトラブルが普通のホームページの掲示板より起こりにくいために参加者に安心感があるという利点もあります。

SNSの利用価値はまだまだ未知数ですので、多数の方が参加して利用価値を高めていただけたらと願っています。

最後になりましたが、本文で紹介したメディ

ア・ミニストリーのホームページのアドレスは <http://www.jesus-web.org/>、携帯アドレスは <http://www.jesus-web.org/i/> です。検索のサイトへ行って「ふくいんのなみ」と検索していただければ簡単にアクセスすることができます。サイト内の検索も可能ですので、CSのお話づくりのヒントをキーワードから検索することもできるのではないかと思います。

また、SNSの方は <http://pajapaja.jp> です。参加されたい方は info@jesus-web.org 宛てにメールをください。教案誌の記事を見たを書いていただければ招待状をお送りします。



「引き出す」ことと「響かせる」こと

三川栄二（稲毛海岸教会牧師）

教育するとは、「引き出す」ことだとよく言われます。つまりその人の内にある潜在能力に気づかせ、それを外へと引き出してあげることで、その人自身を開花させていくのです。それが、一般教育の世界で話されていることです。「教育とは引き出すことだ」と。それはまさしく真実で、わたしたちは教育ということで、それが家庭教育であれ、学校教育であれ、さらには教会教育であれ、その人の中にひそんでいる、神が与えられた素晴らしい力や才能を見出し、引き出し、開花させて、さらに豊かに伸びていくように励ましたり、支援したりすることを考えていかなければなりません。やる気をそいだし、意欲の芽を摘んでしまうことがないように、気をつけていかなければなりません。

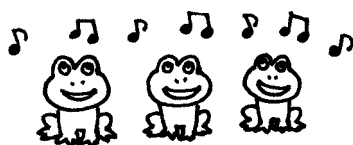
そのことはカウンセリングの世界でも言われます。いわゆるカウンセリングと言われるものの基本はカール・ロジャースという人によって始められた、「非指示的カウンセリング」と言われるもので、そこでは悩みを抱えた来談者自身が、自分で問題解決をはかれるように支援することが目的とされます。相談を受けた者は、たとえ問題解決の方法を持っていたとしても、それを相手に語ったり、指示を与えたりしてはいけません。どこまでも相手の言うことに耳を傾け続け、その人自身が、自分で問題解決の糸口を見出すように、励ますのです。そこでは本人が「気づく」ことが、問題解決の前提にあり、本人はすでに解決の答えを持っているというのが、基本的な考え方です。そこには来談者自身が問題を解決できるという、素朴な人間観があります。

しかし聖書が語る人間は、そういった楽観的な人間観を否定します。墮落し、原罪を持つ人間は、わたしたち改革派神学の立場からすれば、自力で神を認識することができない、霊的に死んだ状態におかれていると理解するからです。つまり自分の内面をどれほど見つめたところで、罪からの救いを発見することも、そこからの問題解決を見出すこともできない、だから特別啓示が必要となってくるのです。そしてわたしたちの信仰は、この神からの特別啓示に基づいて成り立っていくものにはかなりません。「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」とあるとおりです（ローマ10章17節）。自分の内側にある言葉ではなく、また内面を見つめる中で気づかされる言葉でもなく、「外から来る言葉」（神の特別啓示）によって、信仰は始められ、維持され、完成を目指して歩み続けていく、それを導くのが信仰教育なのです。

そこでは、「引き出す」ことや「気づかせる」ことではなくて、「響かせる」ことが大切です。教理問答のことをカテキズムと称しますが、このカテキズムという言葉には、もともと問答という意味はなく、むしろ響かせるという言葉に由来するものでした。外から来た言葉、教会の信仰の言葉を聞き、それが自分の心の中で響かせられて、今度は自分の言葉として信じられ、告白されていくようになる、それが信仰教育です。ですからそこでは、教える者と教えられる者との間に、心の共鳴が必要となります。

相手に、この信仰の言葉をどのように響かせていくことができるか、それは何よりも語る側、教える側の中で、その信仰の言葉がどれほど豊かに響いているかにかかっているのではないのでしょうか。信仰の言葉は、ただ観念的に伝達すれば事足れるで済むものではなくて、まずこちらの心の中で、それが愛と恵みの言葉として豊かに鳴り響き続けている中で、相手にそれが響きとなって伝えられ、互いの中で共鳴しあいながら、ついには相手の心の中でも響き続けていく言葉となっていく、それが信仰教育（カテキズム教育）と言われるものなのです。

信仰の先輩として、教え手として、親として、次の世代に信仰を語っていくとき、そもそも自分自身の中で、この信仰がどれほど豊かに鳴り響いているか、もう一度見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。自分の中で響いてもいないものを、相手に伝えることはできませんし、ましてや響かせることはできません。あなた自身の心の中で、また生活において、キリストの言葉はどのように響き続けているのでしょうか。 (大会教育委員会委員)



初心に立ち帰って

長谷川潤（四日市教会牧師）

2008年度中部中会教会学校教師研修会では、講演に先立って、DVD『日曜学校から始まるキリスト教教育の歩み』（NCC 教育部）が上映され、そこから見えて来る日本キリスト改革派教会の課題を「日本キリスト改革派教会の日曜学校像の確立を目指して」と題して相馬伸郎先生がご講演くださいました（講演は第33号に収録）。私も、研修会に参加し、DVDを視聴し、先生の講演を傾聴する中で、先生と同じような志を与えられている者として、刺激を受け、様々な示唆を与えられました。

相馬先生は、1780年、イギリスの印刷業者、ロバート・レイクスの働きに始まる日曜学校の全体に共通する本質として、それは「運動」、「運動体」であるとされ、日曜学校運動の性格、特徴を次の四点に簡潔にまとめてくださり、その各々に関して善し悪しを述べてくださいました。その四点とは、①「子どもたちを回心に導く救霊運動」、②「信徒中心の運動」、③「超教派運動」、④「慈善運動」です。特に最後の「慈善運動」が日曜学校運動の成立の主要な動機であり、全体の通奏低音であると述べられました。私の力量不足から、その各々に関して応答して、日本キリスト改革派教会が確立すべき日曜学校像を述べることは無理ですので、特に①と④に関連して、今考えさせられている地域の子どもたちへの伝道について、少し述べさせていただきます。

今現在、私が奉仕することが許されている四日市教会は、1888年、米国カンバーランド長老教会ミッションによって開設され、昨年、120周年を迎えました。講演の中で、四日市教会の歩みが開始された1888年当時の統計が

示されています（P.20）。教会数206、信徒数24,133人、日曜学校267校、教師360名、生徒16,820名。これらの数字から、教会数よりも、日曜学校の数が多いことが判り、60校は、教会の外で行われていたということで、先生は次のように述べておられます。「日曜学校は、子どもへの伝道であることはもとより、開拓伝道の拠点でもあったわけです。日曜学校から教会が始まる、これが、日本の草創期のキリスト教伝道の一つの姿でした」。

四日市教会の最初の集会は、1888年12月31日夜10時過ぎに行われました。まだまだ地方においてキリスト教への偏見が根強い時代、集会への妨害を避けるため、大晦日の夜遅くの集会となったと聞いております。その当時、四日市教会の日曜学校がどうだったのかは調べなければなりませんが、最初の集会は、学校の教師だった信徒のお宅で開かれました。ですから、当然、その信徒の方は、自分の教え子たちや地域の子どもたちへの伝道も考えておられ、ヴィジョンに燃えていたに違いありません。

さて、今日、日曜学校を行っていて、通りすがりの人から投石されたりすることはありませんが、1995年のオウム真理教事件以来でしょうか、キリスト教への偏見が根強くなっていることは確かです。1990年、私が神学校1年生の時、西部・板宿教会に派遣されました。クリスマス祝会に地域の子どもたちを招くために、教会前の小学校で、教会学校の先生方と一緒にチラシを配布しましたが、当日になると、子どもたちが来るわ来るわ、2階の会場が子どもたちで一杯になりました。そういう時代が、20年近く前は確かにあったのですが、今日、四日市

教会でも、普段はもちろん、クリスマスの時も、地域の子どもたちが潮が引くように来なくなってしまいました。もちろん、キリスト教への偏見だけでなく、進学塾やお稽古ごとで多忙になるという子どもたちを巡る環境の激変もあるでしょうが、集会の案内チラシを渡した時は「行く！ 行く！」と喜んでいた子どもが、実際来なかったので、「どうしたの？」と後で理由を尋ねてみると、よく耳にするのは、「行ったら駄目！」と親に言われたという理由です。教会外の方々にとっては、世間を騒がしている危険な教団も、私たちも、宗教では一つですので、「何をされるか分からないから、そんな所に行っては駄目！」ということになるのでしょうか。そうすると、私たちに対する世間の眼差しは、1888年当時も、今も、同じなのではないでしょうか。それは、キリスト教や私たち教会に対する無知に基づく誤解や恐れ、不安の眼差しです。

そこで、私は単純な人間ですので、「日曜学校は、子どもへの伝道であることはもとより、開拓伝道の拠点でもあったわけです。日曜学校から教会が始まる、これが、日本の草創期のキリスト教伝道の一つの姿でした」と伺って、刺激を与えられ、私たち教会に対する世間の眼差しが厳しいならば、もう一度、教会草創期の頃の思いに立ち帰って、自分たち教会のことを、そして、何よりも、復活のイエス様のことを地域の子どもたちはもとより、その家族の方々に大胆にお知らせするしかないと思わされました。

その一つの工夫として、四日市教会の日曜学校の全面的協力を得て、この4月のイースターの季節に、「イースター・フェスタ2009」（復活祭）を行い、併設されているまきば幼稚園の園児たちとその家族の方々、地域の子どもたちとその家族の方々をお招きしました。内容は、短い礼拝式でスタートして、時間差で、幼稚園の森でのエッグ・ハント（たまご捜し）、おいしいものコーナー（たこ焼き、フランクフルト、

おでん etc）、バザー、キリスト教書の委託販売、ゲーム・コーナー、まきば文庫開放などなど、まさに地域における復活祭を行いました。イースターは、地域ではほとんど馴染みがありませんから、宣伝に力を入れましたが、当日、閑古鳥が鳴くのではないかと不信仰にも思っていました。しかし、いざ、開幕したら、教会員も含めて90名近くの地域の方々が集まって楽しんでくださいました。最初に礼拝式を行うと、礼拝式を避けてそれが終わってからお出でになる方もいらっしゃるかと思ひ、午後からの聖書クイズ・コーナーにリンクさせて、聖書のお話を聴いたら、クイズが解けて、賞品がもらえると、ちょっとした工夫もしました。土曜で、快晴だったせいか、家族連れが多く、多くの方々が礼拝式から出席してくださったのは、本当に幸いです。

ところで、四日市教会には創立50周年になろうとしているまきば幼稚園が併設され、地域に溶け込んでいますから、地域の方々は、その面での安心感は持っていらっしゃるのかも知れません。この面は、1888年当時には全くなかったことでした。その意味、今日の私たち四日市教会は、教会の先輩たちが命懸けで獲得してくださった教会の地域性をうまく活かしながら、伝道できる訳です。今日の私たち四日市教会は、相馬先生のたとえをお借りするならば、「良い子」となって、そのよき遺産を大事にし、いよいよ活かして行くことが求められていると、このイースター・フェスタを通じて思わされた次第です。

地域の方々は、キリスト教や教会に対する無知に基づく誤解や恐れ、心配に囚われています。世間の人々の誤解を解いてあげることが、日本伝道であるとよく言われますが、地域の子どもたちを通じてその家族の方々の誤解を解くことが、今まさに私たち教会に求められていると思います。そのためにも、やはり、日曜学校の働きがとても重要です。日曜学校こそ、生徒を通

じて、その友だちや家族の方々と接触でき、世間の誤解を解くことに貢献できるからです。閑古鳥が鳴くことを恐れることなく、地域の子どもたち、そして、家族の方々を教会にお招きする努力と工夫を、今の時代だからこそ、続けて行きたいと願います。

それから、相馬先生は、日曜学校運動全体の通奏低音として、「慈善運動」のこことをご指摘くださいました。そして、次のように述べておられます。「わたしは、日曜学校を教会のディアコニア、地域社会への奉仕としても、積極的に捉え直したいと心から願っています。その一方で、レイクスのような信徒が教会の中から起こされ、教会との深い結びつきの中で、子どもたちに対する事業を起こす人が起こされる可能性についても祈ります」。まさに同感です。レイクスは、伝道が動機だっただけでなく、福祉も動機だったとのこと。それで、女性教師と協力して、読み書きを教えたとのことですが、地域の人々へと誠心誠意奉仕し、地域の方々の誤解を解くためにも、今日、地域に対する福祉的な働き、執事的愛の業は本当に重要ではないかと思われています。先に述べたのが、地域の子どもたちを教会へと、さらには復活のイエス様へと招くことならば、こちらは、私たち教会が地域の子どもたちの中へと復活のイエス様と共に積極的に出かけて行くことでしょう。

今日、教会によるいろんな福祉的働きが考えられます。四日市教会では、私が着任する前は、日曜学校で福祉施設を慰問していたとのこと。何とか再開できれば幸いです。それと、日曜学校が担うべきかどうかは議論が必要でしょうが、もしかしたら、賜物ある有志の信徒によるのが良いかも知れませんが、キリスト教会の

よき遺産として、優れた福音紙芝居がたくさんあるかと思います。最近、テレビのニュースを見ていたら、かつての紙芝居が見直されて、復活しつつあるとのこと。大型スーパーの広場にたくさんの子どもたちや大人が集まって、紙芝居師による紙芝居を一所懸命に見ている場面が映し出されていました。ご高齢の方々は懐かしいことでしょう。子どもたちは、今まで余り体験したことのない娯楽のメディアですから、興味津々でしょう。子どもたちに与えられている娯楽のメディアと言えば、ほとんどが一方通行的ですから、面と向かっての、双方向的な娯楽のメディアを本当に新鮮に感じるのかも知れません。そうならば、子どもの脳を破壊するような娯楽のメディアが氾濫する中、健全な娯楽を地域の子どもたちに提供するという意味で、福祉的な働きも可能となることでしょう。もちろん、これは、伝道にもなります。

今回、相馬先生の講演を伺って、初心に立ち帰ることの大切さを改めて教えられ、心から感謝をいたします。日本のプロテスタント教会の草創期の伝道の一つの姿のように、日曜学校を開拓伝道の拠点とできれば、日本伝道の壁も突破できるのではないのでしょうか。日本が敗戦へと至るまでの日曜学校の歴史において、特に日曜学校が盛んだった頃、宣べ伝えられていた事柄には大いに問題がありますが、方法論に関しては、今日の教会が学ぶべき所が多々あるように思います。今日の状況だからこそ、使徒パウロのスピリット、「何とかして何人かでも救うため」(コリント一9:22)を私たちも与えられて、開拓スピリットをもって共々に前進できればと願います。(教案誌編集部員)

副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

再刷発行いたしました。ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのとは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にするジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

「いのちのパン」のぞ案内

(「子どもカテキズム」による聖書日課)

価格 800円

著者 相馬伸郎

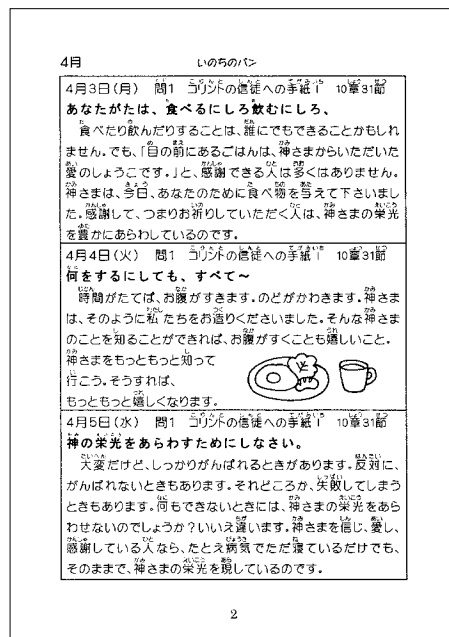
(名古屋岩の上传道所宣教教師・教会学校教案誌編集長)

本誌に掲載された「いのちのパン」が一冊の書物として改訂出版されました。

カテキズムに基づくものとして類のないものです。ご注文は名古屋岩の上传道所まで。



表紙



2ページ

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満8年となり、第34号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

主イエスはゴルゴタで十字架につけられた(19:18)。主を十字架につけた兵士たちは、主が着ておられた服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした(19:23)。

兵士たちと対照するかのように、今日学ぶ箇所では、十字架のそばにいた四人の女性と愛する弟子について言及されている。服を分けた四人の兵士が不信仰者の代表とすれば、愛する弟子と四人の女性は信仰者の代表と言える。

〈四人の女性(19:25)〉

主の十字架のそばに立っていた四人の女性は、ヨハネ福音書によると、イエスの母マリアと彼女の姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアである。これを並行記事(マタイ27:56; マルコ15:40)と比較してみると、イエスの母マリアの姉妹の名はサロメで、彼女はゼベダイの子、すなわちヨハネ福音書の著者ヨハネとその兄弟ヤコブの母と考えられる。ちなみに、著者ヨハネは、この福音書の中で、彼自身の名前も彼の家族の名前も記していない。また、クロパの妻マリアは、ヤコブとヨセフの母マリアと同一人物である、と考えられる(マタイ27:56)。マグダラのマリアは、主イエスによって七つの悪霊を追い出して病気をいやしていただいた女性であり、その後、主イエスに従う者となった(ルカ8:2)。11人の弟子のうち、愛する弟子(ヨハネ)だけが十字架のそばにいたことを考えると、彼女たちの勇気と主イエスへの愛の深さを感じ取ることができる。

〈贖いによる新しい関係の誕生(19:26-27)〉

26, 27節では、主イエスと彼の母マリア、また愛する弟子に焦点が当てられている。主は十字架の苦しみの中で、母マリアへの心遣いを示された。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」(26)。「見なさい。あなたの母です」(27)。これらの言葉は、主が地上の生涯の最後のときに、愛する弟子ヨハ

ネに母マリアを託したことを示唆している。主はなぜ彼女の実の子である弟たちにマリアを託されなかったのだろうか。聖書はそれに言及していないが、恐らく、弟たちはその時点ではまだ信じていなかった(7:5)、彼らに託するよりは愛する弟子に託した方が良くと考えられたと思われる。主の弟たちは、主の昇天後、使徒たちと共に祈っていた(使徒言行録1:14)。復活された主が、主の兄弟ヤコブに現れられた(一コリント15:7)とあるので、主イエスの弟たちは、復活の主に出会ったのち、主を信じるようになった、と推測される。

主は母マリアを「婦人よ」と呼んでおられる(2:4参照)。公生涯に入られてから、主イエスと母マリアとの関係が変わった。いま十字架上で死のうとしておられるイエスは、マリアにとっても主、また救い主であられる。

愛する弟子(ヨハネ)の母は、十字架のそばに立っていたサロメという女性であり、主の母マリアとは姉妹同士であると思われるので、主イエスとヨハネはいどこ同士ということになる。しかし、主がマリアを彼に託されたのは、彼がマリアの甥だったからというより、ヨハネが弟子であり、信仰者であったからだ、と考えられる。「婦人よ」という呼び方から、肉親としての心遣いととも、一人の信仰者としてのマリアへの心遣いだった、と考えられる。

主イエスの十字架による贖いは、信者の間に新しい霊的な関係を創造した。主イエスと贖われた者との縦の関係は、贖われた者同士の霊的な横の結合関係をもたらした。十字架のもとで新しい信者の交わりが生まれた。信者はみなキリストと結合された者であり、神の家族の一員であるがゆえに、兄弟姉妹である。それはこの世のどのような人間関係とも異なる信仰に基づく愛の共同体である。そのような理由で、主はマリアをヨハネに託されたのではないだろうか。(後藤公子)

子どもカテキズム

問51 第五戒は何ですか。

答 「あなたの父母を敬え」、です。

問52 第五戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、私たちに、お父さんやお母さん、先生やお友だちを与えてくださいました。ですから、私たちは、神さまの故に、

お父さんやお母さん、先生の教えてくださることを素直に聞き、
お友だちを大切にすることです。

神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださいました。

参考教理問答 ウ小教理63-66、ウ大教理123-133、ハイデルベルグ104

十戒は、第一戒から第四戒までを神との関係についての戒め、第五戒から第十戒までを人との関係についての戒めと捉えることができます。ただし、第五戒は、後半の戒めもまた神との関係と無関係でないことを良く示しています。

〈父祖たちの神〉

「父母」ということで意味されていることを考えて行くときに、この戒めが神との関係に基礎を置きつつ、人との関係に向けられたものであることが明らかになります。

イスラエルに救いを与え、契約を与えてくださった神は、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」です。父祖たちを契約に入れ、父祖たちが従った神に、イスラエルは従います。神の民として生きて行くということは、父祖たち（父母）の神に従うことを意味しています。

また、十戒の前半を要約する命令とされる「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記6:4-5）という言葉には、これらの言葉を「子供たちに繰り返し教え」るようという命令が続いています（申命記6:7）。「あなたの父母を敬いなさい」という第五戒は、神の言葉を子供たちに伝

えなさいという、父母に対する命令に呼応したものと理解できます。ですから、父母を敬うことは、神を敬うことと切り離すことができません。

〈神が与えられた秩序〉

パウロは、「神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられた」（ローマ13:1）と教えます。「父母」は、神によって立てられた権威として、拡大的に解釈することができます。クリスチャンでない親、キリスト教国家でない政府にも、神の権威に反するのではない限り、従うことになります。

それは、さらに、神が与えられた秩序を守ることと理解できます。目下の者から目上の者に対する事柄だけでなく、目上の者から目下の者、さらに対等な者どうしの関係をも規定しているということです。（『ウ大教理』は、それぞれの場合について丁寧に論じています。）

ただし、神が与えられた秩序は、愛の秩序であることを忘れてはなりません。「私たちの隣人を自分自身のように愛すること」と「私たちが人にしてもらいたいと思うことは、何でも人にすること」（ウ大122）を基礎とした秩序です。

（大西良嗣）

テキスト ヨハネによる福音書19章25～27節
カテキズム 子どもカテキズム 問51、52

〔単元のねらい〕

第五戒から、隣人との実際生活の中でどのように生きるかが問われる。特に子どもたちにとって最も身近な隣人は、両親であろう。説教展開は、幼児、小学生低学年・高学年、中学生と人間関係が複雑になるにつれて異なるかと思うが、神様が、まず何よりも両親をお与えくださっているという真理を大前提に語りたい。そして、キリストにつながるからこそ、人間関係を豊かにする秘訣であることも教えたい。

「神様がお与えくださったお父さん、お母さん」

愛する子どもたち、おはようございます。

今日の聖書には、イエス様が十字架にはりつけにされている間中、そのそばで、お弟子さんのヨハネさん、そして、イエス様のお母さんのマリアさんといった4人の女の人が、イエス様をずっと見守っていたことが書いてあります。

この時、イエス様は、十字架に釘ではりつけにされていました。ですから、とても痛かったと思います。みんなも、頭が痛い時、歯が痛い時は、とても我慢ができませんね。そして、痛みにはばかり気を取られて、人のことなんか考えておれないと思います。イエス様は、十字架に釘ではりつけにされていたわけですから、その痛みは、私たちの頭痛とか歯痛なんか比べものにならないと思います。

ところが、イエス様は、とても痛くても、お母さんのマリアさんへとお心をちゃんと配られておっしゃったのです。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」(26)。そして、お弟子さんのヨハネさんにこうおっしゃいました。「見なさい。あなたの母です」(27)。こうして、ヨハネさんは、イエス様がおっしゃった通りに、マリアさんを自分の家に引き取って、自分のお母さんのように敬って大切にしましたのです。

さて、みんなは、誰一人として、自分のお父さんお母さんを選んで、オギャーって産まれてくることはできません。最近、テレビなどで活躍して、人気のあるスピリチュアル・カウンセラーと言わ

れている人たちは、魂の世界で、魂が自分がいいなと思ったこの世のお父さんお母さんを選んで、この世に産まれて来る、というように言っていますが、それは、聖書が教えているところではないので気をつけましょう。聖書は、みんなの造り主でいらっしゃる神様が、みんなにお父さんお母さんをお与えくださったと教えています。ですから、みんなが、お父さんお母さんを選ぶものではありません。神様が選んでくださるのです。神様が、このお父さんお母さんにこの子を託そうと思われてこそ、オギャーって産まれて来るのです。

みんなは、お父さんお母さんが大好きでしょう。実は、先生は、小学生の頃から、お父さんがとても嫌いになったのです。とても厳しいお父さんだったからです。そして、お父さんと口をきかない時がだいぶ続きました。「なんで、こんなお父さんなんだ！」って、いつも思っていました。そんなことを思いながら、大きくなって、20歳の時にイエス様と出会って、イエス様を自分の罪からの救い主と信じて、洗礼を受けました。そして、イエス様の教え、聖書の御言葉を学ぶにつれて、お父さんに対する見方が変わったのです。そして、今は、お父さんが大好きになりました。先生のお父さん、今は、だいぶおじいちゃんになって、先生が住んでいる所とはだいぶ離れた所で、先生のお母さんと一緒に元気に住んでいます。これから、年をとっていくお父さんお母さんをどのように大切にしようかと、祈って考えています。

そこで、聖書の御言葉を学んで、お父さんに対する見方が、どう変わったかをお話ししましょう。

まず第一に、神様は、「誰と誰にしようかな……」といった感じで、適当にお父さんお母さんをお選びになったのではないということです。神様は、何と、この世界が造られる前から御計画してくださって、いろいろとお考えになって、このお父さん、このお母さんの間に産まれるようにしてくださったということです。このことは、今日の聖書にも示されていると思います。イエス様は、十字架にはりつけにされ、痛みを覚えられながらも、ヨハネさんをマリアさんの子どもとすることになりました。どうして、ヨハネさんなのでしょう。この時は、ヨハネさん以外のお弟子さんたちは、どこかに逃げてしまっていて隠れていましたが、ペトロさん、あるいは、アンデレさんでも良かったのではないのでしょうか。しかし、イエス様は、ヨハネさんが一番ふさわしいとお考えになって、ヨハネさんをマリアさんの子どもとされたのでした。マリアさん、そして、ヨハネさん、お互いの幸せを願われてです。

第二に、神様は、私たちがこの世でしっかりと幸せに生きることができるように、お父さんお母さんをお与えくださったということです（出エジプト20:12後半）。先生は、子どもの頃、本当にお父さんから厳しく叱られ、おしりをひどく叩かれた時のことが、今でも心の中に残っています。けれども、よく考えたら、お父さんは何の理由もなしに先生を叩いたのではありません。先生が、悪いことをしたから、おしりを叩いたのです。もし、お父さんに厳しく叱られずに、放っておかれたとしたら、今ごろ、先生は、どうなっていたことでしょう。

以上のようなことを聖書の御言葉から教えられて、「なんで、こんなお父さんなんだ！」って思

うことが少なくなりました。そして、「今のお父さんをお与えくださって、ありがとうございます！」と思うようになって、お父さん大好きになったのです。

神様は、十戒の五番目の戒めで、「あなたの父母を敬え」（出エジプト20:12前半）とお命じになっておられます。しかし、みんなの中にも、もしかしたら、昔の先生のように、「なんで、こんなお父さん、こんなお母さんを敬わないといけないの？ お父さんお母さんは、うざい！」と思ってる人がいるかも知れません。それで、急に「敬え！」と言われても、「そんなのムリ！」と思うかも知れません。けれども、「ムリ！」と決め付けないでください。

イエス様は、十字架に釘づけにされて痛みを覚えられながらも、マリアさんをヨハネさんのお母さんとされた後、頭を垂れて息を引き取られました（30）。イエス様が十字架で死んでくださったのは、お父さんお母さんを敬うことなんてとても無理とってしまう私たちの罪の赦しのためでした。そして、イエス様は、その十字架の死から三日目に復活なさって、墓の中から出ておいでになりましたが（20章）、それは、私たちをお父さんお母さんを敬うことのできる新しい人へと造り変えてくださるためでした。ですから、決して、「ムリ！」ではないのです。時間はかかるかも知れませんが、みんなを愛してくださるイエス様は、聖書の御言葉によって、きっと、「今のお父さんお母さんをお与えくださって、ありがとうございます！」と神様に心から感謝できるようにしてください。

今週も、みんなが、今は目には見えませんが、十字架の死から復活なさったイエス様と、聖霊によってしっかりとつながっていることができますように。
（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記20章12節前半

あなたの父母を敬え。

〈ねらい〉

神様が私たちのためにお父さん・お母さんをくださったことを知り、神様に感謝する。

〈お話〉

みんなは、どこから来たのでしょうか？ 私たちはみんな、それぞれのお母さんのお腹から生まれてきました。お父さんとお母さんの子どもとして、生まれてきました。それは、世界の初めから神様が決めておいてくださったことでした。○○ちゃんはこのお父さん・お母さんの子どもにしよう、○○くんはあのお父さん・お母さんの子どもにしよう、と、神様が決めておいてくださったのです。

みんなは、お父さん・お母さんのことが好きですか？ どんなどころが好きですか？ 嫌いなどころもありますか？ 優しくて仲良くしているときは好きだけれど、怒られたときには嫌いになってしまうという子もいるかも知れませんね。

神様は、私たち一人ひとりにとって一番良いお父さん・お母さんをくださいました。世界を造ら

れた神様は、私たちのことをとてもよくご存知です。私たちは、お父さん・お母さんのことを好きになったり嫌いになったりすることがあるかも知れませんが、でも神様は、私たちが元気に大きくなっていくことができるように、そして、神様を愛し大事にする人になっていくことができるように、私たち一人ひとりにお父さん・お母さんをくださいました。

神様は、私たちのお父さん・お母さんを通して、私たちへの愛を表してくださっています。だから、私たちが自分のお父さん・お母さんを大事にすることは、私たちにお父さん・お母さんをくださった神様を大事にすることにもなるのです。

〈お祈り〉

神様、私たちにお父さん・お母さんをくださってありがとうございます。お父さん・お母さんを大事にしながら、神様の子どものように大きくなっていくことができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**神様へのサンキュー・カード****■用意するもの**

- ・B5あるいはA4の色画用紙
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・リボン・シール・折り紙など

■作り方

画用紙を半分に折り、カードにする。

カードの内側にお父さん・お母さんの似顔絵を描く。

カードの表紙に神様への感謝の言葉を書く

(「お父さん・お母さんをありがとう」など)。

リボン・シール・折り紙などを使って、カードを飾る。



〈ねらい〉

父母を敬うことは、父母を与えてくださった神様を敬うことである。主イエスによる信仰によらなければ、本当の意味で父母を敬うことはできない。

〈展開例〉**1. 父や母を敬うって簡単なこと？**

みんなは、自分のお父さんやお母さんをどう思っていますか。

- ・どんなところが好き？
- ・どんなところが嫌い？
- ・言うことを聞きたくないのはどんなとき？

「勉強しなさい」とか「早くしなさい」とか、うるさく言うから嫌だなあと思ったことはありませんか。あなたの父と母を敬えと言われても「でもお父さんの〇〇なところは敬えないよ」と言う人がいると思います。父や母を敬うことは簡単なことではありませんね。

敬うとはどういうことでしょうか。親に対してなまいきな態度をとったりしないことです。自分の方が偉いと勘違いしないことです。両親に聞き従うことです。

2. 父と母を敬うことは神様を敬うこと

どうして父と母を敬わないといけないのでしょうか。それは、私たちにお父さんやお母さんをくださったのは、神様だからです。神様は、お父さんとお母さんからあなたが生まれてくるように計画されました。神様は、お父さんやお母さんの手をおして、あなたを育ててくださいます。

赤ちゃんだったとき、お母さんはミルクを飲ませたり、おむつをかえたり、お風呂に入れたりしてお世話をしてくれます。お母さんやお父さんが話しかけてくれるので、言葉を覚えることができます。お父さんやお母さんから愛され、育てられ、いろんなことを学びます。

神様は、お父さんやお母さんを通して私たちに愛を注ぎ、正しい道へと導いてくださいます。

神様が与えてくださった両親を敬うことは、神様を敬うことなのです。

3. イエス様がくださる従順な心

イエス様は、神様の子でありながら、両親のヨセフとマリアを親として敬い、従われました。

イエス様は、私たちの罪を減ぼすために、この世に来てくださいました。イエス様は、両親に従えない固い心を減ぼし、感謝をもって両親に従うことのできる心を与えてくださいます。

お父さんやお母さんの言うことを聞けない人は、学校の先生の言うことも聞けません。両親を敬う心は、目上の人を敬う心へとつながります。神様は、あなたの周りに、正しいことを教えたり、悪いことをしたら叱ってくれる人をおいてくださいます。両親に従うことができると、先生や目上の人に従うこともできるようになります。

4. おてつだい券をプレゼントしよう

「おてつだい券」で感謝の思いを伝えよう。おてつだい券を拡大コピーして色をぬりましょう。おてつだいの内容も書いてね。(p.28参照)



おてつだい券^{けん}

おてつだい券^{けん}



のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}



のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}



のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}



のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}



のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}

のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}

のおてつだい
ガンバります！

おてつだい券^{けん}

のおてつだい
ガンバります！

〈ねらい〉

第五戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉**○あなたの父母はだれですか**

十戒の第五番目の戒めは「あなたの父と母を敬え」です。今はお父さんかお母さんのどちらか、または両方がいないという人が皆さんの中におられるかもしれません。その人たちを傷つけるようなことは言いたくありません。でも、お父さんもお母さんもないという人はどこにもいません。わたしたちすべての人間は二人の親から生まれます。え？「ぼくはお母さんからは生まれたけど、お父さんからは生まれなかったよ」って？ そんなことは決してありません。お父さんも間違いなくあなたの親なのです。

でも「たしかに血はつながっているかもしれないけど、あんな親じゃない。ちっとも親らしいことをしてくれない」と言いたい気持ちをもっている人がいるかもしれません。それは、そういう気持ちをもっているあなたが悪いのではなく、親らしいことをしてくれないあなたの家族に悪いところがあるのかもしれませんね。そういうときはあまり遠慮せずに文句を言ってもよいと思います。親である人が親らしくすることは義務であり、責任でもあるからです。

でも、もちろん自分の親に対してそんなことはできれば言いたくないですよ。その気持ちもわかります。家族が仲良くすること、みんながいつも笑顔でいることがわたしたちにとっていちばん幸せなことです。

また、産んだ親と、今育ててくれている親が違うという人もおられるかもしれません。それは珍しいことではないし、恥ずかしいことでもないし、少なくとも子どもであるあなた自身が誰かから責められたり嫌な思いをさせられたりしなければならぬようなことではありません。きつとつらくて苦しい思いをしたのは、あなた自身なのです。

○子どもに敬われる大人になることも大切

「どの親を敬えばよいのか」と悩んでいる人がおられるでしょうか。悩んでいる人にとってはとても難しい問題だと思います。これはあくまでも私の個人的な意見ですが、親である人が親らしくすることは義務であり責任なのです。単に血がつながっているということだけでちっとも親らしいことをしてくれない人よりも、たとえ血がつながってなくても今のあなたのことを大切にしてくれる人が、あなたの親です。こんなことを教会の先生が言ったとなると怒りだす親がいるかもしれませんが、そういう親には親の務めをきちんと果たしてほしいと願うばかりです。

でも、皆さんに憶えておいてほしいことは、皆さんもそのうち必ず大人になる、ということです。そして、それがいつのことかは分かりませんが、そのうちお父さんもお母さんもおなくなるということ。また、やがて皆さん自身が親になるときも来るでしょう。そのときには皆さん自身が、子どもたちから慕われたり文句を言われたりする立場に立つでしょう。

そのときに、です。皆さんは子どもたちに対してどのように接することができるでしょうか。聖書に「あなたの父と母を敬え」と書いてあるのを自分の子どもに見せつけて、「ほら、こんなふうに聖書に書いてあるじゃないか。この私を敬いなさい」と言うのでしょうか。それはいくらなんでも変ですね。もうちょっとまじな言い方をしなければならぬでしょう。そんなことを言い張る前に、自分自身が子どもから敬われる大人にならなくてはならないでしょう。

第五戒の心は、実はこのあたりにもあります。子どもは親を敬わなければなりません、親は子どもを愛さなければなりません。決して一方通行ではありません。このことを皆さんが大人になるまで憶えておいていただきたいです。

〈お祈り〉

神さま、家族みんながいつも笑顔で過ごすことができますように、アーメン。

〈ねらい〉

父母は、神が立てられた権威であり、それゆえに私たちは彼らを敬い従わなければならないということを学ぶ。

イエスのマリアに対する態度から、父母を敬うべき態度を学ぶ。

〈展開例〉

質問1 なぜイエスは、十字架上という苦しみの中にあっても、母マリアのことを気にかけていたのだろうか。

質問2 イエスに「見なさい。あなたの母です。」と言われた愛する弟子は、なぜイエスの母マリアを自分の家に引き取ったのだろうか。

質問3 十戒には、「あなたの父母を敬え」とあるが、なぜ父母を敬わなければならないと命じられていると思うか。

質問4 あなたは、父母を敬っているか。

質問5 父母は神が立てられた権威であるという観点から見て、あなたの態度は正しい態度だと思うか。もしそうでなければ、どう変わらなければならないと思うか。

まとめ

神は、地上の全ての権威をお立てになり、神の

権威とぶつからない限りにおいて、それに従うことを求められた。父母は、私たちにとって最も身近で、それゆえに敬い従うのが難しい権威である。彼らの弱さや欠点にもかかわらず、それが神によって立てられた権威であるがゆえに、私たちは、神に従う従順さをもって彼らに従わなければならない。それは、神に従う従順を学びそれを鍛える訓練となるからである。私たちが目に見える父母に対する従順を学ぶ時、目に見えない神に対する従順の心が私たちの中に育っていくのである。神の御子イエスが、欠点だらけの人間マリアを、神から与えられた母として敬い、仕え、十字架上の極度の苦しみの中にあっても心にかけて母に対する責任を最後まで果たされたことは、私たちにとって最も崇高な模範である。

〈祈り〉

神様、私たちに父母を与えてくださってありがとうございます。彼らは、人間ゆえに欠点や弱さもありますが、あなたが地上での権威として私たちに与えくださったがゆえに、彼らを心から敬い、従うことができるようにしてください。そして、その事を通してあなた御自身に従う事を学ぶことができますようお助けください。イエス様が神の御子であられるのに、極限の苦しみの中で子としての責任を母マリアに対して最後まで果たされたように、私たちも父母を心から愛し敬うことができるよう力をお与えください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈背景と文脈〉

マタイ5～7章にある山上の説教は、御国の民とされたキリスト者の生活の規範を示したものである。5章21～48節には、「あなたがたも聞いているとおり……」に続いて「しかし、わたしは言うておく」と六回繰り返され、前後の文が対立的に述べられている。この言い方は、主イエスが、律法学者、ファリサイ人の浅薄で誤った律法解釈を正そうとされたことを示唆している。主は「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(5:17)と言われた。主は律法そのものを否定されたのではない。「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることはできない」(5:20)と言われたことからわかるように、律法学者やファリサイ人の律法解釈による義とは異なる正しい律法解釈に基づく義について、ここで教えようと言われている。

〈「殺すな」の真の意味 (5:21-22)〉

今日学ぶ箇所には、「殺すな」という十戒のなかの第六戒に関する教えが書かれている。主イエスの律法解釈の違いは21～22節からわかるように、行為だけでなく、内面的な面、すなわち動機や態度を問題にされる点にある。殺人を犯した者は裁かれ処刑される(民数記35:30-31)とある。この場合の裁きとは、町や村に設けられていた地方裁判所での裁きを指す。主は、命を奪う殺人でなくても、「兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける」(22)と言われた。隣人に怒りを覚え腹を立てることは殺人と同じ罪であることを示された。

また、「兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」(22)とも言われた。殺人行為には至らなくても、言葉の暴力は殺人と等しい。

「ばか」は特に頭脳的能力の点で軽蔑するときに使われる語であるのに対して、「愚か者」は道徳的な欠如を軽蔑する語である、と考えられている。どちらも相手を侮蔑し、相手の人格を傷つけるという意味で、腹を立てるのと同様に殺人罪と等しい。「最高法院」はユダヤの最高裁判所であり、大祭司、長老、律法学者たち70人から構成されていた。「火の地獄」は、永遠に続く神の裁きを表わす。腹を立てたり、言葉の暴力をもって隣人を傷つけることは、殺人罪と同じである。律法学者やファリサイ人が「殺すな」という戒めを殺人行為にだけ当てはめていたのに対して、主は内面的な対立意識、また言葉による侮蔑も殺人であると解釈された。主は、「殺すな」という命令の正しい解釈を示して、御国の民に対する神の御心を教えられた。

〈積極的な和解の必要性 (5:23-26)〉

次に主は、積極的な和解の必要性を教えられた。隣人と対立しているのを思い出したら、何を思い出してもただちに、また積極的に和解する必要がある。「祭壇に供え物を献げようとし」(23)という表現は、当時行われていたエルサレム神殿での礼拝を表わす。献げものをもって神礼拝をしようとしているとき、誰かが自分に反感をもっていることを思い出したら、まずその人と仲直りし、それから供え物を献げることが大切である。隣人と対立していないことが、神礼拝における神との交わりの前提である。

次に、もっと切迫して法的な場に訴訟がもちだされようとしている場合、直ちにその人と和解する必要がある、と言われた。なぜなら、取り返しのつかない結果になるからである。1クアドラントは1デナリオン(当時のユダヤの労働者の日当)の64分の1である。御国の民は、隣人との和の関係を積極的につくる必要がある。禁止されたことを行わないことによる義だけでなく、肯定的、積極的な義が求められる。(後藤公子)

7月12日 「第六戒 殺してはならない」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問53、54

子どもカテキズム

問53 第六戒は何ですか。

答 「殺してはならない」、です。

問54 第六戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまが私たちにいのちを与えてくださいました。

人を殺してはいけないということはもちろん、心の中で人を憎むこと、無視すること、いじわるを言ったり、してはいけない、ということです。

神さまが御覧になれば、それらは人殺しと同じです。

ですから、私たちは、共に生きることを喜び、自分のいのちも大切にします。

参考教理問答 ウ小教理67-69、ウ大教理134-136、ハイデルベルグ105-107

〈神のかたち〉

人は、神が御自身にかたどって造られたものです（創世記1:26-27）。罪を犯して墮落したとは言え、人間は「神のかたち」を残しています。したがって、人を殺すということは、神のかたちに対する冒瀆行為です。（したがって、自分の命を故意に失うことも、「神のかたち」に対する不当な行為となります。）

また、人は、神によって命の息を吹き入れられて「生きる者」となりました（創世記2:7）。神が人に命を与えられたのですから、神の主権を侵して、人間が人の命を奪ってはなりません。

〈自分自身のように隣人を愛する〉

むしろ、私たちに命じられているのは、「神のかたち」である隣人を自分自身のように愛することです。したがって、殺人を禁じられているということは、①より広い意味、②より積極的な意味を含んでいると理解することができます。

①より広い意味

キリストは、実際に人を殺すことばかりでなく、「兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡さ

れ、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」（マタイ5:22）と言われました。

『ウ小教理』問69は、自分や隣人の命を不当に奪うことに至る一切のことを禁じているとまとめています。『ウ大教理』問136は、より具体的に、「罪深い怒り、憎悪、ねたみ、復讐心」などの内面的なこと、「食べ物・飲み物・労働・娯楽の過度の使用」という健康に関わること、「挑発的な言葉、抑圧、口論」などの相手との不和を引き起こすようなことまで、禁じられている罪として挙げています。

②より積極的な意味

殺人を禁じることによって、神が求めておられる積極的な事柄は、「わたしたちが自分の隣人を自分自身のように愛し、忍耐、平和、寛容、慈愛、親切を示し、その人への危害をできる限り防ぎ、わたしたちの敵に対してさえ善を行う」（『ハイデルベルグ』問107）ということです。単に、殺人へとつながることを抑制するのではなく、平和を作り出す者として積極的に振舞うことが求められています。神の民として、そのように主の愛をあらわしていきたいと願います。（大西良嗣）

7月12日 「第六戒 殺してはならない」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書5章21～26節

カテキズム 子どもカテキズム 問53、54

〔単元のねらい〕

第六戒は、実際に人を殺すことだけでなく、思いや言葉による殺人も射程に入れている。そこで、まず、どうして、人を殺してはならないかを聖書全体から教えたい。そして、今回の聖書箇所は、誰の心にもぐさりど突き刺さる御言葉だが、人殺しの繰り返しである私たちのためにこそキリストが十字架で死んでくださったこと、そして、私たちを人への愛に生きる人間へと造り変えるためにこそ復活なさったことも教えたい。

「神様がお与えくださった命」

愛する子どもたち、おはようございます。

今日の聖書には、とてもショックなことが言われています。今日の御言葉は、イエス様が山上の説教の中でお与えくださったのですが、イエス様はこうおっしゃったのです。

「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」(5:21-22)。

どうして、今日の御言葉が、とてもショックかという、実際に人殺しをしていなくても、人に「ばか！」とか「愚か者！」と言うだけで、神様に裁かれることが示されているからです。さらに人に腹を立てるだけで、神様に裁かれると言われているからです。

テレビのニュース番組を見ていると、毎日のように、どこそで誰々が誰々に殺されたというようなニュースが流れます。そんなニュースを見たり聞いたりすると、殺した人に対して、「何でそんなむごいことをしたの？」と思って、「自分だったらそんなことは絶対しない！」と思うことがあります。そんな時、その殺人事件は、全くの他人事ですね。ところが、今日の御言葉によれば、実は、先生自身が、毎日のように殺人事件を起こしていることを思い知らされます。イエス様は、今

日の御言葉を通じて、実際の人殺しだけでなく、言葉による人殺し、さらに思いによる人殺しがあることを教えていらっしゃるからです。誰かに「うざい！ きもい！」と言うことによる殺人、誰かのことを「あいつさえいなければいいのに！」と思うことによる殺人があるということです。神様が御覧になるならば、それらは実際の人殺しと同じで、裁きの対象なのです。

神様は、誰かに対する腹立ち、怒り、憎しみ、ねたみを殺人と見なされます。そして、正義のお怒りの対象となさいます。そうすると、そういった感情は、捨て去るのが一番です。でも、捨て去ろうとすればするほど、毒ヘビが頭をもたげるように、次から次へとそういった感情が湧いて来るのです。それならば、どうしたらいいのでしょうか。

愛する子どもたち、誰かにいじわるされたりして、自分ではどうすることもできない怒りとか憎しみを覚えた時、ぜひ、イエス様に向かって叫んでください。「イエス様、誰々君へのぼくの怒りを取り除いてください！」、「イエス様、どうぞ、何々ちゃんへの私の憎しみをなくしてください！」。誰かに怒りとか憎しみを向けるのでなしに、まず、イエス様に心を向けて、悩み苦しみを隠さずに打ち明けること、そして、イエス様に頼ること、それが、イエス様のお弟子には必要なことなのです。

イエス様は確かに厳しいことをおっしゃいまし

た。しかし、それは、みんなが、実際に人殺しさえしなければ大丈夫と思いたまいたためです。言葉や思いで人を傷つけるぐらいなら、神様は大目に見てくださると思いたまいたためです。ところが、イエス様は、言葉や思いでつい人殺しをしてしまう私たち自身のこともちゃんと御存知なのです。だからこそ、イエス様は、そういう私たちの罪が赦されるようにと、私たちの身代わりに、十字架の上で、神様からの厳罰を引き受けてくださったのです。そういうイエス様ですから、誰かへの怒りとか憎しみをどうすることもできない私たちが頼って来たら、「おまえなんか知らないから、あっち行け！」とはおっしゃいません。怒りとか憎しみがあるままに、私たちを受け入れてくださって、怒りとか憎しみを御自身の御力で和らげてくださいます。ですから、イエス様のお弟子ならば、自分で憎しみとか怒りをどうにかしようとするのでなしに、イエス様にお委ねすることです。

イエス様に頼るならば、イエス様は、どうして、神様が「殺してはならない」(出エジプト20:13)との第六の戒めをお与えくださったかも、聖書の御言葉からしっかり教えてくださいます。

それは、まず何よりも、神様が人間を御自身のかたちに似せてお造りになって、命をお与えになったからです。このことは、聖書の一番初めの『創世記』に次のように教えられています。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』。神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(1:26, 27)。「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形

づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(2:7)。人を殺してはいけない、ということは、人間ならば、普通は、誰の心の中にもあると思います。親とか学校の先生に教えられなくても、人を殺してはいけないことは知っています。しかし、どうして、殺してはいけないか。それは、聖書から教えられなければ、誰も答えることができません。ぜひ、聖書の御言葉から教えられて、どうして、神様は、人を殺してはならないと戒められたのか、そのわけを心に留めてください。人間は、神様に似せて造られているという点で、他の動物と比べることができないぐらいに尊いのです。人間には神様の尊さが映し出されている。さらに神様が体と命をお与えくださいました。体と命は、もともと、神様のものです。そういう体を破壊して、命を奪うこと、つまり、人殺しは、何よりも、神様に対する罪に他ならないのです。

以上のような聖書の教えを心に留めながら、イエス様にさらにお願ひしましょう。「イエス様、どうか、誰々君を、何々ちゃんを、自分自身のように大切にすることができるようになってください!」。あるいは、もう少し欲張ってお願ひしましょう。「イエス様、どうか、イエス様が、誰々君、何々ちゃんのために十字架で死んでくださったように、ぼくも、私も、誰々君、何々ちゃんを大切にすることができるようになってください!」。イエス様は、今も、みんなの目には見えませんが、生きて働いておられます。十字架の死から復活なさったイエス様が、みんなのことを人を憎む人間から愛する人間へと造り変えてくださるのです。

(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章13節

殺してはならない。



〈ねらい〉

私たちが人の体を傷つけたり、言葉や心で憎しみを表したりすることを、神様が禁じておられることを知り、兄弟やお友だちと仲良くする子になっていく。

〈お話〉

みんなは、兄弟やお友だちと喧嘩したことがありますか？ どんなことで喧嘩したのか覚えているのでしょうか？ そのとき、みんなはどんな気持ちになりましたか？

神様は大切な約束の一つとして、殺してはいけない、と言われました。私たちの命は、神様が造ってくださったものだからです。私たち一人ひとりの命は、神様がくださった大切なものなのです。誰も、自分の命も他の人の命も傷つけてはいけないのです。

神様は同じように、人の体を傷つけてはいけない、とも言われました。みんなが兄弟やお友だちと喧嘩をするときも、パンチしたりキックしたりして痛くしてはいけないのです。

みんなの中には、パンチやキックをしたことのない子もいますね。では、兄弟やお友だちに意地悪を言ったり、心の中で意地悪なことを思ったりしたことはないでしょうか？ 私たちの言葉は、目には見えません。だけど、意地悪な言葉は他の人たちの心を傷つけます。みんなのパンチやキッ

クがお友だちの体を痛くするように、みんなの意地悪な言葉や心がお友だちの心を痛くするので

す。
神様は、私たちがそのように兄弟やお友だちを傷つけたり嫌いに思ったりするのではなく、みんなと仲良くすることを願っていらっしゃいます。みんなの兄弟やお友だちも、私たちと同じように神様がくださった大切な命、大切な体、大切な心を持っています。私たちは自分のことを大事にするのと同じように、私たちの周りにいる人たち、兄弟やお友だちのことを大事にするのです。

いつもいつもお友だちと仲良くすることは、もしかしたら難しいかも知れません。兄弟やお友だちのことを嫌だなあと思うことが、あるかも知れません。そんな時は、みんなと仲良くできるように、そして優しい心を持つことができるように、イエス様にお祈りして助けをいただきましょう。

〈お祈り〉

神様、私たちに兄弟やお友だちをくださってありがとうございます。私たちはみんなと仲良くできなくて、意地悪なことを思ったり、言ったり、したりしてしまうことがあります。私もイエス様のように、みんなを大事にすることができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**お祈りポット****■用意するもの**

- ・折り紙を四等分したくらいの小さな紙 数枚
- ・丸めた紙を入れるための容器（ビン・缶・箱・バスケットなど）

■やり方

人にされて嫌だったこと、人にしてしまった嫌なことを、一つずつ紙に書く。

紙を丸めて、お祈りポットの中に入れる。

自分に嫌なことをした人、自分が嫌なことをしてしまった人のために、みんなでお祈りする。

お祈りポットの中の紙は、お祈りの後に小さくちぎって処分する。

〈ねらい〉

人を殺してはならない理由は何か。聖書は、心の中で人を殺すことも殺人であると教えている。

〈展開例〉

1. なぜ、人を殺してはいけないの？

もし、誰かに「なぜ人を殺してはいけないの」と聞かれたらどう答えますか。

- ・自分が殺されたくないから
→殺してほしいと言われたら殺してもいいの？
- ・殺されたら悲しむ人がいるから
→悲しむ人がいなければ殺してもいいの？
- ・逮捕されて刑務所に入れられるから
→絶対に捕まらないなら殺してもいいの？

2. 命は誰のもの？

殺すということは、人の命を奪うことです。

では、その命は誰のものなのでしょう。その人のものですか。その人を生んだ親のものですか。

自分がこの日に生まれようと思って生まれてきた人は誰もいません。自分の命なのに、その命を自由に延ばしたり縮めたりすることは、誰にもできません。命はそれをお与えになった神様のものだからです。

もし、あなたが、お友だちの作った工作を勝手に壊してしまったら、お友だちは怒ると思います。工作はお友だちのものだからです。命は、神様のものです。その命を勝手に壊すことは許されません。たとえ自分の命でもです。神様だけが命を与え、取ることのできるお方です。

3. 心の中の殺人

「あなたは人を殺したことがありますか」と聞かれたら、私たちは、「いいえ」と答えるでしょう。でもイエス様は、「お友だちに対して腹を立てたり、バカと言ったりする人は、心の中で人を殺しているのですよ」とおっしゃいます。

人を憎んだり、悪口を言ったり、いじわるをすることは、「その人がいなくなればいい」と言うことと同じことなのです。たとえ口に出さなくても、神様は心の中をごらんになります。

4. 神のかたちに似せて造られた人間

人の命はどうして尊いのでしょうか。それは人が神のかたちに似せて造られているからです。他の動物は持っていない、人間にだけ与えられているものがあります。神様から与えられた清さ、正しさ、賢さなどです。人間だけが、神様に祈る者として造られました。

イエス様は、神様に似せて造られたこの人間を救うために、ご自分の命を与えてくださったのです。

5. チクチクことばとふわふわことば

「チクチクことば」(言われると悲しくなったり、イライラする言葉)と「ふわふわことば」(うれしくなったり元気の出る言葉)を子どもたちに考えてもらい、大きな紙に書く。一つひとつの言葉を声に出して言ってもらう。言われてどんな気持ちがあったかを話し合う。



7月12日 「第六戒 殺してはならない」 小学科上級

〈ねらい〉

第六戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉

○殺してはならないのは当たり前のことです

十戒の第六番目の戒めは「あなたは殺してはならない」です。あなたは殺してはいけません。「うるさいなあ、そんなことはわざわざ言われなくても分かっているよ」と思われるでしょう。その感覚をぜひ大事にしてほしいと思います。

その感覚がまひしてしまって、憎らしい人の顔を見ると居ても立ってもいられなくなって、あなたの手が思わずぎゅっと握りこぶしを作りはじめるときには、どうか神さまのことを思い出してください。神さまは、激しい怒りにふるえているあなたの姿をご覧になって首を横に振っておられます。「○○君、だめだよ。あなたはそれ以上のことをしてはならないよ」と、心配しながら祈っておられます。神さまはあなたの味方をしてはくさいません。

どうしても怒りを抑えきれなくなって相手を傷つけてしまったとき、または殺してしまったときには、神さまはわたしたちの心に「私は罪を犯してしまいました。取り返しのつかないことをしてしまいました」という苦しい気持ち（罪悪感）を必ずお与えになります。それは一生消えることがありませんし、起きているときにも眠っているときにも、わたしたちを追いかけてきます。人を殺して幸せになった人は一人もいません。このことを忘れないでほしいです。

「いや、そんなことはないんじゃないか」と思う人がおられるでしょうか。だって、相手は悪いやつなんだよ、と。悪い人間が世の中からいなくなればせいせいするじゃないかと。死刑というものもある。あれは悪いやつを殺してこの世界を平和にする方法なのだから、正しいことだし、神さまも喜んでくださるに違いない、と。

なるほどたしかに死刑の問題は難しいです。今の世界の中には、死刑をしないことを決めている国もありますし、死刑を行う国もあります。どち

らにもそれなりに言い分があります。この問題については法律や政治の専門家たちが毎日のように真剣に議論しています。皆さんの中にこの問題に関心がある人は、しっかり勉強してその議論に参加できるようになってほしいです。

でも今の時点ではっきりしていることがあります。それは、死刑というのは個人で行うものではないということです。今のあなたにとって憎らしくて憎らしくて仕方がないと感じる相手がいるからといって、あなた自身がその相手に対して個人的に復讐することは、決して許されないことです。これが今の世界のルールです。死刑を行う国に住んでいるからといって、悪い人間は殺しても構わないと考えることは間違いです。もしかしたらあなたの周りにはいる人の中には同情してくれる人がいるかもしれませんが、神さまは同情してくださいません。

○神さまの願いは罪人が悔い改めることです

神さまが願っておられることもはっきりしています。罪を犯した人が自分の罪を認めて悔い改めることです。「悔い改める」とは、深く後悔すること、もう二度と同じ過ちを繰り返さないと決心すること、これからは良い行いをすることを（神さまと多くの人々の前で）約束することです。

「あんな悪い人間が悔い改めとかするはずがないよ!」と言わないでください。「今さら悔い改めたって遅い」とも。それは言いすぎです。「あなた自身もあの人と同じくらい罪深い人間です」とまでは言いません。そのような言い方は、相手の犯した罪の重さを曖昧にしまいかねませんので。でも、あなたの憎いあの人や自分が自分の罪を悔い改める日を待っておられるのは神さまであるということを感じてほしいのです。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちがいつも穏やかな気持ちでいることができるように、助けてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

殺人の根は、私たちの心の中にあることを学ぶ。
「殺してはならない」の積極的な側面を学ぶ。

〈展開例〉

質問1 昔の人は、何を命じられていたか。

質問2 イエスは、どういう事をする人は裁きを受けなければならないと言っておられるか。

質問3 昔の人が命じられていた事とイエスが命じておられる事はどこが違うか。

質問4 なぜ人を悪く言ったり、心の中で人を憎むことがそこまで重い罰に値するのか。

質問5 人を生かしたり殺したりする権限を持っているのは誰か。

まとめ

イエスが指摘なさった通り、現代の私たちの社会でも人を殺す者は裁きを受けると決められている。しかし、イエスは、こうした殺人という行動からさらに踏み込んで、私たちの心の中にその殺人の根があることを示された。兄弟に腹を立てたり、悪口を言うこともそれに含まれる。それは、

私たちの心に満ちるものが外に行動という形で表れてくるからである。たとえまだ実際にその人に手を下していなくても、悪口を言う時、腹を立てる時、私たちは心の中でその人を殺してしまっているのである。実際に手を下すかどうかは機会があるかどうかの問題に過ぎない。自分と同じように神の形を持つ他の人を殺すことは、命の与え手である神の領分を侵す事であり、人間がしてはならない事である。殺してはならないという戒めとは、そうしたわけで、単に殺さないという行動だけではなく、心の中であってもその人を憎んだり悪口を言ったりしない、そして更には、自分と同じようにその人を愛し、その人の益を求めるといふ心の姿勢によってのみ実現されることなのである。

〈祈り〉

神様、私たちにあなたの戒めを与えてくださってありがとうございます。私たちは、ともすれば心の中で人を憎み、ののしり、腹を立て、あなたの御眼から見れば、毎日たくさんの人を殺しているような者たちです。どうか私たちの心があなたによって清められて、殺人に結びつくような悪しき思いを持たないのみならず、人々を自分自身のように愛し、彼らの益を心から求めるような愛の心に変えてくださるようお願いいたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈背景と文脈〉

主イエスがヨルダン川の向こう側のユダヤ地方で伝道なさっていたとき、ファリサイ派の人々が来て、離婚問題に関して主を試そうとした。当時のユダヤ人は、離婚を当然のことと考えていたようである。なぜなら、申命記24章1節に「人が妻をめとり、その夫となってから、妻に恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる」とあるので、律法は離婚を認めていると彼らは解釈したからである。申命記24章1節に関して、ユダヤ教のシャンマイ派は「恥ずべきこと」を不貞と解釈し、その理由によってだけ離婚できる、と厳格に制限したのに対し、ヒレル派は「恥ずべきこと」を広義に解釈し、不貞以外の理由でも離婚できる、と主張した。どちらの派も、律法は離婚を容認している、と解釈した点では同じである。主は、彼らの質問に、結婚とは何か、という点から答えられた。

〈男と女に造られた意義 (19:3-5)〉

ファリサイ派の人々は、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは律法にかなっているでしょうか」(3)と質問したが、彼らの真意は、離縁が律法にかなっているかどうかを知りたかったというより、どのような理由があると離縁できるか、というものであった。主はその質問に直接答えられないで、「あなたがたは読んだことがないのか」(4)と言われ、創世記の言葉を引用された。「読んだことがないのか」という問いかけは、純粹な意味で尋ねているというより、「律法に通じているあなたがたが、この言葉を知らないはずはないでしょう」という意味合いがある。創世記から申命記のモーセ五書は神の律法と考えられ、もちろん彼らはそれをよく知っていた。主イエスは、あとの時代に語られた申命記24章1節より、はるか以前に起きた創造に関する記事から引用されて、彼らの質問自体が間違いであることを示唆さ

れた。「創造主は初めから人を男と女にお造りになった」(4)は、創世記1章27節からの、また、「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」(5)は、創世記2章24節からの引用である。

「それゆえ」(5)という語は、創世記2章21～22節を指し、なぜ「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」かということ、女が男の一部であるあばら骨から造られたからである。それゆえ、父母を離れて一体となる、すなわち、結婚関係に入るのである。古代社会においては、家族の結びつきは現代社会より強かった。結婚は、父母を離れることによって成立する。この場合の父母を離れるという意味は、物理的に離れるというより、父母から精神的に自立し、新しい家庭をつくることを意味する。

結婚の制度は人間の便利さや勝手な結びつきから生まれたものでもなく、また社会的慣習によるものでもない。創造の初めから神によって定められたものである。「一体となる」(5)という表現からわかるように、結婚は有機的な結合関係であり、創造の初めに神によって制定された聖なる関係である。

〈離婚の不条理性 (19:6)〉

だから、結婚による男と女の結合は決して破られてはならない。なぜなら、神が結び合わせられた結合関係であり、ふたりはもはや別々ではなく、一体だからである。「人は離してはならない」(6)の「人」は不特定の人を表わす。他人であれ、結婚の当事者であれ、人間的な都合により離すことは許されない。なぜなら、人間の側にそうする権利はないからである。主イエスは、離縁に関して、「言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる」(19:9)と厳しい警告を与えられた。

(後藤公子)

7月19日 「第七戒 姦淫してはならない」カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問55、56

子どもカテキズム

問55 第七戒は何ですか。

答 「姦淫してはならない」、です。

問56 第七戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまが、私たちに結婚の祝福を与えてくださいました。

ですから、男の人と女の人との関係を、清く保たなければいけません。

神さまは、結婚によって、赤ちゃんを与えてくださいます。

私たちは、そのときまで、性の関係を持ちません。

参考教理問答 ウ小教理70-72、ウ大教理137-139、ハイデルベルグ108-109

〈神の創造〉

神の創造を考えると、第七戒が決して禁欲的な側面だけを持つのではなく、神が夫婦に与えられた祝福を守り、それを豊かにするための戒めであることが分かります。親心に満ちた、愛情深い戒めです。

神は、人を男と女に創造しました。結婚によって、男女「二人は一体」（創世記2:24）となるように意図されて創造されたのです。二人の関係は、「父母を離れて」と言われるように、両親でさえも介入することが許されない親密な関係です。「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」（マタイ19:6）ほどに神聖な結びつきとなります。夫は、キリストが教会を愛することに譬えられるほどに、妻を愛するように命じられます。キリストが御自身の命を与えるほどに教会を愛されたのと同じように愛することが命じられるのです。また自分の体のように、妻を愛することが命じられています（エフェソ6:25-28）。このような愛の関係は、他の人との間ではあり得ない喜びと平安を与えてくれます。夫婦の関係は、神が与えてくださった宝です。

このような親密な関係の中で初めて性的な関係が許され、また喜びとして与えられています。そして、この愛の関係の中に囲まれるようにして、

子供が生まれます。子供は、このような親密な夫婦の愛の中でこそ、十分な愛情を受けて育つことができるのです。

〈禁じられること〉

したがって、このように大切な夫婦の関係を傷をつける可能性のあること、愛の关系到障害を引き起こすような事柄は、避けられなければなりません。

その最たるものは「姦淫」です。この罪が犯されれば、夫婦の愛の関係を回復することは極めて困難となります。より耳慣れた言葉で言うなら、「不倫」も典型的な「姦淫」です。

結婚前に性的な関係を持つことは、その後に起こり得ることを自分で支配できると考える傲慢さを含んでいます。相手に対する誠実さがあれば、結婚前の性的関係も避けなければなりません。

美しい女性を美しいと思うこと、ハンサムな男性をハンサムだと思うことは、神の創造を喜ぶことでしょう。そのこと自体は健全で罪ではありません。主イエスが言われたのは「みだらな思いで見ることが「姦淫」だということです（マタイ5:28）。そのため、いわゆる「セクハラ」は、「姦淫」に含まれることになるでしょう。

（大西良嗣）

7月19日 「第七戒 姦淫してはならない」説教展開例

テキスト マタイによる福音書19章3～6節
カテキズム 子どもカテキズム 問55、56

〔単元のねらい〕

第七戒を説教するに当たり、神様が男性と女性を造られたこと、そして、神様が永遠の御計画に基づいて男女の出会い、結婚へと導かれることを教えたい。そして、その尊い結婚関係の中でこそ、男女の性の関係が許されていることを教えたい。今日の説教展開例は、思春期にある子どもたちへの展開例とさせていただいた。男女の関係も、キリストの弟子ならば、キリストにお委ねすることが必要であろう。

「神様がお造りくださった男の人、女の人」

愛する子どもたち、おはようございます。

先生が、初めて女の子を意識して一緒に遊んだのは、小学校の2年生の時だったことを憶えています。その女の子の顔は、今となっては全然憶えていません。また、どちらが「一緒に遊ぼう！」と誘ったのかも全く忘れましたが、今でも憶えているのは、ブランコで一緒に遊んでいる情景です。ブランコの椅子の下の地面には雨水がたくさんたまっていました。遊んでいると、女の子が何かのひょうしにおしりごと水たまりの中に落ちこちてしまいました。その結果、どういう状況になったかは想像がつくと思いますが、どうしたわけか、それ以来、その女の子は、先生とは一緒に遊ばなくなっていました。

また、先生が、初めて女の子を好きになったのは、小学校4年生の時でした。同じクラスの女の子で、席替えの時は胸がドキドキ。くじ引きで席を決めますが、その子が隣にならないかなあと祈ったものでした。ある席替えの時なんかは、クラスの担任の先生が、どういうわけか、隣にしたい人を選ぶことができるようにしてくださいました。だけど、先生が好きな女の子は、クラスでとても人気があって、先生はそれほど積極的なタイプでなかったのが、彼女と一緒に座ろうとは言えませんでした。結局、別の女の子と座ることになりました。今から何十年も前のことですが、どうしたわけか、そういうことは、しっかりと先生の頭の中に残っています。

さて、男の子、女の子が、お互いに好きになる。これは、神様が、人間を男の人、女の人にお造りになったのだから、当然でしょう。神様が、人間を男の人、女の人にお造りになったことを聖書で確認しておきましょう。今日の聖書箇所、イエス様は、ファリサイ派の人々の質問に対して、「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女にお造りになった」(19:4)とおっしゃいました。「読んだことがないのか」。そうです。今日だと、旧約聖書になりますが、『創世記』の第1章に書いてあることなのです。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」(創世記1:27)。

そして、神様が、実際、どのように人間を男の人と女の人にお造りになったのかは、『創世記』の第2章に書いてあります。まず、神様は、男の人をお造りになりました。「主なる神は、土(アダム)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記2:7)。最初は、男の人、つまり、アダム独りでしたが、神様は、彼の所にいろんな動物を連れておいでになりました。しかし、アダムは、ふさわしい助け手、つまり、協力者を見出すことができませんでした。そこで、神様は、アダムのあばら骨の一部から女の人エバをお造りになりました。「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部

を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。『ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イチャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから』。こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」（創世記2:21-24）。

男の子、女の子が、お互いに好きになることは、いけないことではありません。みんなの中には、誰々ちゃんをぼくのお嫁さんにしたい、あるいは、誰々君を私のだんなさんにしたいと思っている人がいるかも知れませんね。それは、とてもすばらしい願いです。けれども、ぜひ、今日のイエス様の教えとか『創世記』の教えから知ってもらいたいことがあります。それは、みんなが大人になって、神様がお許しくださる時に、この日本の、さらには世界のどこかの男の人、女の人と出会って、その人と結婚して、結ばれるということです。もしかしたら、その相手は、今、だんなさんやお嫁さんにしたいなどと思っている人かも知れません。実際、世の中には幼なじみと結婚したという大人の人たちがいます。みんなの中のほとんどの人は、まだ全然知らない人と、これから大きくなって、出会って、結婚するかも知れませんね。しかし、今の段階で確かに言えることは、みんなが大きくなって、結婚する相手は、神様だけが知っておられるということです。神様は、この世界が造られる前から、御計画の内に、みんなの結婚相手も、ちゃんと選んでいてくださるのです。これは、とてもすばらしいことです。

そこで、愛する子どもたち、今、もし、お付き合いしている男の子、女の子がいるならば、そういう人に神様が願っておられることをお伝えします。それは、男の子ならば、好きな女の子を大切にすること、女の子ならば、好きな男の子を大切にすることです。

それなら、お互いを大切にするとはい、どうする

ことなのでしょう。たとえば、お互いに好きならば、ふたりっきりになった場合、どうしてもがまんできなくなってしまう時があるかも知れません。世の中では、結婚していなくても、お互い好き同士ならば、性の関係を持って当たり前と思われています。テレビ・ドラマとか携帯小説、マンガでは、そういう男女の関係が普通です。けれども、性の関係を持つことが、好きな相手を大切にすることにはならないのです。相手に嫌われるといけないというので、性の関係を持ってしまった人たちのことをよく聞いたりしますが、たった一度、性の関係を持ってしまったことが原因で、体ばかりでなく心も傷つき、自分たちだけが苦しむのではなく、周りの家族やいろんな人を苦しめることもあるのです。神様は、元々、結婚してこそ性の関係を持つことをお許しくださいました。そして、神様に良しとされ祝福された関係の中で、二人が一体となる喜び、さらに赤ちゃんを授かる喜びをお与えくださいます。

ところで、私たちの心と体は神様がお造りくださって、神様は、私たちを御自身の神殿となさって、聖霊なる神様が住んでいらっしゃるのですから、体ばかりでなく、心も傷つけないように大切にすることです。

けれども、好きで好きでたまらなく、性の関係を持ちたいという思いは、火山のマグマのようなところがあります。爆発したら、どうしても抑えることができないところがあります。しかし、やはり、イエス様のお弟子とされているならば、イエス様に叫ぶことが必要なのではないのでしょうか。「イエス様、自分ではどうすることもできないこの思いに捕らわれてしまって、罪を犯すことがないように助けてください！」。私たちのイエス様は、人の心や体を傷つけることになる、罪深い思い～欲情や欲望も、御自分の十字架にちゃんとはりつけにしてくださる御方でいらっしゃることを覚えましょう（ガラテヤ5:24）。イエス様と二人三脚で、お互いの心と体を大切にしてください。（長谷川潤）

【今週の暗唱聖句】 出エジプト記 20章14節

姦淫してはならない。

〈ねらい〉

結婚は神様が私たちのために備え、祝福してくださる関係であることを知り、相手を大切にすることを学ぶ。

〈お話〉

みんなは、大きくなったらどんな人と結婚したいですか？ みんなのお父さんやお母さんみたいな人でしょうか？ 将来、みんながどんな人と出会って結婚することになるのか、楽しみです。結婚は、神様が決めたことでした。世界を創造されたとき、神様は男の人と女の人を創られました。そして、男の人と女の人がお互いに助け合いながら一緒に生きていくことができるように、結婚というものを決めました。結婚をするときは、男の人も女の人もお父さん・お母さんから離れて、二人で新しい家族となって生きていきます。

これからみんなが大きくなっていくと、結婚したい！ と心から思う人に出会うでしょう。神様がみんなのために、夫や妻になる人を用意してくださっているのです。みんなが助け合いながら、

一緒に生きていくための相手です。そして、その人と結婚をして子どもが生まれると、今度はみんながお父さん・お母さんになるのです。

結婚は、神様が創り、私たちのために用意してくださったとても大切なものです。だから私たちも、自分の結婚相手となる人を大切にしていきたいです。相手が嫌がるようなこと、悲しむようなことをしてはいけません。神様が私たちのために用意してくださった人を大切にし、その人との結婚という特別なつながりを大切にしたいです。

みんながこれから大きくなっていった夫・妻になる人に出会うまで、イエス様に助けていただきながら、大好きな人を大切にできる人へとしていきたいですね。

〈お祈り〉

神様、結婚を創ってくださってありがとうございます。神様が私たちのために用意してくださっている、将来の結婚相手を大切にできる人になれるように、助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

未来の自分への手紙

■用意するもの

- ・便箋
- ・封筒

■やり方

一年後の自分宛に手紙を書く。一年後の自分がどんなことをしているのか、どんなことが好きなのか、周りがどう変化しているか、などを想像しながら書く。手紙の長期保管が確実に可能であれば、二年以上先の未来の自分宛の手紙にしても良い。

手紙を封筒に入れ、「一年後の〇〇へ」と宛名を書く。

手紙は教師が預かり、保管する。年度が替わる際には、きちんと引き継いでおく。



7月19日 「第七戒 姦淫してはならない」小学科下級

〈ねらい〉

神様は、人を男と女に造られ、結婚によって一つとなるように定められた。姦淫はその結婚の一体性を壊すものである。

〈展開例〉

1. イエス様の御言葉から

なぜ、離婚してはいけないのかについて、イエス様はどうおっしゃっていますか？ ふさわしい言葉を書きましょう。(マタイ19:4-6)

「創造主は初めから人を_____と_____とお造りになった。それゆえ、人は_____を離れてその妻と結ばれ、二人は_____となる。だから二人はもはや別々ではなく、_____である。従って、_____が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

結婚は人が考え出したものではありません。神様がお定めになったものです。神様は、人間を男の人と女の人に造られました。アダムのところにエバを連れて来てくださったのは神様です。アダムは、神様が与えてくださった、自分にぴったりの女の人(エバ)を見てとても喜びました。

「一体となる」というのは二つのものが一つになることです。二枚の紙がのりで張り合わされてぴったりくっついてはがれなくなったような状態です。無理にはがそうとすると破れてしまいます。

神様によって体も心も一つとされた二人を、人は引き離すことはできません。

2. 結婚式の誓いから

結婚式に出たことはありますか。結婚式では、花婿と花嫁が次のような誓いをします。「あなたは、神の教えに従い、きよい家庭をつくり、

夫(妻)としての分を果たし、常にあなたの夫(妻)を愛し、敬い、慰め、助けて、死が二人を分かたずまで、健やかなときも、病むときも、順境にも、逆境にも、常に真実で愛情に満ち、あなたの妻(夫)に対して、固く節操を守ることを誓約しますか?」

これは、「私は一生、どんなときでもこの人を愛します。この人以外の人とは、心も体も一体となるようなことはしません」という誓いです。

結婚しているのに、他の人を好きになったり、夫婦にしか許されていない深い交わりをすることは許されません。それは、二人が一体であることを壊してしまうことだからです。

3. 将来に備えて

大きくなったらどんな人と結婚したいか、考えたことはありますか？ カッコいい人？ 優しい人？ おもしろい人？

神様は、あなたに合った、世界中でたった一人の人を用意していただきます。その人と出会ったとき、きっとアダムさんのように「この人は私にぴったりの人だ」と思うでしょう。神様は一番よいときに、その人と出会うことができるようにしていただきます。

そのときを楽しみに祈りつつ、体も心も大切にすることを神様は喜ばれます。

4. ぴったんこゲーム

〔準備〕

厚紙を切って、いろいろな素材ものを貼る。(フェルト・和紙・布・サンドペーパー・コルク・綿・ガーゼ・プチプチ・レースなど) それを半分切る。

〔遊び方〕

目隠しをして、同じ素材のものを手の感触で探してペアにする。

7月19日 「第七戒 姦淫してはならない」小学科上級

〈ねらい〉

第七戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉

○相手は人間です

十戒の第七番目の戒めは「あなたは姦淫してはならない」です。姦淫というのは皆さんには耳慣れない言葉ですが、それは悪いことなのだとすることをしっかり憶えておいてください。でも、浮気とか不倫という言葉ならきっとどこかで聞いたことがあるでしょう。しかもそれは、どこにでもよくある話だし、みんなやっていることだから別にいいんじゃないのーというような軽い調子で語られている言葉として、です。

冗談じゃありません！ 浮気も不倫も姦淫です。それは非常に悪いことです。だれかがそのような軽い調子の話をしていても絶対に騙されないでください。姦淫はあなたが本来愛すべき相手（夫や妻や子どもたち）を傷つけることであり、あなたが姦淫を犯している相手とその人の家族のみんなを傷つけることであり、あなたと共に生きている多くの人々を深く傷つけることです。そして何よりあなた自身を傷つけることであり、あなたが正しく生きることを望んでおられる神さまを傷つけることです。

人が人を好きになることは自然なことであるという言い分は分かります。世界には何十億もの人がいて、だいたい半分ずつ男の人と女の人がいる。こんなにたくさんの人がいるのに一生のうちただ一人の人だけを愛するなんてできっこない。好きな人と結婚しても、長い人生の中ではその人を嫌いになるかもしれない。もっと素敵な人に出会えば目移りするかもしれない、など。そういう話はしょっちゅう耳にします。

しかし、です。もしあなたが「わたしの心の中にどのような思いがあるのか」ということまで教会の先生からとやかく言われたり探りを入れられたりするの嫌だ」と思うなら、ある意味でそのとおりですが、言わせてもらいたいこともあります。あなたが誰かを好きになることは、あなたの勝手

かもしれませんが、でも、そのことによってあなたが誰かを傷つけてもよい権利はあなたにはない、ということです。

あなたの目に見える異性の姿はとても魅力的なものであり、ひとときも離れていたくないと感じられるほどかもしれません。でも、それはそれでです。話をすり替えてはいけません。相手は「人間」なのです。そのことを絶対に忘れてはなりません。あなたの相手は、絵でも人形でもありません。その人なりの人生があります。その人のご両親や共に生きてきた兄弟や仲間や先生たちがいます。そしてその人も、神さまがお造りになった「人間」なのです。あなたの気を紛らわすための、またあなたの一時的な思いを果たすための都合のよい道具ではありません。

もし誰か異性がそのような（良くない）関係を強く求めてきたとしても、そのことが「姦淫を犯してもかまわない」と考えてもよい理由になりません。それは卑怯な考え方です。たとえ相手が自分よりも年上であるとか社会的に高い地位にあるような人であっても、です。誠実な態度できちんと断ってください。

○どこまでは許されるのでしょうか（？）

「先生の話はよく分かりました。それならば、どこまでは許されるのでしょうか」と聞きたい人もおられるかもしれません。手をつなぐことくらいは構わないだろうとか、同じ部屋に二人だけいても何もしなければよいではないとか、メールだけならいいでしょうとか、他の人に見つからなければ大丈夫ではないか、など。

その質問に私は答えないでおきます。神さまがあなたの心の中身をご存じですから。そこに下心があるかどうかを。それが少しでもあるとしたら、あなたのしていることは「姦淫」です。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちが本当に愛すべき人々を心から愛することができるようになってください。イエスキリストの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

神の、男と女に対する創造の時から、結婚という御心について理解する。

結婚相手以外との性的な関係（姦淫）が神の禁じられている事であり、それが結婚関係を破壊するものであるということについて考える。

〈展開例〉

質問1 イエスは、神は人をどう創られたと言われたか。

質問2 男が父母を離れるとはどういう意味か。

質問3 男と女が一体となるとはどういう状態を指すか。

質問4 男と女を結び合わされるのは誰か。

質問5 結び合わされた男と女を他の人が離すことはゆるされているか。すなわち、ファリサイ派の人々の質問にイエスは何とお答えになったということになるか。

まとめ

ファリサイ派の人々は、申命記24章1節を根拠として、夫が妻を離縁することは、しかるべき理由があれば可能なことであると考えていた。しかし、イエスはこれに対して創世記を引いて、神が人を男と女とに創造されたそもそもの理由を考えてみよと迫られた。男と女とは、人間として双方が対等に創られ、結婚する時には、精神的にも

経済的にも両親から自立して新しい家庭を二人で築く。この二人は、両親ですら入り込むことができないほど親密な愛の関係を築き、その愛の中で性的な関係もゆるされ、子供も与えられ、育てられていく。このように男と女を特別な結婚という関係に導かれるのは神ご自身であるがゆえに、他の人間は、この二人の関係を破ることはゆるされない。つまり、イエスは、離縁が可能である事を前提としてご自身に離縁の該当事由について質問したファリサイ派の人々に対し、その前提自体が誤ったものであると示されたのである。結婚関係にない男女の性的関係は姦淫であり、それは神が禁じられる事である。神が人間に賜物として与えられた性的な関係は、神が結び合わせ給うた結婚関係の中でのみ祝福を受け、喜びをもたらすものとなるのである。

〈祈り〉

神様、私たちに結婚の関係を与えてくださってありがとうございます。結婚はあなたが結び合わせてくださる関係であり祝福されたものであるはずなのに、人間の罪によって汚される事が多いことを懺悔いたします。どうか私たちがあなたのお決めになった相手に出会うまで自分自身を純潔に保つことができますようお助けください。また、結婚関係に入ってから誘惑から守られ、結婚相手以外との性的な関係を持つことなく、神様から与えられた結婚の祝福の中で生きることができるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈背景と文脈〉

主イエスは十字架にかかれる前、終末について弟子たちを教え、それに関して多くの警告を与えられた。それらはマタイ24～25章に収められている。特に24章45節～25章30節には、主が語られた三つの譬え話が収められていて、再臨を待つキリスト者はどうあるべきかの指針を与えてくれる（註、25:31-46を譬え話に分類する人々もいるが、現代は、そうでないと思える人の方が多いようである）。

24章45～51節（忠実な僕と悪い僕）と25章1～13節（十人のおとめ）の二つの譬え話は、いつかわからない再臨に備えることの大切さを教えているのに対して、今日学ぶタラントンの譬え話は、再臨を待つ者の生き方について教えている。

〈タラントンを預けられた僕たち（25:14-18）〉

「旅行に出かける」（14）とは、主イエスが昇天されることを指し、「主人が帰って来て」（19）は、主の再臨を指す。主の昇天から再臨までの間、私たちはどのように生きるべきかが、この譬え話の主題である。

主人は旅に出るにあたり、三人の僕を呼んで、彼の財産を預けた。彼らの能力に従って、それぞれ五タラントン、二タラントン、一タラントンを預けた。タラントンはギリシャで用いた計算用の単位で、6,000デナリオンに値する。一デナリオンは当時の労働者の一日分の賃金に相当するので（マタイ20:1-16参照）、一タラントンでもかなりの額であることがわかる。

五タラントン預かった僕は、早速出て行き、それで商売をして五タラントンの利益をあげた。また二タラントン預かった僕も同様にし、二タラントンもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人から預かった金を隠しておいた。先のふたりの僕が、すぐ出て行って預かったタラントンを活用したのに対して、三人目の僕は、それを全く活用しなかった。

〈主人の評価——称賛と叱責（25:19-30）〉

主人が旅から帰り、清算の時が来た。五タラントン預かった僕は、その五タラントンと共にもうけた五タラントンをもって来て、主人に差し出した。また二タラントン預かった僕も、その二タラントンと共にもうけた二タラントンを差し出した。主人は、この二人の僕を忠実な良い僕と称賛し、わずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう、と言った。しかし、三人目の僕は預かった一タラントンだけを持って来て差し出した。彼はそれを全く活用しないで、穴の中に隠しておいたからである。

タラントンは何を指すだろうか。「タラントン」という語から、才能という意味をもつ英語のタレントが派生した。それで、タラントンについても、特別な才能、賜物と解釈する人が多い。しかし執筆者自身は、そのように狭義に解釈するより広義に解釈する方がいい、と考えている。実際に、私たちに属するものは何もなく、すべてのものは主からの預かりものだからである。すなわち、命、体、家族、社会的地位、財産、教育、才能、知識、霊的な賜物など数え上げればきりが無い。それらは僕である私たちの持ち物ではなく、活用して主に利益をもたらすために、私たちに一時的に預けられているものである。預けられているものに私たちは責任を負っており、いつの日か清算のときが来る。

称賛されたふたりの僕は、僕としての意識とそれから生まれる使命感によって、彼らの利益にならないと知りながら、忠実に主人のために働いた。「怠け者の悪い僕」と叱責された僕は、「あなたは時かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方」（24）と言っているように、主人に対しての見方が曲っていた。僕としての意識と使命感、また主人に対する畏敬の念が欠かしていた、と言える。（後藤公子）

7月26日 「第八戒 盗んではならない」カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問57、58

子どもカテキズム

問57 第八戒は何ですか。

答 「盗んではならない」、です。

問58 第八戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの持っているものすべては、神さまから与えられたものです。

人の体やもの、時間を盗んではならないということはもちろん、

自分自身のお金、持ち物、時間をも大切に用いなければならない、ということです。

私たちは、自分自身を神さまにおささげし、

十分の一献金をささげて、神さまに栄光をお返しします。

参考教理問答 ウ小教理73-75、ウ大教理140-142、ハイデルベルグ110-111

〈神の所有〉

私たちが信じている神は、全世界を創造し、それを保ち、治められている方です。したがって、世界のすべてのものは、神が造られ、神が所有されているものです。

すべてを所有される主は、ある人々には多くのものを、ある人々にはそれほど多くはないものを与えられました。多く与えられた者は、多くの責任を持ち、少なく与えられた者は少ない責任を負っています。

このように、神が御自身の計画に従って、財産と責任を与えられたのですから、私たちは盗む必要がありません。少なく与えられているように見えても、私たちにはすべての必要が与えられるのであり、私たちは主によって養われます。私たちが行うべきことは、神の国とその義を求めることであり、自分自身に与えられている財産をそのために適切に用いることです。

礼拝は、私たちが神のもの（神の所有、神の民）であることをよく表します。一定の時間を、神のために取り分けて、礼拝の時間としてささげます。また、献金によって、日々の必要が神ご自身の恵

みによって与えられたことを感謝し、主の民としての献身のしるしとします。

〈他人の財産に対して〉

他人の財産もまた、神によって与えられたものであることを考え、誠実に取り扱うことが求められています。他人の財産を「盗む」のであれば、神が与えられた秩序に齒向かう行為となります。同時に、神が養ってくださるという約束にも信頼しないこととなります。

「盗む」ことには、目に見えるものばかりでなく、不誠実な契約や取引などを含めることができます（『ウ大教理』141参照）。この世の法律において合法とみなされることであっても、立場の弱い者に対する搾取となるような契約、素人が理解できないうちに不利益を被るような取引、その人が持つべき権利を奪ってしまうような行為は、「盗む」ことに含めてしかるべきでしょう。このような視野を得たならば、今日、私たちは、「盗み」に関わる事柄に取り囲まれていることに気づかされます。キリスト者として、それらの問題を誠実に考える必要があるでしょう。（大西良嗣）

7月26日 「第八戒 盗んではならない」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 25章14～30節
カテキズム 子どもカテキズム 問57、58

〔単元のねらい〕

第八戒に子どもたちが感謝して生きるためには、神様から、子どもたち一人ひとりにふさわしい賜物が十二分に与えられていることをまず知ることが必要である。そして、自分への賜物を用いて、その賜物をいよいよ豊かにしながら、神様と人にとに仕えることが、キリストの弟子にふさわしい生き方であることを教えたい。

「神様がお与えくださったもの」

愛する子どもたち、おはようございます。

今朝の聖書の箇所は、イエス様がお語りになったタラントンのたとえ話です。「タラントン」は、みんなには馴染みがないと思います。日本はお金の単位は「円」ですが、イエス様の時代のギリシアのお金の単位が「タラントン」でした。イエス様は、天国のたとえ話として次のようにお語りになりました。「ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた」（マタイ25:14-18）。この後、主人が帰って来て、僕たちと精算を始めるのですが、主人から預かったお金を基にして商売してもうけた人たちは、主人にほめられ、主人から預かったお金を地中に隠していた人は、主人から叱られたというのが話の内容です。

ところで、主人は、それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、そして、一人には一タラントン預けました。このことでちょっと思い巡らしたいのですが、主人は、一人ひとりの能力、たとえば、商売力をよく知っていたので、それぞれにふさわしい数のタラント

ンを預けました。ところが、たとえ話の中では、誰一人として、タラントンの数の差に何ら不平、不満はもらしていません。一タラントン預けられた僕でさえ、「え～っ、たった一タラントンかよ！」とは言いませんでした。もし、先生が、僕の一人だったとしたら、自分が預かったお金の数を見て、「あいつはあんなに一杯なのに、なんで俺はこんなに少ないの？」と、口には出さなくても、心の中で思ってしまうかも知れません。

最初の間人間アダムとエバが善悪を知る木の実を取って食べて以来、人間は、自己中心となりましたから、人と比べて、自分が不利だと、何とか、人よりも、有利に立とうとして、手段を選ばずもうかることだけを考えるようになりました。盗みや強盗です。今日のインターネット社会、パソコンを使って、人から大金をだまし取る手口も多くなりました。また、高齢化社会にあって、電話で孫と名乗って、事故を起こしたから大金が必要だと、お年寄りに送金させて、だまし取る手口など、もうけるためならば、その手段はますます選ばれなくなって来ています。自己中心の人間という視点から読むと、たとえ話に登場している僕たちは、自分たちの分をわきまえているということでは、たとえば、一タラントン預けられた僕からも、教えられるところがあると思います。

それで、まず覚えたいのは、このたとえ話の主人は神様で、僕は私たちのことだということです。そして、私たち一人ひとりには、その力に応じて、

神様からタラントンが預けられているということです。「タラントン」は、元々はお金の単位でしたが、これが、「天賦（生まれつき）の才能」を意味するようになりました。「天から分け与えられた才能」のことで、英語では「タレント」です。つまり、私たち一人ひとりには、その力に応じて、神様から、才能を初めとするいろいろなものが分け与えられているということをまず覚えたいのです。私たち一人ひとりにふさわしい、神様からの預かりものが、十二分すぎるほどあるということです。神様は、それぞれにふさわしく、いろいろなものを分け与えてくださいますから、そうすると、人と比べることはナンセンスです。たとえば、みんなが気になるのはやはり自分の顔とか体の格好ではないでしょうか。どうしても、人と比べてしまいますから、あの人のようになりたいとか、あの芸能人のように格好良くなりたと思ってしまいがちです。美容整形外科が大流行で、有名タレントを使ったコマーシャルを大々的にやっているクリニックもあります。しかし、私たち一人一人は、世界に二人とない貴重な存在として、神様によって造られていることを覚えたいのです。神様は、私たち一人ひとりを愛しておられるからこそ、私たち一人ひとりにふさわしい顔や体をお与えくださったことを覚えたいのです。

さて、人と比べて、自分が不利だと分かると、何とか、人よりも、有利に立とうとして、手段を選ばずにもうかることだけを考えてしまわないために、まず、神様と自分との関係をしっかりとらせることです。神様は、私たち一人ひとりにふさわしい、本当に十二分すぎるタラントンを預けておられるのです。そのことをしっかりとらせることができるならば、旧約聖書の『詩編』第23編は、まさに私たち一人ひとりの信仰の歌になるでしょう。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」（詩編23:1）。このことを覚えることができるならば、私たち一人ひとりにふさわしい、十二分すぎるほどのタラントンを預けてくださ

た神様への感謝の思いから、たとえ話の二人の僕たち、五タラントンを預けられた僕、二タラントンを預けられた僕のように、その預けられているタラントンをもっともっと開発して、神様と人にお仕えしたいという思いがわいて来るはずで、神様も、私たちがタラントンをもっともっと開発して、たくさん増やして、神様の御国のために役立つことを願っておられます。反対に預かっているタラントンを放ったらかしにしておくことは、神様が願われるところではありません。神様は、一タラントン預かった僕に対するように、怠惰を戒められます。

そうすると、神様から預かっているタラントンをよく使ってお仕事することがとても大事となりますね。まだ、みんなは、幼稚園に通っていたり、小学生だから、お仕事すると言われても、ピンと来ないかも知れません。けれども、お仕事というのは、何も、大人になってからすることではありません。お仕事は、神様から預かっているタラントンを使って、神様に、人にお「仕」えする「事」です。ですから、神様からタラントンを預かっている以上、誰もができることなのです。たとえば、幼稚園の子どもたちにとっては、みんなと仲良く、いっぱい遊ぶことがお仕事でしょう。小学生の子どもたちにとっては、遊ぶこともお仕事かも知れませんが、お勉強することも、立派なお仕事なのです。そして、ピアノをひくのが大好きとか、絵をかくのが大好きな人は、そのタラントンをどんどん増やしてみてください。たとえ話の主人は、預かったタラントンを忠実に用いて一所懸命にお仕事した僕たちに、「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」（25:21,23）と言いました。神様も、天国で同じように喜んでくださいます。自分が預かっているタラントンを思う存分使って、神様と人々に役立つていきましょう。（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕 出エジプト記 20章15節

盗んではならない。

〈ねらい〉

私たちの持っているものはすべて神様がくださったものであることを知り、自分のものも他の人のものも大切にすることを学ぶ。

〈お話〉

みんなの宝物は何ですか？ みんなは、自分の宝物を大切にしていますか？

私たちが持っているものはすべて、神様がくださったものです。この世界にあるものはすべて神様が造られたもので、すべては神様のものなのです。

私たちの命も体も、神様が造って私たちにくださいました。私たちの周りにいる家族やお友だちも、私たちが持っているものも、すべては神様がくださったのです。

みんなは、どんなことが上手ですか？ 何をするのが好きですか？ ピアノが弾ける子、絵を描いたり字を書いたりするのが上手な子もいます。サッカーやかけっこなどの運動が得意な子も、勉強が好きな子もいるでしょう。そのように、みんなが得意なことや好きなことをする力も、神様

がくださいました。上手になれるようにがんばる力も、神様がくださったのです。お友だちに優しくしたり、よくお手伝いできる子もいるでしょう。その優しい気持ちも、お手伝いしようとする心も、神様がくださいました。

私たちの持っているもの、私たちの周りにあるものは、すべて、神様が用意してくださった宝物です。だから、私たちは自分がいただいたものを大切にします。そして、他の人たちのものも大切にします。他の人たちのものも、私たちと同じように、神様がくださった宝物だからです。

神様がみんなにくださった宝物は、どんなものがあるでしょうか？ 神様が私たちにくださった人や物を大切に、神様がくださった力や心を大切に使って、神様に喜んでいただけるようになりたいですね。

〈お祈り〉

神様、私たちにくださったすべてのものをありがとうございます。神様がくださった人や物や力を、大切にすることができるようになってください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

宝物ガーデン

■用意するもの

- ・画用紙
- ・クレヨン・色鉛筆など

■作り方

画用紙に植木鉢の絵とその中に植えてある種の絵を描く。種の中に文字を書くので、種は大きめに描いておくと良い。

種の中に、自分が神様からいただいた宝物（賜物）を書く。自分の得意なこと、好きなこと、大好きな人や物、性格など、いろいろなものが書けると良い。

種から芽や茎を描き、思い思いの花を描く。それぞれの作品をほめ、励ますように声がけをする。誰の方が上手などと、絶対に比べないこと。



〈ねらい〉

盗みとは何か。盗むことがなぜいけないのかを考える。神様から与えられたものを感謝し、分かち合うことへと導く。

〈展開例〉

1. 盗みとは

盗みとは、人のものを勝手に自分のものとすることです。銀行強盗のような大きな盗みもあれば、誰にも知られないような小さな盗みもあります。たとえば……

- ・万引き（お客さんのふりをして、お金を払わずにお店の品物を持って帰ること）
- ・停めてあった他の人の自転車に乗って帰る。
- ・拾ったお金を交番に届けずに使う。
- ・もらったおつりが多かったけど、黙っていた。
- ・お母さんのお財布から黙ってお金を持ち出す。
- ・お友だちの家のおもちゃをこっそり持って帰る。

こんな小さなことぐらいはいいだろうと思っ
てはいけません。大きな盗みも小さな盗みも、神様
は同じように嫌われます。

2. すべては神様のもの

私たちに与えられているものは、全て神様から
与えられたものです。他の人が持っているものは、
神様がその人に与えてくださったものです。盗み
は、神様がその人にお与えになったものを横取り
することです。ですから人のものを盗むことは、
神様のものを盗むことなのです。

命や持ち物が一人ひとりに与えられているの
は、与えられたものを用いて神様の働きをするた
めです。良いものをたくさん持つことが大事な
ではありません。大切なのは、神様のためにそれ
をどう使うかです。

3. 神様の恵みを独り占めにしない

世界には、十分に食べることができる国の人と、
そうでない国の人があります。豊かな国が、持つて
いるものを貧しい国の人々に分けることができたら、
お腹をすかせて死んでいく人の数はもっとも
っと少なくなります。

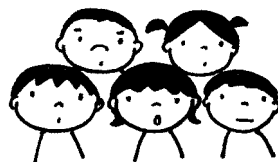
- ①『世界がもし100人の村だったら3 たべもの
編』（マガジンハウス）の絵本を先生が読む。（絵
本がない場合は p.53 を参照）
（絵本の場合も、難しいところを外して抜粋し
て読む。読んだだけではわかりにくいので図な
どをかいて説明する）
- ②読んだあと、話し合う。

〔話し合いのヒント〕

自分だけが幸せならそれでいい、他の人の苦し
みや悲しみにはなるべく目を向けないようにしよ
う、かわいそうだけど、自分がしなくても誰かが
助けてあげるだろうなどという思いがないだろ
うか。

自分の国に与えられている恵みを独り占めにす
ることは、貧しい国の人たちのものを盗んでいる
ことにならないだろうか。

小さなことでも、自分たちに何かできることが
ないか考えてみよう。



『世界がもし100人の村だったら 3 たべもの編』

(マガジンハウス) より抜粋

(※難しい言葉は説明してあげてください)

世界には65億人の人がいますが、
もしそれを
100人の村に縮めて
〈たべもの〉のありかたを見てみると
どうなるでしょう。

(略)

村びと100人のうち
16人は、1年を110万円以上で暮らし、
いろいろなものをたくさんたべています。

そのうち

2人は日本の人で、1年を
平均360万円ですべて暮らしています。

43人は、1年を64万円ですべて暮らし、
きちんと食べています。

41人は、1年を8万円以下で暮らし、
ときどきしかたべられません。

そのうち12人は

戦争や、干ばつや洪水や砂漠化のために
いつもお腹をすかせています。

この12人のうち

3人は、インド

2人は、中国

3人は、ほかの地域のアジア

3人は、サハラ以南のアフリカ

1人は、ラテン・アメリカに住んでいます。

その多くは、農村の女性や子どもです。

(略)

100人のうち、太りすぎの人は、15人です。
アメリカでは、砂糖にすると、1人が1日に

ティースプーン50杯分の
糖分をとっています。

日本では、12杯です。

アメリカの大人を100人だとすると

60人は太りすぎです。そのうち

14人は超肥満です。

アメリカの子どもを100人だとすると

25人が太りすぎです。

アメリカでは、太りすぎが

死亡原因の第2位です。

(略)

日本のわたしたちは

世界でいちばんたくさん
たべのこしを捨てています。

わたしたちが捨てるたべのこしは、年に
2000万トン以上です。

世界の食料援助量は、年に

1000万トンです

(略)

世界がもし100人の村だったら

この村でつくられた穀物を平等に分ければ、

すべての人が、1日2800キロカロリーの

食事をとることができます。

もし、めぐまれた25人が、肉や牛乳やバターを
たべるのを10%へらしたら、17人の栄養不足の
人に穀物をまわすことができます。

もし、アメリカと日本の人が

ビタミン剤や健康食品につかうお金を

食料不足の国ぐににまわしたら

11人が飢えずにすみます。

〈ねらい〉

第八戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉

○人にしてもらいたいことを人にもしよう

十戒の第八番目の戒めは「あなたは盗んではならない」です。これも当たり前と言えばそのとおり、全く当たり前のことです。

それがどれほど当たり前のことかについては、逆の立場に立ってみればすぐに分かるでしょう。わたしたちが自分の大切なものを盗まれたときには、どんな気持ちになるでしょうか。たぶんとても腹が立つか悲しい気持ちになるでしょう。あなたが誰かのものを盗んだときには、その人が、あなたが感じるのと同じかそれ以上の嫌な気持ちになるのです。イエスさまがわたしたちに教えてくださいましたことは「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイ7・12)ということですが、逆の言い方もできます。人にしてもらいたくないと思うことはどんなことであれ、人にしてはならないのです。わたしたちは他人のものを決して盗んではならないのです。

○見落とされがちな「時間どろぼう」

でも、ひとことで「ぬすみ」と言いますが、その意味はとても幅広いものです。いろいろな種類の盗みがあります。その中でわたしたちがつい見落としがちな盗みについて今日はお話したいと思います。「え？ そんなことまで『盗み』なの？」とびっくりされるようなものです。

それは「時間どろぼう」です(子どもカテキズム問58)。それは他人の時間を奪うことです。よく考えてみればそれは、わたしたちが毎日のようにやっちゃっていることです。

たとえば、誰かと約束した待ち合わせの時刻を忘れること、憶えていてもそれを守らないこと、平気で遅刻してくる人は、その約束をした相手の時間を盗んでいます。こんなふうは無意味に待っている時間があれば別のことができたかもしれない

いのに、と相手をイライラさせてしまったとき、あなたは時間どろぼうです。

また、誰かと実際に会っているときや電話をしているときなどに、相手の話を聞かないで、あなただけが長々と一方的に話し続けること。相手のほうは本当は早く家に帰りたと思っているかもしれないし、早く電話を切りたがっているかもしれません。でも、あなたの話がいつまで経っても終わらず、息継ぎなしにしゃべり続けているとしたら、これもまた時間どろぼうです。

この点では教会の先生たちも気をつけなければならないと思っています。いくら聖書のお話(説教)だからといって、日曜日の礼拝の中で長々と何時間も話し続けてはいけません。それも、れっきとした時間どろぼうです。もちろんなかにはその先生のことが大好きで、その先生の話なら何時間聞いても面白いし、飽きないという人がいるかもしれませんが、そろそろ帰りたいたいといライラ、ソワソワしている人もいるかもしれません。小学校で授業(国語、算数、社会、理科など)の一時限ごとに始まりの時刻と終わりの時刻が決まっているのと同じように、教会の集会(教会や日曜学校の礼拝や分級など)にも終わりの時刻がなくてはなりません。

以上、「時間どろぼう」の例を挙げてきました。皆さんにとにかく分かってもらいたいことは、わたしたちが盗んではならないものは、物とかお金だけではないということです。その中には目に見えるものだけではなく、目に見えないものもあるということです(時計の針は目に見えますが、「時間」は目に見えません)。あなたには悪気がなくても、悪いことをしているという自覚さえなくても、相手が嫌な気持ちになっているなら、あなたのはしていることは罪なのです。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちが気づかないうちにたくさん犯している罪をどうかおゆるしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

私たちの所有物は全て神から委ねられているものであることを学ぶ。

それらを御心に従って正しく活用することを学ぶ。

〈展開例〉

質問1 タラントンを主人から預かった僕たちは、それぞれ何タラントンずつ儲けたか。

質問2 主人は、五タラントンと二タラントン儲けた僕たちに何と言ったか。なぜこの僕たちは主人に褒められたのだろうか。

質問3 主人は、一タラントン預かった僕に何と言ったか。なぜこの僕は主人に叱責されたのだろうか。

質問4 主人は、自分がいない間、僕たちに何をしよう望んでいたと思うか。

質問5 タラントンとは、何を指すと思うか。

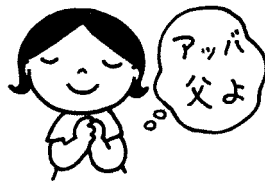
まとめ

私たちは、神に全てのものを負っている。私たちの命も時間も力も財も神のものである。神は、短い地上生活の間、それをういて神と人のために働くようにと私たちにそれを与えられた。人間の目から見れば、与えられているものの多く見える人も少なく見える人もいるが、神は、それぞれの人に与えたものに応じて、それをどれほど

神と人のために活用したかを問われる。神がごらんになるのは、どれだけ与えられたものを活用したかという度合いなのであって、成果の大きい小さいは問題ではない。それゆえ、五タラントン儲けた僕も二タラントン儲けた僕も同じ言葉で褒められている。一タラントンを隠していた僕の問題点は、したがって、預かった金の額が小さかったということではなく、それを主人の望みにそうよう活用しようとはしなかったということにある。その僕は、主人の信頼に背き、従おうとしなかったのである。私たちも小さいなりといえども、それぞれに神から能力や財や時間を与えられている。それらを自分には力がないからとか、自分には暇がないからなどと言って、一タラントン預かった僕のように神と人のために使わずにいてはならない。盗んではならないとは、隣人の所有物を盗んではならないということのみならず、自分に与えられたものを神と人のために有効に活用するという事柄も含まれる。それを怠るということは、消極的な意味で神から委ねられているものを盗むということになるのだ。

〈祈り〉

神様、私たちに命、時間、能力、財などを与えてくださってありがとうございます。私たちがそれらを御心にかなうよう大切に使う、神と人のために役立つことができるようお助けください。自分たちの勝手な理屈で、一タラントン預かった僕のようにそれらを役立てずに怠ることのないようどうぞ私たちを助けてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



【エリコ占領】

ヨシュア記7章にある「アカンの罪」は、6章「エリコ占領」の出来事に端を発している。難攻不落の町エリコが神の指定した方法によって陥落する。その際、神がイスラエルに命じたことが「聖絶」である。

「……町とそこにあるものは、ことごとく滅ぼし尽くして主にささげよ。……あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。金、銀、銅器、鉄器はすべて主にささげる聖なるものであるから、主の宝物倉に納めよ。」(ヨシュア記6:17-19)

【聖絶】

ここで言われているのは「聖絶」の命令である。聖絶の目的は、申命記20章17～18節では、こう説明されている。「……あなたの神、主が命じられたように必ず滅ぼし尽くさねばならない。それは、彼らがその神々に行ってきた、あらゆるいどうべき行為をあなたたちに教えてそれを行わせ、あなたたちがあなたたちの神、主に罪を犯すことのないためである。」

【アカンの罪】

アカンは、神が命じられた「滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように……」という命令に背き、「滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取り(ヨシュア記7:1)、……ごまかして自分のものにした(7:11)」のである。ここにアカンの罪があり、主はそのことで「イスラエルの人々に対して激しく憤られた。」(1:1) アカンの罪は、盗みとごまかしであった。

【罪の処罰によって神の怒りはやむ】

アカンのこの罪に対する神の怒りは、アカン一人にではなく、その共同体全体に向けられた。敵からの敗走を余儀なくされたのである(7:4-6)。

そこで、イスラエル共同体は、神の導きのもと、アカンの罪をあばき(ヨシュア7:16-23)、その

罪に対して処罰を与えた(7:25)。このことのために神の怒りはおさまった(7:26)。

神の怒りは、罪の刑罰が執行されることによって、なだめられる。イエス・キリストが「罪を償う供え物＝宥めの供え物(ローマ3:25)」とされたのもこのためである。生ける神の「罪に対する怒り」は、「罪を償う供え物＝宥めの供え物」によってなだめられるのである。

【今日的適用 その一】

「全イスラエルはアカンに石を激しく投げつけ、彼のものを火に焼き、家族を石で打ち殺した。……主の怒りはこうしてやんだ。」(ヨシュア7:25-26) それほどまでに神は罪を忌み嫌われる。この厳かな事実を伝えつつ、イエス・キリストが今やすべての人の罪を償って、神の怒りをなだめるために十字架で罰を受けてくださった事実を想起する。

【今日的適用 その二】

アカンは聖絶の品をひそかに欲しがり、その一部を盗み、ごまかした。このことによって、全イスラエルが神の怒りを買うほどに罪の結果は恐ろしい。

しかし、アカンが共同体の前で自らの罪を言い表し、自らの罪の刑罰を潔く身に受けたことは、評価されるべきことである。私たちもアカン同様、むさぼり、盗み、ごまかし偽る罪を持っている。その事実を知らされ、神と人の前で自らの罪を言い表すことは神の目に評価されることである。

【今日的適用 その三】

「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます(一ヨハネ1:8-9)」とされているように、罪を告白する者は、必ずイエス・キリストの十字架の贖いによって罪の赦しが与えられることに信仰の目を向けさせたい。

(芦田高之)

8月2日 「第九戒 偽証してはならない」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問59、60

子どもカテキズム

問59 第九戒は何ですか。

答 「隣人に関して偽証してはならない」、です。

問60 第九戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、真実な愛をもって私たちを愛してくださいました。

ですから、私たちも、うそをついたり、うわさ話をして、人をさばいてはいけない、
ということです。

私たちは隣人に誠実を尽くします。

参考教理問答 ウ小教理76-78、ウ大教理143-145、ハイデルベルグ112

〈人と人との間の真実〉

第九戒は、直接的には、隣人をおとしめるような偽りの証言、また陰口、中傷、軽率な断罪などを禁ずるものです。「うそをついたり、うわさ話をして人をさばいてはいけない」とある通りです。それは、正義と公正・真実の神の御前における、「人と人との間の真実（ウ小教理問77）」な関係の構築の要求です。「隣人に誠実を尽くす」というありかたです。聖書の言葉遣いにおいて「誠実」とは、「ひたむきに、一途に、まっすぐに」という意味領域を持ちます。あらゆる雑音に耳を貸さず、隣人に対してまっすぐ向き合い、心をささげ、最大限の想像力と配慮、関心をもって接する態度を指しています。それは場合によっては、彼の罪を大胆に糾弾することさえ覚悟した、どこまでも責任ある関わりを志向する態度です。

〈神の真実な愛ゆえに〉

そのような隣人への姿勢こそ、「隣人を自分のように愛しなさい」という、主イエスが示してくださった律法の要約の後半（子どもカテキズム問40）の実践的展開です。このような隣人愛を私たちが持ちうるとすれば、神の無限の愛を源泉とする時だけです。その意味で、このカテキズムが「神さまは、真実な愛をもって私たちを愛してくださいました」との想起に導こうとしているのは、素晴らしいことです。神は私たちと結んだ命の契約に、どこまでも誠実を尽くしてください、救い

主イエスを与えてくださいました。この神の愛に満たされた十全な心でなければ、隣人に誠実を尽くすことなど絶対に不可能です。

〈神のまなざしへの恐れ（恐れ）〉

以上が問59、60の直接的解説ですが、今日の説教テキスト（ヨシュア7章）においては、そのような水平的な対人関係の次元のみならず、神との垂直な関係における真実を思い返すことが教えられています。ここに示されるアカンの姿は、神への信頼と恐れ（恐れ）を欠き、侮り騙そうとする神への不誠実そのものですが、第九戒のメッセージはこの次元をも含みます。第九戒を受け止めようとする者には、「あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして、神の激しい御怒りのゆえに遠ざける」ことが要求されます（ハイデルベルク問112）。そこでは、狭義の偽証のみならず、すべてを見通される神の厳しいまなざしの前で、「あらゆる嘘やごまかし」は裁きにさらされているという事実を目を向けることが求められています。この事実の認識の欠けたところに、人と人との間の真実など望むべくもありません。そこには嘘で塗り固めた偽りの平和しか実現しない。そんなものは、私たちの周りに吐き捨てるほどあるでしょう。そしていつの時代にも子どもたちは、そういう大人の世界にうんざりしているものです。
(坂井孝宏)

8月2日 「第九戒 偽証してはならない」 説教展開例

テキスト ヨシュア記 7章1～26節
カテキズム 子どもカテキズム 問59、60

〔単元のねらい〕

今回は十戒の第九戒、「偽証してはならない」について学ぶ。この戒めは偽証を禁じるのみならず、神の民が神と隣人の前で神の真実に生きることをも求めている。義とされてなお罪人であるわたしたち、偽りの罪の誘惑になびきやすいわたしたちにとって、この戒めに生き抜くことはたたかいはともなわずにはおかないであろう。しかしアカンの出来事は、わたしたちが厳然としてこの戦いを担うべきこと、それによって神の栄光をあらわすべきことを教える。このたたかいがイエス・キリストのみ霊の、わたしたちにおける働きと導きにより頼んで担われるべきものであることは言うまでもない。

「神さまの前での真実」

モーセをリーダーとして40年の荒れ野の旅を歩みとおしたイスラエルの民に、神さまは約束のとおり、乳と蜜の流れるすばらしい土地、カナン之地を与えてくださいました。新しいリーダーのヨシュアのもとで、民はヨルダン川を渡ってカナンに入りました。それまでは旅人で、住む場所のなかったイスラエルの人々にとって、それはどれほどすばらしい恵み、喜ばしい出来事であったことでしょうか。

けれども約束の地に入ったならもうそれで安心ということではありませんでした。イスラエルには大きな仕事がありました。それはこのカナン之地を神さまからいただいた地としてふさわしくきよめ、ととのえることです。イスラエルが入る前から、カナンには神さまにそむいて偶像の神々を礼拝していた民たちがありました。それでイスラエルはこれらの民と戦い、勝利して、カナンを聖なる地とすることが求められたのです。この戦いは信仰の戦いでしたから、神さまはいつもイスラエルとともにおられて、勝利へと導いてくださったのです。

エリコという町での勝利は、すばらしい勝利でした。エリコを占領したイスラエルは、続いてアイという町を攻める準備をしましたが、アイは小さな町でしたから、かんたんに攻め落とすことが

できると思われました。それであまり多くの兵隊を送りませんでした。イスラエルは戦う前から自信満々、もう勝ったような気分でした。

けれどもイスラエルは、この戦いに負けてしまったのです。予想外のことにイスラエルは気落ちし、水のように静かになってしまいました。リーダーのヨシュアも悲しみ嘆き、着ていたものを引き裂き、頭に塵をかぶって、このようなことになるとわかっていたなら、なぜあなたはわたしたちをカナン之地まで導いてこられたのですか、と神さまに問いかけました。

神さまはヨシュアにお答えになりました。あなたがたがアイの人々に負けたのは、あなたがたの中に罪を犯した者があるからです。その罪はあなたがたから除き去らなければなりません。

次の朝、ヨシュアはイスラエルの人々を集めました。神さまは民のひとりであるアカンの罪をお示しになりました。実はイスラエルはカナン之地に住んでいた民たちと戦い、勝利して彼らを追いつただけではなく、彼らから得た分捕り物をすべて神さまにささげ尽くすことをも命じられていました。ところがアカンは敵からの分捕り物の中に美しい着物や銀や、金の延べ板があるのを見て欲しくなり、自分のものにしてしまったのです。神さまのものであるはずのものを盗んでしまったのです。そして、そのことを誰にも言わずに黙って

いたのです。盗んだものは土を掘って、その中に埋めていたのです。

ヨシュアにうながされて、アカンははじめてその罪を告白しました。しかし、アカンは自分の命をもってその罪を償わなければならなかったのです。

今朝は十戒の第九戒を学びます。第九戒は「偽証してはならない」です。うそを言ってはならない、神さまと隣人の前に自分を偽ってはならないということです。神さまはまったく正しいお方ですから、偽りをお嫌いになります。正しい神さまはほんのわずかなうそや偽りも水が油をはじくようにはじかれます。

そして、人間の前では隠しておけるだろうと思われることも、神さまの前では隠しておくことはできません。神さまは人の心の奥底までもさぐり、明るみに出されるお方だからです。アカンが偽り

の罪によって命を絶たれなければならなかったことは厳しいことですが、それは神さまがどれほど正しいお方か、どれほど偽りをお嫌いになるのかを証明してもいるのです。

第九戒はうそを言わないということだけではなく、わたしたちが神さまと隣人との前で真実の言葉を語り、真実に生きることをも求めています。真実に生きること。そのことによってわたしたちは本当の命を生きることができます。本当の幸いに生きることができます。けれどもそれはイエスさまを信じつつ、なお救いの途上にあるわたしたちにとっては、戦いです。わたしたちは自分の中の罪と戦い、真実をかちとらなければなりません。

この戦いにおいてこそイエスさまを見上げ、イエスさまの力に信頼し、ゆだねましょう。イエスさまはかならずわたしたちを助け、勝利に導いてくださることを信じましょう。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章16節

隣人に関して偽証してはならない。



〈ねらい〉

嘘という罪を禁じ嫌われる神様が、私たちを真実に愛してくださることを知る。

〈お話〉

みんなの中に、嘘をついたことのない子はいいますか？ 私たちは、何か隠したいことがあるときや何か悪いことをしたときに、嘘をついてしまうことがあります。でもこれは、悪いことです。嘘をつくことは罪なのです。

みんなは、自分が嘘をついても誰にも分からないと思いますか？ 誰にも気づかれないで、嘘をつくことができるのでしょうか？ きっと誰にも分からないだろうと思って嘘をついても、何でも知っていらっしゃる神様には、すぐに分かっしまいいます。神様は、何でもご存知だからです。誰も、何も、神様から隠すことはできません。私たちが隠れてしたことも、気づかれないようについた嘘も、神様には何でも分かってしまうのです。

罪が大嫌いな神様は、嘘も大嫌いです。私たちが嘘をつくたびに、神様はとても悲しい気持ちになります。では、もう神様は、嘘つきの私たちの

ことを嫌いになってしまったのでしょうか？ いいえ。神様は、嘘をついたことをちゃんと謝る人たちのことを赦してくださると、約束してくださいました。イエス様が十字架にかかって死んでくださったのは、嘘や罪がいっぱいある私たちのためでした。

私たちの口は嘘をつくためではなく、優しい言葉を言うためにあります。私たちの心は、誰かを傷つけるためではなく、誰かを心配したり大事に思ったりするために神様がくださいました。神様は、私たちに嘘をつきません。私たちのことを愛し、私たちのことを本当に大事に思ってくださいからです。同じように、私たちも神様やお友だちのことを大事に思っていけると良いですね。

〈お祈り〉

神様、私たちのことを本当に愛して下さってありがとうございます。私たちが嘘をつかないで、神様やお友だちのことを大事にしていくことができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

神様の木

■用意するもの

- ・緑色・黄緑色の折り紙 数枚
- ・鉛筆
- ・模造紙 一枚
- ・のり

■作り方

折り紙を葉っぱの形に切り抜く。

神様について知っていることを一つずつ、葉っぱに書き出す。神様がされたことや言われたこと、好きなことや嫌いなことなどを、短い言葉で書く（「うそがきらい」「せかいをつくった」「イエスさまをくださった」など、「神様」と聞いて連想する事柄ならば何でも良い）。

模造紙には、大きな木の幹と枝のみを描いておく。

書き終えた葉っぱの紙を、模造紙に描いた枝に貼っていく。できるだけたくさんの葉っぱがついた、大きな木になると良い。



〈ねらい〉

神様は、真実な方で嘘を憎まれます。嘘は、神様と人との正しい関係、人と人との真実な関係を壊します。

〈展開例〉

1. えりちゃんの嘘

2年生のえりちゃんは、お家でお友だちのあいちゃんと遊んでいるとき、テーブルの上に置いてあった花瓶を落として割ってしまいました。あいちゃんが帰ったあと、えりちゃんはお母さんに「誰がこの花瓶を割ったの？」と聞かれました。えりちゃんは、「あいちゃんが割ったの」と嘘をついてしまいました。

どうしてえりちゃんは嘘をついたのでしょうか。叱られるのが嫌で、あいちゃんのせいにしてしまったのです。

2. 嘘をつくとうなる？

お母さんは、すぐにあいちゃんの家で電話をかけて確かめました。割ったのはえりちゃんだということがわかりました。えりちゃんは、花瓶を割ったこと以上に、嘘をついたことを叱られてしまいました。

嘘をついたときはうまくやったと思っても、嘘はやがてばれてしまいます。たとえ人をだますことができたとしても、神様はすべてを見ておられます。

嘘をついた人は、本当のことを言わない、信じられない人だと思われます。それだけでなく、他の人をも傷つけるのです。あいちゃんはえりちゃんが嘘をついたことを聞いて、とても悲しくなりました。

嘘は人を傷つけ、人と人との関係を壊します。

3. 神様は嘘を嫌われる

どのようなときに、人は嘘をつくのでしょうか。自分のした悪いことを隠したり、人をだまして得

をしようとするときに人は嘘をつきます。自分勝手な思いから嘘をつくのです。

神様は、嘘をつかない真実なお方です。嘘を嫌われる清いお方です。神様が嘘を嫌われるように、私たちも、たとえ小さな嘘であっても、嘘を憎み、本当のことを言う勇気が与えられるように、神様に助けを祈り求めましょう。

4. 愛をもって真実を語ろう

人のことを話すときに、本当のことを語るの大切なことです。でも、私たちは、本当のことを話しながら、その人の悪口や陰口を言ってしまうことが多くあります。神様は、私たちにただ本当のことを語るだけではなく、その人への愛をもって語ることを求めておられます。人を傷つける言葉ではなく、愛をもって真実を語りましょう。

5. クイズ うそ？ ほんと？

次の中で、うそはどれとどれでしょう。

- ①ヤギは紙が大好き。
- ②シマウマは毛をそってもやっぱり、白黒になっている。
- ③みかんを食べすぎると、手が黄色くなる。
- ④イヌやネコも風邪をひく。
- ⑤風邪は人にうつすと早くなる。
- ⑥さかなは目をあけたまま寝る。
- ⑦くじらにはおへそがある。
- ⑧赤い金魚は生まれたときは黒い。
- ⑨パンダの赤ちゃんは生まれたときは白黒ではない。
- ⑩食べてすぐに寝ると牛になる。
- ⑪カミナリがなっているときはおへそをかくさないを取られる。
- ⑫イヌも虫歯になる。
- ⑬だれかがうわさをするとくしゃみが出る。

答え → うそは①、②、⑤、⑩、⑪、⑬

〈ねらい〉

第九戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉

○でたらめな情報を流すことは罪

十戒の第九番目の戒めは「隣人に関して偽証してはならない」です。この戒めをみなさんにとって分かりやすい言葉で言い直すとしたら、「友達についてでたらめなことを言っはけません」とか「他の人についての間違った情報をわざと流すようなことをしてはけません」というふうになるでしょう。

これは皆さんにもよく考えてほしいことです。私にとって最近どうしても気になってしまうことは、パソコンや携帯電話が子どもたちにどんなふうに使われているかです。とても便利なものですから、これを全く使わないという人は、そのうちほとんどいなくなるでしょう。

でも、しっかり考えてほしいことは、その使い方です。便利なものは危険なものでもあるのです。よく切れるナイフのようなものです。

メールや掲示板やブログやチャットに、他のだれかのことを書く。しかも事実ではないことを書く。でたらめなこと、間違ったことを書く。もしみなさんがそういうことをするとどうなるかはよく知っていることでしょう。でたらめな情報を流されてしまった人たちの中には完全に絶望してしまう人もいます。その人が絶望してしまった原因はあなたがそれを書いたことです。それはあなたの責任です。そのように言われても仕方ありません。

○事実ならば何を伝えてもよいわけではない

「え？ じゃあ、でたらめなことではなくて、事実ならば何を書いてもいいのですか」と思われるのでしょうか。たとえば、「私と同じクラスの○○君は、学校の帰り道に、○○というお店に寄り道してソフトクリームを食べていました。私はそれを見たので間違いありません。○○君のしたことは校則違反です」（○○は実名で）という情報を、

事実だからといって不特定多数が見ているインターネットの掲示板やブログなどに書いてもいいのでしょうか。そのようなやり方はいくらなんでもおかしいということはすぐに分かると思います。事実であればどんなことを書いてもいいわけではありません。

思い出してほしいことは先週の分級でお話した「人にしてもらいたいことを人にもしよう」です。また、その反対の「人にしてもらいたくないことは人にもしないようにしましょう」も大切です。もしあなたが同じことをされたら、どう思いますか。「☆☆さんは、学校の帰り道、犬に触ろうとしたら噛みつかれそうになったので、『バックヤロー』と怒鳴りつけていました。ぼくはそれを見たので間違いありません。☆☆さんは、学校のみんなからはおとなしい人だと思われていますが、実はけっこうコワイ人です」。こんなことをあなたが知らないところにいつの間にか書かれていたとしたらすごく嫌ですよ。相手が嫌がると分かっていることをわざとするのは悪いことです。とくに、仲の良い友達だと思っている人に対してそんなふうなひどいことをするとしたら、その人とはもう二度と仲直りできないと思うほうがいいでしょう。

○「ことば」を大事にしましょう

今日皆さんに覚えてもらいたいことは、人と人をつなぐのは「ことば」ですということです。ことばで人は傷つくのです。でも、だれかから励まされて元気になったというときも、大切な要素は「ことば」です。ですから皆さんはぜひ誰に対しても「よいことば」を用いてください。それこそが、世界のみんなを幸せにするためのいちばん良い方法です。よろしく願います。

〈お祈り〉

神さま、多くの人々といつも仲良くできますように、そのためにわたしたちが「ことば」を正しく用いることができるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

偽証してはならないという戒めが、嘘をつかないという狭義の戒めだけではなく、隣人に対して誠実を尽くすという広義の規範まで含むものであることを学ぶ。

隣人に対する誠実は、私たちの、神に対する誠実が土台となって生まれるものであることを理解する。

〈展開例〉

質問1 アイとイスラエルの戦いはどういう結果になったか。

質問2 神は、敗北の理由は何であると告げられたか。

質問3 アカンと彼に属するものは、どういう刑罰を受けたか。

質問4 なぜアカンは、そこまで厳しい刑罰を受けなければならなかったのか。

質問5 あなたの心の中には、神に対して隠しておきたいと思う事が何かあるか。

まとめ

エリコとの戦いに神の奇跡によって勝利したイスラエルは、目の前で神の驚くべき力を見せつけられ、今後のカナン征服に対する自信を深めていた。余勢を駆って小さな町アイをも攻め取ろうとしたところ、予想に反して簡単に反撃され、戦死者も出してしまった。落胆するイスラエルが神に尋ねたところ、神は、聖絶すべき物を盗んだ罪のため、イスラエルを罰したと告げられた。くじに

より、その罪を犯した者がアカンであることが判明する。アカンは、盗んだ物と家族、財産もろともに石打ちの刑に処せられ、ようやく神の怒りは収まった。アカンの罪は、神の御心に反してささげなければならない物を自分のためにこっそり取り置いたのみならず、それを黙って隠していた事にある。嘘は、積極的に間違った情報を相手に信じこませることのみならず、消極的には言うべきことをあえて伏せて相手が誤解するに任せることも含まれる。アカンはそうした意味で、神に対しイスラエルの共同体に対し嘘をついたことになる。人間同士の間の誠実には、まず、神と人との間の誠実が先立つ。神に示された罪を告白し、悔い改めて生きていく人は、隣人との関係においても誠実を貫くことができるであろう。私たちの心の中に、アカンの盗んだ品々のような、神の目から隠しておきたいことがないかどうかいつも吟味し、罪が示されたならば、いつもすぐに告白し悔い改めるよう心がけて生きていきたい。隣人について偽証するようなことをせず、誠実を尽くす生き方は、その延長線上に生まれるのだ。

〈祈り〉

神様、私たちに隣人を与えてくださって、ありがとうございます。しかし、ともすれば、私たちは、隣人に誠実を尽くすことを怠り、無用な噂話をしたり、時には嘘をつくことすらあることを懺悔いたします。どうか私たちがあなたの前で真実に生き、罪が示されたならば、すぐに告白し悔い改め、そうした真実さ、誠実さをもって隣人にも接することができるようどうかお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



ローマ12章は、キリスト者として実際にどう生きたらいいのかという実践的手ほどきをパウロが与えているところである。

【偽りなき愛、兄弟愛】

まず、見せかけではない、偽りなき愛についてのすすめがなされている。そして、兄弟愛と謙遜とのすすめである。神の家の一員として真実の同情といたわりをもって、互いに愛し合い尊敬し合うことが勧められている。

「互いに相手を優れた者と思いなさい」は、キリスト者が基本的に求められる事柄で、フィリピ2章3節でもパウロが勧めていることである。

旅人をもてなすことも、キリスト者にとって重要な事柄であった（一テモテ3:2、ヘブライ13:2）。とりわけ旅行事情の整っていない時代にあっては、客をもてなすことは、その客の「生き死に」に関わる事柄であった。

自分自身も困難な状況に陥ったら、心身の痛み苦しみを味わうものである。だから、今、その様な辛苦を味わっている者たちに、真実の兄弟愛をもっていたわり助けるように、との勧めである。

迫害する者のために呪うのではなく祝福を祈るように、との勧めも、現代社会に生きる私たちは心に留めておきたい。十字架にかけられた主イエスは、御自身を十字架に追いやった者たちのためにも祈られた。その主イエスに私たちは結び合わされているのである。そのイエスとの結合の事実を想起することが大事である。

【できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らなさい】

「できれば、せめてあなたがたは」は、「できれば、力の限りを尽くして、あなたがたは」という意味である。私たちは、完全聖化された人々と共に生きるのではない。今なお罪の支配の中にある罪の現実の中を生きるのである。平和よりもいさかいや分裂を求める傾向にある、罪人の世界の

に私たちは生かされているのである。平和が妨げられる中を生きることを余儀なくされている。しかし、あなたがたは、平和を乱す諸々の力がはびこるこの地上において、力の及ぶ限り平和をつくりながら生きなさい、との勧めである。

クリスチャンは平和をつくるために、平和の君であるキリストに結び合わされて、一体にされたのである。平和をつくり、実現することができるように造り変えられているのである。だから、平和をつくることに全力を尽くすようにと、パウロは勧めているのである。

【『復讐するのはわたしのすること』】

平和をつくるためには、第一に、復讐心を処理しなければならない。そして、仕返しをしたくなる思いからの解放は、「神の怒りにまかせること（ローマ12:19）」にある。そこでパウロは「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と、旧約聖書の神の言葉を引用する（申命記32:35）。

我々の復讐心は留まるどころを知らない。また、復讐にはそれに対する復讐がまた引き起こされ、その復讐に対してさらに復讐の応酬が続く。こうして復讐の連鎖はいつまでも続く。この連鎖をどこかで断たなければ、平和は実現されない。

クリスチャンが復讐心を乗り越えて平和を実現する道は、神の正しい完璧な公平な怒りにまかせることである。

【燃える炭火を】

「燃える炭火を……」については、確定的な解釈はない。神の怒りがその者の上に積み重なっていくというのか、あるいは、復讐心で凝り固まった固く冷たい心を炭火が溶かし、怒りと復讐心を溶かし解消していくというのか。いずれの解釈も可能である。ともあれ、悪に対して悪で応酬するのではなく、善をもって悪の根や復讐の連鎖を断ち切る。平和を創り出すクリスチャンが全力を尽くして努め続ける道はここにある。（芦田高之）

テキスト ローマの信徒への手紙 12章9～21節

(単元のねらい)

この単元では、「平和」について取り扱う。ローマ書は、生けるまことの神こそ「平和の源」とであると語っている（ローマ15:33）。「平和」とは、罪から解き放たれて新しく生きることにはかならない。平和は、罪の赦しに基づいて、神のもとから来る。とりわけ、贖い主イエス・キリストにこそ、平和がある。主イエス・キリストに目を注いで、平和を創り出す歩みを始めたい。

「平和はイエスさまから来る」

毎年、夏に、「平和」ということを考える日を設けています。今から70年ほど前のことになりましたが、わたしたちの国、日本は、外国と戦争をしました。自分たちの国の領土を広げようとして、アジアの国々に軍隊を送り、戦争をしたのです。戦闘機を飛ばし、軍艦を送り出して、アメリカとも戦争をしました。その戦争で、多くの人が命を失いました。日本の人も、外国の人も、多くの人が死にました。戦争は、本当に悲しい、悲惨なものです。ですから、二度と戦争をしてはいけないということで、日本が負けて戦争が終わったのが夏なので、その夏の時期に、戦争の悲惨さを知り、平和の大切さを学ぶときを設けています。

今年も、その夏が来ました。今年は、使徒パウロのローマ書の御言葉をとおして、平和ということについて考えたいと思います。

戦争って、いったい何なのでしょう。国と国とがけんかすることです。民族と民族がけんかすることです。武器を持って、軍隊で、戦闘機や軍艦、ミサイルとかでもって、けんかすることです。

みんなは、けんかをしたことがありますか。先生は、けんかをしたことがあります。兄弟げんかをしたことがあるし、学校のお友だちとけんかしたこともあります。何でけんかをしたのか。あとから考えてみると、たいした理由でないことがほとんどです。テレビのチャンネルのことで兄弟げんかをしてしまいました。文房具の貸し借りのことで、お友だちとけんかをしてしまいました。そ

のときは、「絶対にゆずれないもんか」「絶対にゆるせるもんか」と思ったのですけれども、あとから考えると、どうしてけんかになったのか、笑ってしまうようなことばかりでした。

みんなも、けんかをしたときのことを思い出してごらん。きっと、いま思うと、そんなにたいした理由ではないのだと思いますよ。

でもね、そのときは、「自分のほうが絶対正しい!」「自分のほうが絶対先だ!」と思って、ゆずることができなかったのです。「自分が、自分が」っていう気持ちが強かったのです。何でけんかするのかって言うと、この「自分が、自分が」っていう気持ちですね。「自分が自分が病」と名付けましょう。この「自分が自分が病」が問題なのです。

国と国のけんか、戦争っていうことも、この「自分が自分が病」が問題なのです。「自分の国のほうが正しい!」「自分の国のほうが大切だ!」と思って、ゆずることができないのです。考えてみると、どちらも「自分の国のほうが大切だ!」と思う気持ちは一緒なんですよね。だから、どちらも「自分が、自分が」と言ってゆずらないならば、確かにけんかになってしまいますよね。それを、武器を持って、軍隊と軍隊でけんかすると、戦争になってしまいます。そんな、つまらない「自分が自分が病」のために、たくさん人の命が失われることになったら、そのほうがたいへんなことです。本当に、本当に、悲しいことです。

戦争をしてはいけない。平和を大切にしたい。それは、ですから、わたしたちの「自分が自分が病」の問題です。わたしたちの心、自己中心で、自分のことばかりが大切な心、罪の心が問題なのです。いったいわたしたちはどうすれば、この罪の心を取り除くことができるのでしょうか。はたして、自分で、この「自分が自分が病」をなおすことができるのでしょうか。自分で、もう二度と「自分が自分がと思わない」と決心して、それで、自分を変えることができるのでしょうか。

いいえ。そうではありません。自分で自分を変えようとしても、うまくいかないでしょう。「自分で自分を」と思っているところにも、「自分が自分が病」があるのです。この「自分で自分を」ということも、捨てなければなりません。

パウロさんは、わたしたちがイエスさまを信じて、イエスさまに結び合わされることだと教えています。イエスさまが十字架につけられて、わたしたちの罪を滅ぼしてくださいました。イエスさまの十字架の死において、罪に支配された体は滅ぼされ、罪は葬り去られたのです。そして、イエスさまに結ばれて、新しい命に生きることが出来ます。イエスさまの霊、聖霊を注いでいただいて、神さまと人を愛して生きる者とされるのです。そこに、わたしたちの新しい歩みがあります。「自分で自分を」ではなく、このイエスさまを見つめて、イエスさまに変えていただくということ、イエスさまを愛して、イエスさまに結び合わせられることが大切なのです。

「自分が自分が」「自分で自分を」と考えている限り、わたしたちの目は自分を見ている。そのことは変わりません。ところが、イエスさまを見ていると、自分のことから目が離れていきます。そして、イエスさまは、人を愛して、人に仕えてくださったお方です。自分のために生きるのではなく、神さまと人を愛して、神さまと人に仕えて生きてくださいました。そのイエスさまを見てい

ると、いつの間にか、わたしたちも、自分のことを忘れて、「自分が自分が病」がなおっていくのです。イエスさまの御霊によって、造りかえられるのです。

パウロさんは、今日の御言葉で言いました。「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい……あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい……喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい」。これは、すべてイエスさまのことで。イエスさまが、こういうお方だったのです。イエスさまは、人を愛して、尊敬をもって、すべての人に接してくださいました。だれに対しても悪を行わず、善いことを行われました。自分に悪いことをする人に対しても、神さまの祝福を祈られました。そうして、十字架につけられて、死んでくださったのです。わたしたちの罪を背負ってくださったのです。

そのイエスさまを見つめていると、わたしたちの罪の心はきよめられますし、「自分が自分が病」もどこかにとんで行ってしまいます。イエスさまと同じように、悪に負けることなく、善をもって悪に勝つことへと導かれるのです。本当に、神さまのみわざによって、造りかえられるのです。平和は、こうして神さまから来ます、イエスさまから来ます。イエスさまからいただく平和こそ、本当の平和、平和を創り出す平和なのです。

この平和をいただいて、神さまと人に仕える平和のうちに歩みましょう。へりくだり、相手のことを尊んで生きるのです。わたしたちから、この平和を始めて参りましょう。この平和を創り出して生きる者のことを、神さまは「神の子」と呼んでくださるのです。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙12章18節

できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。

〈ねらい〉

私たちが争うことを止め、平和を作り出すようになることを、神様が望まれていることを知る。

〈お話〉

みんなは、「戦争」って知っていますか？ テレビで見たことがあるかも知れませんね。みんなはお友だちと喧嘩してしまうことがあると思いますが、国と国でする喧嘩のことを「戦争」と呼びます。

戦争では、たくさんの大人や子どもが殺されて、食べ物や着るものや家がなくなってしまう。お父さん・お母さんを殺されて、一人ぼっちになってしまう子どもたちもたくさんいます。

日本でも、70年位前に大きな戦争がありました。みんなのお祖父さん・お祖母さんが、小さな子どもだった頃のことです。戦争のせいで、日本や世界のいろんな国でたくさんの人たちが殺されました。家族やお友だちが死んでしまったので、たくさんの人たちが悲しみました。食べ物や家がなくなってしまう、たくさんの人たちが苦しみました。戦争はみんなを悲しく、苦しくさせるのです。

戦争の反対が「平和」です。「平和」は、すべての人たちが仲良く、楽しくいられることです。みんなは、戦争と平和のどちらの方が好きです

か？ 神様は、どちらの方が良いと言われると思いますか？ 神様は、私たちに、平和を作りなさいと言われました。誰かに嫌なことをされても、仕返ししようとはしないで赦してあげなさい、そして仲良くしなさい、と言われました。

神様の言われた通りに、イエス様はすべての人を大事にしてくださいました。イエス様は、自分を殺そうとした人たちのためにも、お祈りしてくださいました。そして、罪でいっぱいの人たちのために死んでくださいました。

イエス様のようにすべての人を愛することで、本当の平和がやってきます。私たちは、自分たちだけで平和を作ることはできません。私たちはすぐに誰かと喧嘩をしたり、仕返しをしたりしてしまうからです。だから、イエス様に助けをいただきながら、イエス様のような平和を作る人になっていきましょう。

〈お祈り〉

神様、すべての人を愛してくださいありがとうございます。私たちが兄弟やお友だちと喧嘩をしたり仕返しをしたりしないで、みんなと仲良くすることができるようにしてください。イエス様のように、平和を作ることができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**ハとハトとハートのしおり****■用意するもの**

・色画用紙 数枚 ・カバーフィルム ・はさみ ・穴あけパンチ ・4～5mm 幅のリボン

■作り方

色画用紙に葉っぱ・鳩・ハートの絵を描き、切り抜く。

聖句やイラストなどを、自由に書く。

型紙の両面にカバーフィルムを貼り、型紙の2～3mm 外側を切り抜く。

葉っぱ・鳩・ハート型の紙の上部に、穴あけパンチで一つずつ穴を開ける（穴が端になり過ぎないように気をつける）。

一枚ずつ、穴にリボンを通して結ぶ。

〈ねらい〉

人間の中にある自分勝手な思い、憎しみが戦争を引き起こす。本当の平和は、その罪を打ち砕いてくださった主イエスが与えてくださる。

〈展開例〉

1. 戦争って？

テレビで戦争のニュースを見たことがありますか。戦争とは、武器を持って国と国がケンカをして殺し合うことです。戦争になると、どうなるのでしょうか。

爆弾や鉄砲などで、兵士だけでなく、赤ちゃんやお年寄りまで、多くの人が怪我をしたり、殺されます。家が焼かれ、住むところもなくなります。

2. どうして戦争をするの？

今も世界中で戦争が起っています。戦争をして得なことは一つもありません。それなのに、どうして人は戦争をするのでしょうか。

お友だちや兄弟とケンカをしたとき、どんな気持ちだったか思い出してみてください。ケンカの原因は何でしたか。自分の大事なものを壊されたから？ ひどいことを言われたから？ そのとき、心の中でどんなことを考えましたか。悪いのは相手の方だ。そんな思いがケンカを生み出すのです。憎しみ、怒り、恨み、むさばり、これらはすべて私たちの中にある罪から出てきます。自分の国の方が正しい、偉いんだ、大事なんだ、という自分勝手な罪が戦争を生み出すのです。

3. 平和を創り出すために

罪を持ったままの私たちには、平和を創り出すことはできません。やられたらやり返したくなるのが罪ある人間の性質だからです

この罪を打ち砕くために、イエス様は来てくださいました。このイエス様に憎しみの心を取り除いていただくことです。イエス様が、憎しみの心を相手を許す心、相手を思いやる心に創り変えてくださいます。そのとき初めて本当の意味で、平和を創り出す人となることができるのです。

4. 本を通して戦争を学ぶ

子どもたちに戦争を伝えるための本

『写真記録 日本の侵略：中国・朝鮮』

(ほるぷ出版)

『ひろしまのピカ』(小峯書店)

『アニメ版 火の雨がふる』(金の星社)

『あの日をわたしは忘れない』(勉誠出版)

『ぼくの見た戦争』(ポプラ社)

『ネルソンさん、あなたは人をころしましたか』

(講談社)

※戦争の悲惨さと同時に、日本の加害の事実も教えよう。

5. さんびしよう

「平和はじめて知った」

(『リビングプレイズ』20番)

♪ 平和 はじめて知った
イエスに出会ってから
平和 それは湧き上がる
満たし いかす 私たちの心を ♪

「平和、川のように」(『リビングプレイズ』149番)

♪ 平和 川のように
平和 川のように
平和 川のように 心に (ハレルヤ)
平和 川のように
平和 川のように
平和 川のように 心に ♪

(振り付けを考えてプレイズダンスに挑戦しよう！)

6. 平和の木にメッセージを書こう

まず、木の幹の絵を描く。(または茶色の紙を幹の形に切って貼る) 緑色の紙を葉っぱの形に切り抜いたものを数枚用意する。その葉っぱに平和のメッセージや絵本の感想を子供たちに書いてもらう。木の幹にその葉っぱを貼り付ける。できたら壁に貼りましょう。

〈ねらい〉

教会で平和の大切さを覚える意味を学ぶ

〈展開例〉

今日は「平和」とはいかに大切なことであるかを皆さんと一緒に学びたいと思っています。とくに今日お話ししたいことは、このようなことを、なぜわたしたちは「教会で」勉強しなければならないのかという点です。これについて私は二つの答えを考えています。

第一の答えは、単純明快です。教会でわたしたちがいつも学んでいる聖書の中に「平和」についての教えがたくさん記されているからです。わたしたちはこの聖書を「神さまのみことば」であると信じています。つまり、神さま御自身がこの聖書の中で「平和」についてお話くださっているのだと信じているのです。神さまがお話しになることを教会のみんなが聞いて学ぶことは、当たり前のことでもあり、しなければならないこと（義務）でもあります。この言い方が正しいものだと分かってくださる方々には「平和」について教会で勉強することは当たり前のことであり、しなければならないことでもあるのだということを必ず分かっていただけるでしょう。もしこの聖書の中に「平和」のことなど全くどこにも書かれていなかったとしたら、教会でそのことについて勉強する必要はないと言われることに反対する理由は、見つけにくくなります。しかし安心してください。「平和」のことなら、聖書にはたくさん書かれています。わたしたちは、遠慮なく大胆に「教会の中で」平和について勉強することができるのです。

第二の答えは、複雑怪奇です。短い時間では話しきれないような難しい話です。それはどういう話なのかと言いますと、今の世界のなかで「キリスト教が盛んな国」などと言われている国に大きな軍隊があり、その国が他の国よりも率先して世界中で戦争をしているということを、日本に住んでいる多くの人たちが知っているということです（「キリスト教が盛んな国」と言われているのがどの国のことであるかは日曜学校の先生から教えて

あげてください—筆者注）。

そのことを知っている日本の大人たちの中には「あの国は、キリスト教の盛んな国である。その国が他の国よりも率先して世界中で戦争をしている。キリスト教はあの国のやり方を応援しているのである。つまりキリスト教とは戦争の宗教なのである」というふうなことをまことしやかに（＝まるでそれが真実であるかのように）説明する人たちがいるのです。

そのことで、わたしたちは困っているのです。「キリスト教は戦争の宗教である」というのは、完全な誤解です。わたしたちの救い主イエス・キリストは、戦争をなさるところか、武器一つさえもお持ちにならず、暴力を受けても暴力をもって返されることなく、十字架のうえにはりつけにされて死んだ方です。そのイエスさまを信じる宗教がどうして「戦争の宗教」と言われなければならないのでしょうか。そのような誤解は一日も早く解かれることを願っています。

しかし、だからこそとても困っていることは、戦争を世界中で行っているあの国が「キリスト教が盛んな国」と言われていることです。私はあの国の行き方のすべてを否定したいわけではありません。しかし、あの国の行き方が原因で「キリスト教は戦争の宗教である」と言われているとしたら、あの国の戦争に対する考え方が根本的に変えられていくことを願っています。

キリスト教は「戦争に反対する宗教」です。そのことをわたしたちは、できるだけ多くの人たちに分かってもらいたいです。そしてそのこと——「キリスト教は戦争に反対する宗教である」ということ！——を世界中の多くの人々の前で証しするために、わたしたちは「教会の中で」平和について勉強する必要があります。

〈お祈り〉

神さま、どうかわたしたちがこれからも教会で平和について勉強することができますように、イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

平和を創り出すとは何をすることを指しているのか理解する。

イエスの生涯から、平和を創り出すことについての模範を学ぶ。

〈展開例〉

質問1 パウロは、何を心がけよとクリスチャンたちに命じているか。

質問2 平和に暮らすとは、どのように暮らすことを指していると思うか。

質問3 自分に対して敵対する人に対しては、神はどうせよと命じておられるか。

質問4 善をもって悪に勝つとは、具体的にどうすることか。

質問5 平和の君と言われたイエスは、どのような模範を示されたか。

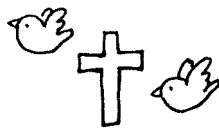
まとめ

ここでパウロは、キリストによって贖われたクリスチャンたちは、どのように生きなければならないかを様々な勧めを通して教えている。その中に、「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい」という勧めがある。この「せめて」とは、「力の限りを尽くして」という意味になる部分であるが、罪との戦いの中にある地上生活においては、私たちが平和を求めよう、

創り出そうとしても、それに敵対し、妨害する人が大勢いる。その結果平和がたとえ創り出せなかったとしても、私たちはいつも最善を尽くして平和を求め続けるべきである。敵対する人々は、私たちが親切な行いを彼らに対してしても、それに対して悪をもって返すかもしれない。そのような時であっても、復讐は公平な裁き手である神に任せて、悪に対して悪ではなく善を返し、善をもって悪に打ち勝つべきである。そうした行為が、平和を愛そうとせず私たちに敵対する人々の心を真に変革する原動力となっていくのだ。平和の君と唱えられたイエスは、真にこの意味で私たちに模範を示された。イエスは、御自分に敵対し、十字架にかけた人間というもののために、御自分の命を進んで投げ出し、その犠牲によって救いの道を拓いてくださった。イエスに従う私たちもこの模範に倣って、たとえ敵対する人々がいても、全力を尽くして平和を求め、彼らに善を行い、地に平和をもたらす者とならせていただきたい。

〈祈り〉

神様、平和の君であるイエス様を私たちのために与えてくださって、ありがとうございます。イエス様は、御自分の生涯を通して私たちに真の平和の意味を教えてくださいました。イエス様を信じ従う私たちも、イエス様に倣って、たとえ敵対する人々が大勢いても、それに負けることなく、悪に対して善をもって打ち勝ち、私たちの周りに平和を創り出すことができるようにお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈聖霊の賜物としての愛〉

13章の「愛の章」に自分の名前を当てはめて読んでみると、自分がここからどれほど外れているか考えさせられます。しかしまた、ここは、それだけが一人歩きして語られがちですが、その置かれた文脈と語られたコリント教会の歴史的状况を踏まえて理解する必要があります。ここから「愛」が理想的に語られがちですが、そもそも「愛」とは、自分一人の中で成り立つものではなく、どこまでも相互的なものであり、相手との具体的な関わりの中で形成されるものです。

「霊的な賜物」は、一人ひとりに例外なく分け与えられ、だれか特定の優秀なエリートだけに与えられるものではないことが12章で確認されますが、そこで大切なことは、一人ひとりが相互に仕えあって「全体の益」となるように奉仕しあうということでした。この相互奉仕と仕え合いによって、一つの体が建て上げられていくことに賜物が与えられた目的があります。パウロは、「霊的な賜物」をそのようには考えず、自分を誇り他者を見下す道具としていたコリントの「霊の人」に対して、この「霊的な賜物」の本質を語ります。それは「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要」であって、この「見劣りする部分をいっそう引き立たせ」ることで、体が組み立てられていくということであり、また、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」ようにして、「各部分が互いに配慮しあう」ということでした(12章12～26節)。

この12章の教えを受けて、互いが仕えあい配慮しあうという「賜物」の活用とはほど遠い状態にあるコリント教会と、特にそこで指導している「霊の人」たちに対して、彼らが誇る各種の多様な「賜物」とは対照的に、「もっと大きな賜物」(12:31)が何であるかを明らかにしたのが、この13章です。そして、愛について語られているこの箇所を丁寧に読んでいくと、まさしくそれが、

霊的だと自負するコリント教会に欠けているものだという事に気づかせられるのです。

ここではまず、異言、預言する賜物、あらゆる神秘に通じた霊的知識、強く完全な信仰、他者への犠牲的精神といった優れた賜物が列挙されますが、これこそコリントの「霊の人」たちの誇る「霊的な賜物」でした。しかしパウロは、それらがどれほど人目に優れたものに映ろうと、そこに「愛がなければ、無に等しい」と断言します(2)。そして優れた様々な賜物と才能を自負し、それを誇っていた「霊の人」たちに、もっとも欠けていたもの、それがここで語られる「愛」なのでした。才能に長けた彼らは、ねたみと傲慢、いらだちとうらみに満ちていました。忍耐なく、情けが浅く、弱い隣人を受け入れることがありませんでした。なぜなら彼らは「自分の利益を求めて」いたからです。ここで取り上げられる「霊的賜物」は、「愛」によってこそ有機的に結びつけられ、生きたものとされます。それらは相互の「愛」によって輝く賜物として活用されるものなのです。しかしそれ以上に、聖霊とは神御自身の「愛」そのものであり、「交わりの絆」としてわたしたちを相互に結びつけてくださる方ですが、その聖霊が分け与えてくださる賜物とは、究極的に「愛」なのです。

コリント教会には、人目も驚くような超自然的現象や奇跡も行われていたようですが、そういうことが本当の聖霊の賜物なのではなくて、むしろそうやって自分を誇り、他者を見下す罪深い自分が碎かれて、互いに深く愛しあい、尊敬して仕えあっていけるということこそ、愛の源である聖霊の起こしてくださる奇跡なのです。

ここで詠われる「愛の賛歌」は、一人悦に入っ達成する理想的な愛の状態というものではなくて、具体的な隣人と造りあげ、建て上げていく「愛」の形成が主眼です。愛は、自分一人で造りあげられるものではなく、共に造りあげていくものなのです。(三川栄二)

8月16日 「第十戒 むさぼりの禁止」カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問61、62

子どもカテキズム

問61 第十戒は何ですか。

答 「隣人の家を欲してはならない」、です。

問62 第十戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまは、私たちに必要なものを与えてくださいます。

しかし、人は、少しでも多くのもを自分のものにしようとしがちです。

むさぼりの心こそ、偶像礼拝です。それを考え、実行してはいけない、ということです。

むしろ、神さまは、私たちの心を人の幸せを願うように造り変えてくださいました。

ですから、私たちは神さまから与えられたものに満足し、感謝し、

人に与えることを喜びとするのです。

参考教理問答 ウ小教理79-81、ウ大教理146-148、ハイデルベルグ113

〈満足しなさい〉

第十戒「むさぼるなかれ」とは、「満足しなさい」と言い換えることが可能でしょう。「私たち自身の状態」を今あるがままに満足して受け入れ、また「隣人」と「その所有物」に対し不必要な不満を抱かないということです（ウ小教理問80）。それは現状の不平を呑み込んで、あらゆる不平等に抗うことなく沈黙せよということではありません。他者との比較が無意味であるということです。隣人の地位、名声、財産、才能、容姿、また家族状況……etc、それらと自分を比べては、無意味な劣等感にさいなまれて苦しむことを、神はお許しになりません。神の愛は、どこまでも平等です。隣人が私以上に愛されていることなどありません。「神さまは、私たちに必要なものを与えてくださいます」という信頼に、私たちは開かれるべきです。

〈「むさぼりの心」という偶像崇拜〉

この神の愛への信頼にどこまでも立ち続けることができるかどうか、それこそがここでの問題の本質です。私たちの信仰が問われています。その意味で、このカテキズムが「むさぼりの心」をはっきり偶像として意識させようとしている点は優れ

ています（エフェソ5:5）。「少しでも多くのもを自分のものにしよう」と願う心は自然の道理のように思えます。しかしそのような世の常識を信じ従うか、すべてを備えてくださる全能の神の愛に信頼するか。「金銭への執着（ヘブライ13:5）」ではなく、神の愛への執着こそが必要です。

〈愛はねたまない〉

今日の説教テキスト（一コリント13章、特に4節）との関連では、「ねたま」の問題を考えることも大切です。ローマ12:15には「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という有名な勧めがあります。しかし、泣く人と共に泣くことはできても、喜ぶ人と共に喜ぶのは至難の業です。挙げなくても具体的状況がすぐに浮かぶでしょう。私たちはそんなに大きな愛を持っていません。共に喜ぶどころか嫉妬に狂ってしまう。これ乗り越えるには、「人の知識をはるかに超える」「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さ」を知り、それに満たされるしかありません（フィリピ3:17-19）。この圧倒的な愛に、まず自分自身が打たれてこそ「隣人の幸せを願う」愛も開かれます。聖霊は、愛の賜物を与え、必ずその道を開いてくださいます。（坂井孝宏）

8月16日

「第十戒 むさぼりの禁止」

説教展開例

テキスト コリントの信徒への手紙 一 13章1～13節

カテキズム 子どもカテキズム 問61、62

参照カテキズム ウェストミンスター小教理問79～81、同大教理問146～148
ジュネーブ信仰問答問213～215

〔単元のねらい〕

今回で、十戒の学びも最後となります。十戒を学ぶこと全体に言えることですが、十戒の要約（問40）を常に覚え、十戒の目指す方向を忘れてはなりません。そのため十戒の学びを行う時には、同時に要約も繰り返し教えていただきたいと思います。またそのことにあわせて、十戒を学ぶ時には、消極的服従「～ねばならない」を語ってしまうことがあるかと思いますが、そうすれば倫理的な学びに留まってしまいます。それよりもむしろ、神の愛によってもたらされた律法としての積極的な服従（小教理問80、大教理問147）の面を意識させ、子どもたちに教えていただきたいと思います。これらのことを通して、子どもたちがキリスト者として積極的に律法に従った生活が形成されるように語っていただきたい。

「心の中で思うこと」

長かった十戒の学びも今日で最後になります。私たちは繰り返し十戒の言葉を告白しますが、「～ねばならない」と繰り返し告白することにうんざりしている人たちもいるのではないのでしょうか。金持ちの青年の譬え（マタイ19:16-30）において、青年は「そういうことはみな守ってきました」（マタイ19:20）と語りましたが、そのように言いたい人も多いかと思えます。「これを守ることが神さまを信じることである」と語られれば、「もう教会に行きたくない」と考えてしまう人もいるかも知れません。先生も、その通りだと思います。意味も分からずに「～ねばならない」と言われるのは、律法主義だからです。

しかし、神さまがなぜこの様な戒めを私たちに求めておられるのかを、もう一度思い出していただきたいと思えます。問41で語られていましたので、もう一度確認いたします。

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」、です。

私たちは、神さまが語られる戒めを守るから救われるわけではありません。イスラエルの人々が無条件に神さまの御業により、奴隷から解放させられ、約束の地カナンにまで導かれたように、私たちはもうすでに神さまによって捕らえられ、罪が赦され、救われているのです。そして戒めは、神さまによって救われた私たちが、神さまがお与えくださる救いの道を歩むとき、その道から逸れないようにするための指針です。

さて、十戒は二つの部分に分けられるということをすでに学んできたかと思えます。後半の部分は、隣人を愛するということでした。そして、その第五戒から第九戒の戒めは、神さまによって愛されている者として、隣人もを愛するために、人を傷つけてはいけなことが記されてきました。直接的に相手の人と関わるので、神さまが語られる言葉も納得することができるでしょう。

しかし、第十戒は異なります。隣人のものを欲する心・むさぼりが問題となっています。「実際には、他人のものを盗んでいるわけでもなく、心で思うくらい良いではないか」と思われるかも知

れません。しかし私たちは、こうしたことを心の中で思ってしまう弱さがあることを、神さまの御前に受け入れなければなりません。神さまは私たちを救ってくださると同時に、私たちが地上において生活するために必要なものをすべてお与えくださいます。しかし他人のものを欲することを心の中で持つことは、私たちが暮らしていく中であって必要なものを神さまがすべて満たして下さるわけではないとの、神さまへの不平、不満の表れです。神さまは、私たちのこうした心の弱さ・罪をも、充分理解した上で、私たちをなおも愛して下さり、私たちをお救いくださったのです。

神さまの愛は、主イエス・キリストの御業により確認することができます。主イエスは、私たちを救うために、人としてへりくだり、お生まれくださいました。主イエスは、私たちを救うために、地上の生涯、律法の下で、律法に従われました。そして主イエスは、私たちを救うために、私たちに代わって十字架にお架かりくださいました。

しかし主なる神さまは、私たちが救われるために、私たちに律法に従うようにとの、無理な条件は出されません。私たちが律法を全うすることな

どできないことをご存じであるにも関わらず、私たちが神の子どもとしてくださり、私たちを救ってくださったのです。これが愛することであると、神さまは私たちにお教えくださっています。

この愛とはどのようなことであるかを、コリントの信徒への手紙一13章4～7節では次のように語ります。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

先生を含めて、私たちは皆、他人のものを欲することなく、むさぼらないことなどできません。しかし、主はそれでもなお私たちを愛し、救ってくださっています。だからこそ、私たちは完全に神さまの戒めに聞き従うことなど不可能ですが、神さまによって真に愛されている者として、できる限り私たちも神さまを愛して礼拝すると同時に、神さまが求めておられるように、周囲の人たちに愛をもって接していくことができるように、求められているのです。 (辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章17節前半

隣人の家を欲してはならない。



〈ねらい〉

他の人のものを欲しがることを止め、神様が自分に必要なものをすべて与えてくださっていることに感謝する。

〈お話〉

みんなは、どんなおもちゃを持っていますか？ お父さん・お母さんに大好きなおもちゃを買ってもらったときのことを覚えていますか？ 自分が欲しかったおもちゃを買ってもらったとき、きつとみんなはとっても嬉しかったと思います。でも、今はどうでしょう？ 今でも、そのおもちゃを大切にしていますか？ それとも、今度はもっと新しいものが欲しい、もっと大きいものが欲しい、もっとたくさん欲しい、もっともっと……と欲しがってばかりいないでしょうか？

神様は、私たちが必要なものをすべてくださると約束してくださいました。「すべて」です！ 素晴らしいですね。もうすでに神様が私たち一人ひとりにたくさんくださっているのです、私たちはもっともっと……と欲しがる必要がないのです。それなのに、私たちは他の人のものが欲しくなってしまうのです。自分よりも他の人の方がたくさん

持っているように思ったり、他の人の方が良いものを持っているように思ったりして、他の人のことがうらやましくなってしまうのです。それは、私たちの心の中に罪があるからです。

そんな私たちを罪から救うために、神様はイエス様をくださいました。イエス様が私たちのために、私たちの代わりに死んでくださったのです。

神様は、私たちが必要なものをいつも用意してくださっています。だから私たちは何も心配したり、欲しがったりする必要がありません。他の人たちと比べたり、うらやましく思ったりしなくて良いのです。私たちが必要なものすべてをくださっている神様に感謝しながら、神様がくださったものを大切にしていきたいですね。

〈お祈り〉

神様、いつもたくさんのおもちゃをくださってありがとうございます。私たちは、すぐに他の人のものをほしがったり、他の人をうらやましく思ったりしてしまいます。でも、もう神様が私たちに必要なものをすべてくださってるから、感謝します。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

自分パズル

■用意するもの

- ・厚紙
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・はさみ

■作り方

厚紙に人の形を描き、切り抜く。顔や洋服を描いても良い。

切り抜いた人の形をさらに8～10ピースに切り分ける。

直線・曲線を織り交せて、色んな形のピースにする。

一つひとつのピースの裏面に、神様がくださったものを書き出す。

自分の家族やお友だちの名前、持ち物、賜物など、色んなものが書けると良い。

バラバラにして、パズルとして遊ぶ。



〈ねらい〉

むさぼりは、いろいろな罪を生み出す。神様が与えてくださったもので満足することができる人は幸いです。

〈展開例〉**1. むさぼるとは？**

むさぼるとは、自分の必要でないものをほしがることです。他の人が持っているものをうらやましく思うことです。

お友だちの持っている新しいおもちゃや文房具を見て、いいなあ、自分も欲しいなあと思ったことはありませんか。今、使っているものが十分使えるのに、人が持っているものと比べると、それが欲しくてたまらなくなることがあります。それを手に入れることができたなら、もっと幸せになれるのに、とってしまうのです。これをむさぼりといいます。

2. なぜ、むさぼることはいけないの？

自分には今必要でないのに、人の持っているものや、もっといいものが欲しくなるのは、欲張りな心があるからです。それを手に入れれば、本当に幸せになれるのでしょうか。しばらくするとまた、もっともっといいものが欲しくなります。

むさぼる人は、絵に描いたごちそうを食べたがる人のようです。食べても、決してお腹がいっぱいになったり、満足することはありません。

むさぼりは、大きな罪を生み出す種のようなものです。自分中心の欲張る思いが、盗みや嘘や殺

人などの大きな罪を生み出します。

物だけではありません。周りの人と比べて、自分の顔やかっこうが嫌になったり、不幸でみじめだとも思うことも同じです。

神様は、私たちが本当に必要なものを与えてくださるお方です。それなのに、必要でないものを欲しがり、他の人をうらやましく思うことは、神様に文句をいうことです。

3. 今、持っているもので満足しなさい

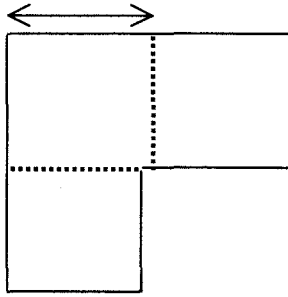
ヘブライ人への手紙13章5節には「金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神御自身、『わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない。』と言われました。」と書かれています。

生まれたばかりの赤ちゃんは何も持ってはいません。でも、お母さんの腕の中で安心して眠っています。自分に何が必要なのかを知っているお母さんが、側にいてくれるからです。たとえ自分が持っていないなくても、赤ちゃんの必要を満ち、愛をもって見守ってくれるお母さんがいつも側にいてくれることで十分なのです。

私たちがすべてを持っておられる神様がいつも共にいてくださることで満足すべきです。そうすればたとえ少ししか持っていないなくても、持っているものを感謝し、それを喜んで神様のために用いることができるようになります。

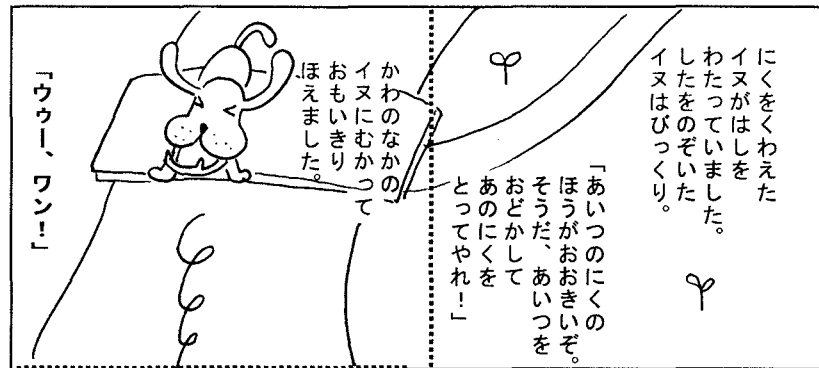
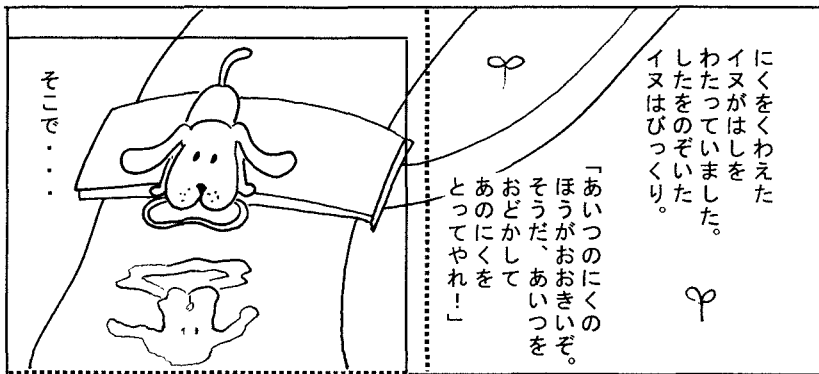
4. 「よくばりな犬」(イソップ童話)の絵本を作ろう (p. 77参照)

「よくばりないぬ」の絵本の作り方

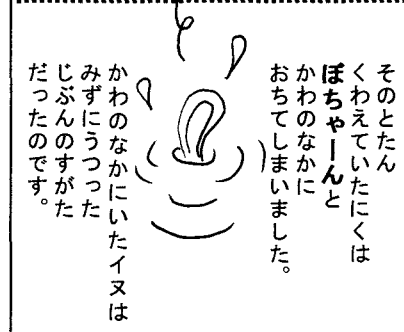


厚紙を左の図のような形に切り、
 を内側に折る
 絵と文をかいておく
 (ここまでやっておく)
 色をぬる。
 完成したら読みながら開く。

この折り曲げる部分の幅は上の幅より短めにする



下に開く



時間があつたら表紙に「よくばりないぬ」と書いて絵もかく

〈ねらい〉

第十戒の大切さを学ぶ

〈展開例〉

○おそらくこれが「いちばん難しい戒め」です

十戒の最後、第十戒は「隣人の家を欲してはならない」です。「欲してはならない」の部分は「貪ってはならない」と言い換えることもできます。ただし「欲する」（これは昔の言葉づかいです）とか「貪る」とか言われても意味不明だなあと感じる人には、「欲しがる」とか「羨ましいと思う」と言い直せば分かっていただけでしょう。「隣人の家」はあなたの家の隣に住んでいる人の家だけのことでありません。もっと広い意味です。世界のすべての人を指しています。「家」は、わたしたち人間の持ち物の代表として挙げられています。その中には、物やお金だけではなく、その人の知恵や力、才能や外見などのすべてが含まれています。

今言ったことをまとめていえば、「隣人の家を欲してはならない」とは、自分以外のすべての人が持っている物を見て「ああ、うらやましいなあ」と思うだけで、いえ、そのようにほんのちょっと感じるだけでもそれはあなたの罪ですという意味なのですということです。

「え—————っ!?!」とびっくりしたのでしょうか。これはたいへんなことになったと。私もこの話をしながら胸がどきどきしています。だって、こんなことを言われてしまえば、私が「罪人」であることは確定しますし、私以外のすべての人も「罪人」であるということが当てはまってしまうでしょう。

わたしは今朝起きてから今までの間にも、人のものを見て「ああ、うらやましいなあ」と感じてしまいました。自分よりスマートでスリムな人、買いたくても買えないほど高い自動車や洋服やかばんや靴を持っている人、自分よりきれいな声で賛美歌をうたえる人、自分よりも優しい顔で笑える人。「うらやましいなあ」という言葉は使いたくないので(悔しいので)ぐっと我慢しても、「……

いいなあ」くらいは感じてしまいます。そういうことを言葉にしたくないので(恥ずかしいので)黙っていても、心の中ではどうしても感じてしまいます。

そのこと——他の人のものを見て「いいなあ。うらやましいなあ」と感じる——だけでも罪なのです。それが第十戒の意味なのです。

皆さんはどうでしょうか。休みの日に友だちと遊びに行くことになり、ある場所で待ち合わせをしていました。わたしはちょっと早く着いたので待っていたら、友だちが来ました。その友だちの手には、最新型の携帯電話と腕時計。それはつい最近お母さんに「買ってください。お願いします」と頼み込んだのに「ダメよ」と言われて、買ってもらえなかったものでした。それを、友だちは持っていました。そのようなときに、「ああ、うらやましい」と感じない人がいるのでしょうか。たぶん少ない、いえ、ほとんどいないのではないかと思います。

ですからこの戒め（第十戒）は、わたしたちにとっては十戒のなかでいちばん難しい戒めであると言ってよいものです。そのように昔から言われてきました。「いちばん難しい」の意味は、これを誰も守ることができないということです。

しかし、それでは神さまは、こんなに難しい、誰も守ることができない戒めを、どうして人間に与えられたのでしょうか。神さまは、難しすぎる戒めをわたしたち人間に押し付けて「ほら、やっぱり守れなかったよ」とお笑いになるような意地悪な方なのでしょうか。もちろん決してそういう方ではありません。

この戒めのなかで神さまが願っておられることは、わたしたち人間が「自分は罪人である」と認めることです。わたしたちは、罪人だからこそ、神さまの助けが必要な人間なのです。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちが毎日、知らず知らずのうちに犯している罪をどうかお許しください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

むさぼりが罪の根になっていることを理解する。

むさぼりとは正反対の愛の特性について理解する。

〈展開例〉

質問1 子どもカテキズム問62の答えで、むさぼりの心は何であると言われているか。

質問2 私たちが何かをむさぼる時、私たちと神との関係はどうなるだろうか。

質問3 なぜむさぼりは偶像礼拝とされるのだろうか。なぜそれをしてはならないのだろうか。

質問4 神は、私たちの心をどう変えてくださったとあるか。

質問5 神は愛であると聖書には書いてあるが、第一コリント13章によると、愛の特性はどのようなものであると書いてあるか。

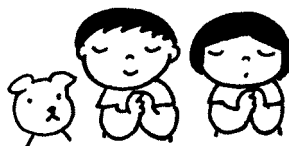
まとめ

第十戒は、むさぼりの禁止であるが、こうした行動ではなく心の問題が十戒の最後に置かれていることは大変興味深い。第六戒の殺人、続く姦淫・盗み・偽証は、全て人間の心の中にある自己中心な欲望をその根として持っている。神から与えられた物、与えられた立場を満足して受け入れることができない人は、他の人の持ち物、立場などを

自分の本来所有すべきものとして欲することになる。正当な手段でそれを得ることができなければ、不法な手段で得るといことになり、その手段が殺人・姦淫・盗み・偽証などになるわけである。私たちに必要なものを与えてくださる神を信頼しようとせず、与えてくださるものに満足しようとしない状態では、神は神として扱われてはおらず、私たちの心の中では、私たち自身の欲望が神の座を占めることになる。これこそが偶像礼拝である。神ならぬものを神としている状態では、私たちは神に従って人生を歩むことなどできようはずがない。だから、私たちは、偶像礼拝であるむさぼりを捨てなければならないのである。私たちには自分の心を変えることはできないが、神は私たちの心をきよめ、自分自身の欲望を偶像とし自分の幸せのみを願う心から他人の幸せを願う心へと変えてくださる。そうしたきよい心を一言で言い表すなら、それは愛であると言えるが、この神の愛が姿を取って私たちの前に示されたのが、イエス・キリストである。

〈祈り〉

神様、私たちにいつも必要なものを与えてくださってありがとうございます。私たちは貪欲で、与えてくださったものに満足せず、すぐ他人のものを欲しがり、それが手に入らないと不法な手段を使ってでも手に入れようとする汚れた者であることを懺悔いたします。私たちのこの汚れた心をきよめてくださり、いつもあなたに信頼し、あなたの与えてくださったものに満足し、それを感謝して受ける者にならせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈御言葉を受け入れることへの励まし〉

『テサロニケの信徒への手紙』は、パウロが第2次伝道旅行の途中、コリントで天幕造りをしながら伝道していた時（使徒18:1以下）に書き送ったもので、新約聖書の中に現存するパウロの手紙の中では、最初に書かれた手紙とされています。コリントに来る前、パウロは「フィリピで苦しめられ、辱められ」（使徒16:16以下）、コリントでも「激しい苦闘」（2:2、使徒18:5以下）に出会いました。ユダヤ人と彼らにそそのかされた暴徒によって襲われ、法廷に引立てられたこともありました。しかしそのような中でも、主はパウロと共にいて、「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる」と励まされるのでした（使徒18:9,10）。パウロは危害にあい襲撃も受けましたが、そのただ中で守られ、害を受けることはなかったのです。主はパウロに対して真実な方でした。その主に対する信頼の中で、この手紙は執筆されています。

この手紙が執筆された理由は、次第にユダヤ人や周辺の人々からの迫害が厳しくなっていたことにありました。フィリピで鞭打たれ、投獄、釈放された後に赴いたテサロニケで、パウロは三回の安息日にわたって伝道をしましたが、多くの異邦人が福音を聞く姿をねたんだユダヤ人たちが暴動を起こし、そのためにパウロは夜のうちにテサロニケを去らなければなりません（使徒17:1-10）。しかもパウロが次に行ったペレアにまでテサロニケのユダヤ人がついてきてパウロの伝道を妨害したほどですから（同13）、テサロニケに残って福音に生きようとした、生まれたばかりのキリスト者にとっては非常に厳しい環境だったということができます。

そのように次第にユダヤ人や周辺の人々からの迫害が厳しくなる中で、主の再臨は近い、世の終わりは間近かだとする信仰の中にテサロニケの人々は生きていましたが、この終末への待望がい

ささか行き過ぎ、誤った待望の仕方をして無為に日々を過ごす人々がでてきたので、パウロは正しい主の待望の仕方を語ろうとしました。また主の再臨の前に世を去り、死んでしまった信仰者は一体どうになってしまうのか不安に駆られる人々もいました。パウロはそういった不安に答えるために、この手紙を書き送ったのです。

その問題に触れる前に、まずパウロは彼らを励まし、感謝します。パウロにとって彼らは、祈る度に感謝の心を起こさせ、喜びの中で想起させる人々、他の信仰者の「模範」（7）だったのでした。ここでもパウロは、「信仰と希望と愛」を語ります。「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、主イエス・キリストに対する希望をもって忍耐していることを、心に留めている」と（3）。そのように彼らを激励することで、彼ら自身はどこに立つべきかを示し、困難の中にあっても「希望をもって忍耐している」ことを勧めるのでした。

またかつてテサロニケで福音宣教をしたとき、「ただ言葉だけにやらず、力と、聖霊と、強い確信とによった」ことをも明らかにします（5）。テサロニケの後に行ったアテネで、パウロはこの世の知恵を尽くした言葉によって福音を語り、失敗してしまいます。そこで深く傷つき、失望落胆のうちにコリントにたどり着くのですが、そこでパウロは「わたしの言葉も宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、霊と力の証明による」ことを決心したのでした（一コリント2:4）。そのコリントでこの手紙を書きながら、パウロは福音がまさしく人間の知恵によらず、愚かと思える「十字架の言葉」であることを深く理解したのでした。それは、人間の業や熱心に基づくものではなく、聖霊の御業にほかなりません。テサロニケの人々も「ひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れた」のであり、そこに彼らが立つようにと勧めるのでした（6）。そのことこそ、苦難に耐えていく秘訣だからでした。（三川栄二）

子どもカテキズム

問63 あなたは、この十戒を喜んで生きるのですか。

答 はい。聖霊なる神さまの助けの中で、御言葉を喜んで守り、生きます。

参考教理問答 ウ小教理35, 87, 89, 90、ハイデルベルグ86-91

〈聖霊なる神さまの助けの中で〉

聖霊の助けがなければ、私たちの救いはありません。メジャーリーグの松坂投手がどれだけ剛速球を投げても、それを受けることのできる同等のキャッチャーがいなければ、野球にはなりません。イエス・キリストの成し遂げてくださったあがないの御業は圧倒的恵みですが、それを受け取らせてくださる方がいなければ、私たちは恵みを無駄にしてしまうのです。それが罪人の救いについての無能力です。「十戒を喜んで生きる」、これもまた全く自明ではありません。聖霊の助けがなければ、まったく不可能です。聖霊が目を開いてくださらない限り、「十戒」なんて古代オリエンタル世界の一禁令に過ぎません。神の恵みのメッセージとしては聞けません。

〈御言葉を喜んで守り、生きる〉

この場合の「御言葉」とは直接的には十戒を指しますが、そこに凝縮されているところの、神の「教え(トラー)」と道の全体を含んでいると言っていいでしょう。それは旧新約聖書の全体から読み取れるものであると同時に、主日礼拝における説教を通して語りかけられる、神の愛の言葉です。聖霊は、無秩序にではなく、「御言葉」を通してお働きになるというのが改革派教会の伝統的理解

です。聖書を読み、説教に真摯に耳を傾ける私たちの心に働きかけ、「御言葉」の慰めと励まし、時には奇跡としか思えないような喜びを与えてくださいます。そして私たちが、いっそう「御言葉」を慕い、信頼し、服従し、「喜んで守り、生きる」ことができるように絶対確実に導いてくださいます。それが聖霊の力強いお働きです。

〈主イエスに似る者となる〉

そのような「御言葉」体験の繰り返しによって、私たちは主イエスに似る者とされていきます(一テサロニケ1:6)。私たちは墮落して、歪んだ神のかたちしか持たない罪人ですが、人間本来の神のかたち、いやさらに言えば、人間が本来そこにたどり着くことを神から期待されていたところの至高の命を体現された、主イエス・キリストに似せられていくのです。完全聖化は地上の歩みにおいては実現しませんが、その救いの完成に向かって、そのような「キリストに似る＝聖化」の道を歩ませていただくことは幸いです。聖霊は「十戒」を通して、私たちをそのように整え導いてくださいます。キリストに似せられること、クリスチャンの人生において、これ以上に素晴らしいことはありません!! (坂井孝宏)



8月23日

「神のおきてを喜ぶ生活」

説教展開例

テキスト

テサロニケの信徒への手紙 一 1章2～10節

カテキズム

子どもカテキズム 問63

〔単元のねらい〕

これまで十戒を学んできた。子どもカテキズム問63は、わたしたちが今や十戒を喜んで生きる者とされていること、そしてそれが聖霊の助けによるのだということをあきらかにしている。義とされることが恵みによるように、聖とされること、すなわち（み言葉に従う）感謝の応答のいとなみも恵みによる。救いの恵みを喜び、キリストにある自由を生きることによって、信じる者たちは律法をまっとうする。そのことをもう一度確かめたい。

「み言葉を喜ぶ」

今朝の聖書の箇所で、パウロはテサロニケ教会の人々に向けて、わたしはあなたがたのことでとても喜んでいますが、そして神さまに感謝しています、そう語りかけています。テサロニケの人々のことで、パウロは大きな喜びに満たされていました。なぜなら彼らのみ言葉を信じ、受け入れたからです。

わたしたち人間は、なぜ神さまを知り、神さまと出会い、神さまと交わることができるのでしょうか。それは神さまのほうからわたしたちにご自分のことを知らせてくださるからです。また、わたしたちに近づいてくださるからです。

そのおりに、神さまのみ言葉によってわたしたちに自己紹介をされます。み言葉によってわたしたちにご自分がどのようなお方であり、イエスさまをおしてどのようにすばらしい救いのみわざをなしてくださったのかを教え示してくださいませ。そしてみ言葉を信じ、受け入れるとき、わたしたちは救われるのです。

テサロニケの人々もそのようにしてみ言葉を受け入れ、救われました。彼らはかつては偶像、いつわりの神々を拝んでいました。けれどもみ言葉をとおしてただおひとりの生けるまことの神さまを知り、信じるにいたったのです。

そればかりか、そのときテサロニケの人々はひどい苦しみの中にあつたにもかかわらず、み言葉を受け入れたのです。この世には苦しみや悩みか

ら逃れるために何かの神々に頼る人々が数多くあります。そのような人々は信じたのに苦しみや悩みを取り去られないとわかると、そうした神々をかたんに捨ててしまいます。けれどもテサロニケの人々は、神さまの救いの真理を知っていました。それは神さまの恵みのすばらしさは苦しみや悩みの中でこそ証しされるということです。イエスさまの命の力は、人間の弱さの中でこそじゅうぶんにあらわされるということです。このことを知ることは、すばらしいことです。そして苦しみの中でもイエスさまをしっかりと仰いで、忍耐と希望に生き抜いていたテサロニケの人々のことは、まわりの教会にも伝えられて、多くの人々を慰め、励ましたのです。

そのようにテサロニケの人々がイエスさまの証人として歩んでいたことが、パウロの喜びでした。けれども、これはテサロニケの人々自身の力でそうしていたというではありません。神さまの恵みの力によることだったのです。

神さまはわたしたち人間にみ言葉をくださいませますが、わたしたちがみ言葉を信じ、受け入れることができるのは、み霊の助けと導きによることです。み霊がみ言葉を教えてくださるのです。み霊がわたしたちの心を開き、み言葉を受け入れることができるようにしてくださいませ。

テサロニケの人々も、このみ霊の大きな、恵み

の力をいただいたのです。そしてどのようなときにも、み霊によって守られ、支えられたのです。それゆえ、パウロはテサロニケの人々のことを喜んでいるだけではありません。彼らにみ言葉を信じる信仰を与え、大いなる恵みのもとにとどまらせてくださる神さまのみ名をほめたたえ、神さまに感謝しているのです。

もうひとつ、テサロニケの人々はみ言葉を受け入れただけでなく、み言葉に従っていました。それはイエスさまにある自由をいただいていたからです。

自由とは、何でも勝手気ままにできるということではありません。イエスさまに従うことができる人こそ、ほんとうに自由な人です。イエスさまのみ言葉を信じた人は、必ずイエスさまのみ言葉に従います。イエスさまご自身にならう人になります。

これまで十戒を学んできました。十戒は神さまのみ言葉です。イエスさまの十字架の贖いによって罪ゆるされ、救われる以前は、わたしたちは十戒を守り行うことができませんでした。罪人は神さまのみ言葉にならうことはできないからです。わたしたちがまだ罪人であったとき、わたしたちは不自由でした。

しかし今、救われたわたしたちは罪の支配からときはなされ、イエスさまのみ霊に生きる新しい人に生まれ変わりました。み霊がわたしたちを住まいとしてください、わたしたちのうちに生きて働いてくださっています。そのようなわたしたちにとって、神さまのみ言葉に従うことは喜びです。イエスさまにならう生活をするのは喜びです。わたしたちはみ言葉を喜び、み言葉に従って生きることができるのです。なぜならわたしたちはみ霊の恵みの支配の中にあるからです。

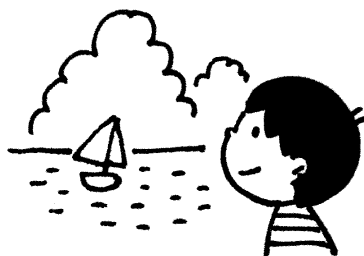
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句]

詩編 119編105節

あなたの御言葉は、わたしの道の光

わたしの歩みを照らす灯。



〈ねらい〉

私たちが御言葉を理解し、十戒を守って生きるためには、聖霊の助けが必要なことを知る。

〈お話〉

みんなは聖書を持っていますか？ 聖書には、神様のことがたくさん書いてあります。聖書を読むと、神様のことがもっともっとよく分かるようになります。そのために、神様が私たちに聖書をくださいました。

先週まで、「十戒」についてのお話を聞いてきました。十戒は、神様が私たちにくださった10個のご命令でした。私たちのことを愛する神様が、私たちを守るために教えてくださったことでした。

でも私たちは、自分たちだけでは、聖書を読んで神様のことを理解したり、神様のご命令を守ったりすることができません。私たちの中にある罪が邪魔をするからです。

罪をいっぱい持っている私たちは、せっかく神様がくださった恵みを受け取ることができませ

ん。せっかくおいしいおやつが目の前にあるのに、私たちは罪で目が見えなくなっているのです。おやつに気づかず、食べることができないのです。神様が私たちのために用意してくださった、本当においしいものを食べることができないのです。

そんな私たちが聖書に書いてあることを理解して、信じて、従っていくためには、聖霊に助けをいただくことが必要です。聖霊が私たちを助けてくださるので、私たちは聖書の言葉が分かります。聖霊が助けてくださるので、私たちは神様を信じてことができます。聖霊が助けてくださるので、私たちは神様に従っていくことができます。聖霊が助けてくださるので、私たちは神様の恵みを受け取ることができるのです。

〈お祈り〉

神様、私たちに聖書や十戒をくださってありがとうございます。神様のことをもっとよく知って、神様に従う子になりたいです。だから、聖霊の神様が助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**礼拝カード****■用意するもの**

- ・B5あるいはA4の色画用紙
- ・「十戒」「主の祈り」「使徒信条」を書いた紙（子どもが読みやすいように、平仮名あるいは振り仮名付きで書いておくと良い）
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・リボン・シールなど

■作り方

画用紙を半分に折り、カードにする。

カードに「十戒」「主の祈り」「使徒信条」の紙を貼る。

カードの余白に、絵を描いたりリボン・シールなどを貼って、カードを飾る。

「十戒」「主の祈り」「使徒信条」を覚えられるまで、礼拝で使うように励みます。

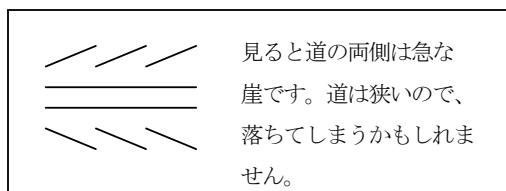
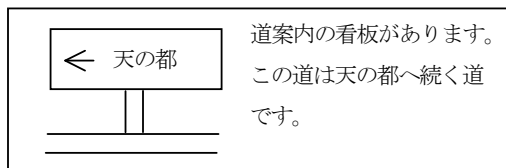
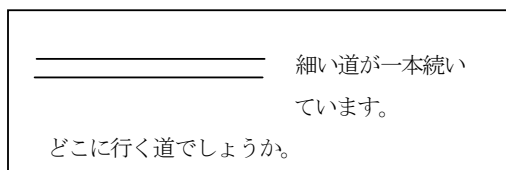


〈ねらい〉

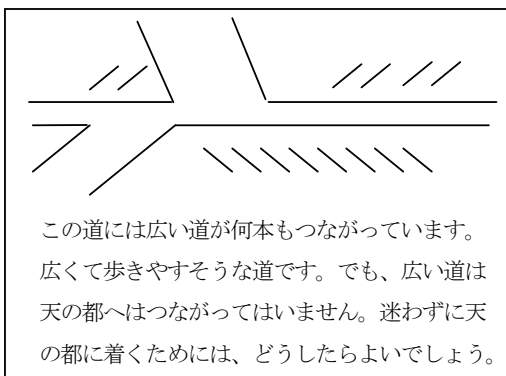
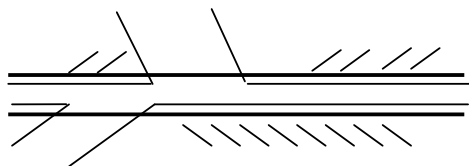
神のおきてが、なぜ私たちにとって喜びなのかを考える。

〈展開例〉**1. 導入**

大きな紙かホワイトボードに、下のような絵を描きながら話しを進めていく。



この道をふみはずさずに、安全に、また迷わずに進むためには、何があったらいいと思いますか。
(子どもたちに考えてもらう)

**2. 十戒は私たちを守り導くガードレール**

この道にガードレールがついていたら？

崖から落ちる心配をしたり、道に迷ったりせずに進んでいくことができると思いませんか。

十戒は、私たちが天の都、永遠の命に至るために神様がつけてくださったガードレールです。

「〇〇をしてはいけない」とおきてによって、神様の道からはずれないように導いてくださらなければ、道を踏みはずしてしまいます。道からはずれそうになったとき、「それは、神様のお嫌いになることだよ」と十戒が教えてくれます。神様が十戒をお与えになったのは、私たちを愛をもって導いてくださるためです。

3. 私たちを導かれる聖霊

でも、十戒を完全に守ることは、罪ある私たちにはできません。道をそれてばかりの私たちです。そんな私たちを、聖霊なる神様が、手を取って導いてくださいます。ですから私たちは、安心して喜びを持って神様の道を歩むことができます。

4. 「ゴールをめざせ」ゲーム

- ① 空き缶を数個、用意して、ジグザグに置く
- ② 落とし穴、底なし沼、へびの穴、わななどを紙で作って道の途中に置いておく。
- ③ 一人が目隠しをして空き缶にふれないように進み、ゴールを目指す。
- ④ 周りの人は缶や穴などにふれないように、声で教えてあげる。(ふれたら次の人と交代)

〈ねらい〉

聖書を学ぶ人には生ける神の教えに従うことが求められていることを学ぶ

〈展開例〉**○勉強するだけで終わりでしょうか**

先週までにモーセの十戒を学んできました。さて、今日みんなで考えてみたいことは、十戒を勉強したわたしたちは、これからどうすればよいのでしょうかということです。

「え？『これからどうすればよいのでしょうか』と聞かれても、どういう意味か分からない」と思われるでしょう。わたしが言いたいのは、こういうことです。わたしたちは、教会に来て、聖書を通して神さまの教えを勉強しています。しかし、ただ勉強するだけで終わってよいのでしょうか。聖書という教科書を読んで、その中に書かれていることを頭の中に記憶して。それだけで、わたしたちのすることは終わりでしょうか。そんなふうに皆さんは、まさか考えておられませんよね（？）ということ。これが皆さんへのわたしの質問の趣旨です。

その答えは、聖書はこれを「勉強する」というだけで終わりにしてよいものではありませんということ。聖書を勉強することは、とても大切です（「大切にない」と言うてはなりません）。しかし、勉強すること以上に大切なことは、わたしたちが聖書の教え（とくにモーセの十戒の教え）に従って生きることです。

もちろん、わたしたちは、聖書の教えを完璧に守ることはできません。しかし、たとえ完璧でなくても、それを守ろうと努力することはできます（「努力する必要はない」と言うてはなりません）。それが大切なのです。

ですから、たとえば、「父母を敬いなさい」という教えが聖書の中にあることを勉強した人は、これから父母を敬わなければなりません。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という教えを知っている人は（キリスト教安息日と呼ばれる）日曜日の礼拝に出席することを重んじなければなりません。

「殺してはならない」、「姦淫してはならない」、「盗んではならない」、「偽証してはならない」、「隣人の家を欲してはならない」という戒めを知っている人は、それを守るように努力しなければなりません。

「こんな難しいことは守れません。うるさいことを言っただけでワタシを困らせないほしいです。神さま、どうかあっちに行ってください」とか言って聞き直してはいけません。神さまの戒めを破ることは、本当に悪い罪なのです。

○あなたの犯した罪の「被害者」がいます

そして、ぜひ考えてほしいことは、あなたが犯した罪の結果です。あなたが罪を犯すとき、あなたの罪の被害者（ひがいしゃ）が、どこかに必ずいます。そのことを忘れないでほしいのです。ほかの人もいる前で大きな声で「バカ！」と言われて傷つかない人はいません。信頼していた人に裏切られたのにショックを受けない人はいません。でたらめな情報を流されて、暴力を受けて、大切なものを盗まれて、悲しい思いにならない人はいません。

わたしたちの救い主イエスさまはわたしたちの罪をゆるしてくださる方です。しかしそれは、わたしたちが神さまの御心に反することを何の反省もなしに繰り返してもよい（イエスさまはわたしたちの罪を何度でもゆるしてくださるのだから）という意味ではありません。

もしあなたが、自分が犯した罪の被害者たちが悲しんだり苦しんだりしていることを知りながら、それでもわざと罪を犯し続けようとするなら、あなたは本当に悪い人です。

神さまはあなたが自分の罪を認めて深く悔い改めることを、強く望んでおられます。

〈お祈り〉

神さま、どうか、わたしたちが毎週の教会で勉強していることを無駄にせず、神さまの教えのとおりに生きていけるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

私たち自身には神のおきてを喜んで守る力はないことを理解する。

聖霊が私たちに働いてくださる時に、神のおきてを喜んで守る力が与えられることを理解する。

〈展開例〉

質問1 パウロは、なぜテサロニケの信徒たちのことをいつも神に感謝しているのか。

質問2 テサロニケの信徒たちはどのようにしてクリスチャンたちの模範となるに至ったとあるか。

質問3 「わたしたちに倣う」「主に倣う」とは、どういう行動を指すか。

質問4 子どもカテキズム問63の答えて、「御言葉を喜んで守り」とあるが、どうすれば喜んで守ることができるか。

質問5 あなたは、御言葉を喜んで守っているか。もしそうできないとしたら、それはなぜだと思うか。

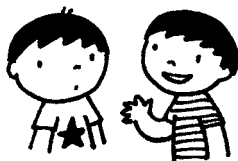
まとめ

第一テサロニケで、パウロは、テサロニケ教会の信徒たちに、信者の模範という最大級の賛辞を送っている。パウロの宣教によって誕生したこの教会は、同胞から激しい迫害に遭うが、それに屈することなく、キリストに倣う者として、御言葉

を宣べ伝え、堅く信仰に立っていた。彼らの特長は、パウロたちに倣う者、キリストに倣う者であることであった。彼らは、神の御言葉を喜びをもって受け入れ、それに従う者であった。順境にあって神の御言葉に従うことは容易であるかもしれないが、同胞からの激しい迫害という逆境の中にあっても彼らは揺るがずに神の御言葉に従って生きていた。生まれつきの人間は、逆境の中にあつて神の御言葉を喜んで守る力など持っていないが、聖霊が働いて下さる時、私たちの心は変えられ、キリストの再臨を待ち望みつつ、忍耐と喜びを以って神の御言葉に従い続けることができるようになる。ただし、それは人間の力では出来ないことゆえ、私たちがいつも聖霊の導きを求めつつ、毎日の小さな事柄において主に従う訓練を積み重ねて初めて可能となることである。私たちもテサロニケ教会の信徒たちのようにそうした歩みを日々積み重ねる者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちに尊い戒めを与えてくださって、ありがとうございます。私たちは、自分自身の力では到底そうした戒めを喜んで守ることなどできません。ただ聖霊が力を与えて私たちの心を変えてくださる時にのみ、それは可能になるのです。どうか聖霊がいつも私たちの心を支配してください、御言葉を正しく理解し、喜んでそれを守る力を与えてくださいますようお願いいたします。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



1. 廃止するためではなく、完成するため

主イエスの地上の歩みに、繰り返し向けられた非難。それは、キリストが旧約聖書の律法を無視し、それを廃棄しようとしている、という誤解に基づく批判でした。代表的なものは、安息日の生活でしょう。当時の律法学者やファリサイ派の人々とは全く違って、自由で解放された安息日をキリストは生きておられました。安息日律法の破壊者と映ったのもやむを得なかったのです。そのような批判に対して、キリストはここで、実ははっきりと反駁しておられます。廃止するどころか、完成するために、わたしは来た。

律法や預言者。これは旧約聖書の全体を指しています。旧約聖書は、その基礎になる部分に、十戒を中心とした律法があり、その律法への種々の応答として、イスラエルの歴史があり、預言者の言葉があり、また知恵の言葉、賛美の言葉がありました。そうした意味で、旧約聖書の全体は「律法」に帰着すると言って間違いないのです。

キリストはここで、律法の廃棄者でなく、律法の擁護者として語っておられます。この事実を、とくに日本人キリスト者は、真剣に、重く、受け止める必要があるのではないのでしょうか。ともすれば私たちは、イエス・キリストの到来が、律法すなわち旧約聖書を、不要なもの、過去に属するものとして既に廃棄したという理解に傾く傾向が強いからです。福音の時代は、律法を不要とする。こうした浅薄な旧約聖書の軽視が、私たちの福音理解そのものに致命的な欠損を生じさせていることがないとは言えません。

「律法学者やファリサイ派の人々の義」。それは、旧約の律法を人間の努力で成し遂げ、神の前に自分の義を証明するために、渾身の力を注いだ人々が主張した義です。神の義ではなく人間の義を押し立ててゆく「律法主義」です。しかし、パウロが明言したように、「律法の実行によっては、だれ一人として義とされない」のです（ガラテヤ2:16）。

主イエスは、地上の生涯のすべてを、父である神の御心に従い、神の律法の全体を「一点一画」もおろそかにしない歩みをささげてくださいました。さらに十字架の苦難と死によって、私たちの一切の罪を贖い、神の前に完全な「義」を獲得してくださいました。キリストの十字架を信じ、キリストに全存在を託する決意をする人は、一人の例外もなくキリストによる義の衣を着せられて、神の前に一人の義人として立つことが許されるのです。

2. ファリサイ派の人々の義にまさる義

主イエス・キリストは、ご自身の地上生涯と十字架の死において、神の律法の全体を完成してください、その「功績」を、信仰により、無代価で、信じる民に分かち与えてくださいます。使徒パウロが「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義」と述べている通りです（ローマ3:22）。律法を行なうことによって、自力で義を勝ち取る一切の労役から、キリスト者はまったく解放されました。キリストにある恵みの自由です。信仰による義を無償で受けたキリスト者にとって、十戒に集約される神の律法は、改めてどのような意味を持つのでしょうか。恵みによって救われたからには、もはやキリスト者は、どのような律法とも無縁な、「無律法者」として生きるべきなのでしょうか。

そうではありません。主イエスは「ファリサイ派の義のまさる義」を生きるよう、キリスト者を招いておられます。ファリサイ派以上に、豊かに、自由に、喜びに満ちて、まことの義の追求に生きる生活を、キリストは指差しておられます。それが、「山上の説教」への道です。恵みによって救われ、神の愛の守りの中に置かれた感謝のゆえに、感謝と頌栄の心をもってキリストに従う献身の道。「山上の説教」が招くキリスト信徒の道です。

（小野静雄）

子どもカテキズム

問64 神さまの戒めを完全に守れる人はいますか。

答 真の人であられるイエスさまのほか、だれもいません。

私たちは、毎日、思いと言葉と行いとによって破っています。

私たちは、完全に神さまに背いている罪人なのです。

参考教理問答 ウ小教理82-87、ハイデルベルグ3-5, 8, 18, 62-64, 86-91, 114, 115

〈だれもない〉

「正しい者はいない。一人もない」（ローマ3:10）。イエス様以外の「ただの人」（ウ小教理問82）にとって、墮落以来、神の御前で義とされるような律法遵守は不可能、それが聖書の示す真理です。戒律主義は、嚴重に戒めの柵を張り巡らすことで、少しでも神の御旨に沿う「行い」の実現を願う、人間としての精一杯の生の模索の表れです。自らの中にある同様の傾向を省みることもなく、そのような真剣さをただあざ笑うことは、すべきではないと私は考えます。しかし、「行い」のみならず、「言葉」さえ、隠された「思い」までも問題とされるイエスの次元においては（山上の説教を参照）、上記のような切ないまでの模索の一切が無意味です。すべての人が「罪人」であるとは、それほどに嚴肅な事実です。たとえばあのマザー・テレサであっても、心のうちに抱えるどす黒さを、神は見通しておられるのです。

〈律法の完成者イエス〉

しかし、今日の説教テキストにあるように、イエス様は、「だから律法・十戒など無意味で必要ない」とはおっしゃいません。救いに入れられた者たちが「真剣な決意をもって」、大小を問わない「神の戒めのすべてに従って」、この地上において「現に生き始める」ことを、イエス様は望んでおられます（ハイデルベルグ問114）。「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送る」（フィ

リビ1:27）ための道しるべとして、十戒は必要です。キリストの福音は、私たちがそのような「新しい服従」へと駆り立てずにはいません（ウ小教理問87、ハイデルベルグ問64）。聖霊は、「ただの人」に普通ではない力を与え、自由な服従を支え導いてくださいます。

〈古い人の死滅と、新しい人の復活

（ハイデルベルグ問88）

完全聖化は、信者の死の時までありません。それゆえ「新しい服従」を目指す者たちは、地上の歩みにおいて数々の挫折を味わうでしょう。肉の誘惑に負け、悪の力に屈し、醜い感情のままに軽率な言動に走ってしまう……、そんな自分に嫌気が差すこともしばしばです。でも信仰者とは、罪に破れるたびに、それを赦してくださるといふ神の赦しの大きさとキリストの愛に、目を開かれていく者です。そうしていよいよ聖霊によりたのむことへと目覚めさせられ、「神の御旨に従ったあらゆる善い行いに心を打ち込んで生きる」（ハイデルベルグ問90）熱心と呼び覚まされながら、救いの完成に向けて、一步一步進んでいく、それが新しい命に生かされている信仰者です。神の御前で、自らの罪の深さに躓きうなだれている者に、聖霊はそのような「命に至る悔い改め」を必ず与えてくださるのです（ウ小教理問87、ハイデルベルグ問88）。（坂井孝宏）

テキスト マタイによる福音書 5章17～20節

カテキズム 子どもカテキズム 問64

〔単元のねらい〕

この単元では、キリストは旧約聖書を成就するお方としてこの世に来てくださった救い主であることの意味を知り、このキリストを信じることによってファリサイ派の人々の義に勝る、信仰による義を与えられることを伝え、さらに信仰による義を与えられ救われた人は、喜んでキリストに従う者となることを子どもたちに伝えたいと思います。私たちは行いによってではなくイエス様を信じる信仰によって救われますが、イエス様を信じるということとイエス様に従うということは、別々のことではなく一つのことなのだということを伝えたいと思っています。

「イエス様を信じて、イエス様に従おう！」

今日のこの箇所を読んで、「とっても厳しいことが教えられているなあ」と思った人は少なくないのではないのでしょうか。「ちゃんと律法を守らないと、天国に行けませんよ！」と言われているようにも見えます。でも、本当にそうなのでしょう。もしそうなら、私たちの信仰生活は、とても苦しいものになってしまいます。

まず17節を見て見ましょう。ここで「律法と預言者」と言われているのは、旧約聖書全体のことです。そして、その旧約聖書には、罪人を救う神様の救いのご計画が記されています。神様によって神様に似た者として特別に造っていただいたにもかかわらず、神様に逆らって歩み始めた人間を、神様はそれでも愛してくださって、救い主によって救うためのご計画を立ててくださったのです。「救い主が来ますよ」という約束と、そのことを信じる神様の民の生き方が、旧約聖書には書かれているのです。

そして、イエス様は、その旧約聖書に書かれている約束をなしとげるために、ついに来てくださった救い主です。けれども、「救い主のイエス様が来てくださったなら、もう旧約聖書なんて要らないや」ということにはなりません。イエス様は旧約聖書を要らないものにするためではなく、完成するために来てくださいました。イエス様を知ることによって、むしろ私たちは、旧約聖

書に書かれてあることがよりはっきりと分かるのです。私たちはイエス様という光に照らされて、旧約聖書を読みます。

ですから、十戒で教えられていることを行うことも、とても大切なことなのです。「はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消え去るまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」とイエス様はおっしゃいました。また、「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」ともおっしゃいました。

では私たちは、十戒をちゃんと全部守らなければ天国に行けないのでしょうか。そうではありません。そもそも十戒は、「これを守らないと救われませんよ！」というものではないのです。エジプトの奴隷になっていたイスラエルの人々を神様はモーセを通して救い出してくださいました。そして、その後、「あなたたちはわたしの民として、このように生きなさい」と十戒を与えてくださったのです。十戒は、神様の恵みによって救われた人達が、神様に喜ばれる神様の子どもとして歩めるように、道を外れて迷子にならないように、神様が与えてくださった、道しるべのようなものなのです。

けれども、イエス様の時代の律法学者やファリ

サイ派の人々は、律法をさらに細かい戒めに分けて、細かい規則を作って、それをちゃんと守っている自分たちこそ神様に喜ばれる者たちだと自信を持っていました。自分たちの力で神様に認めていただける、正しい者になれると考えていたのです。けれども、十戒を本当に神様の求めておられるとおり全部守れる人なんていないのです。それができるお方、それはイエス様ただお一人なのです。

イエス様は、旧約聖書が約束していた救い主として、神様の独り子なのに本当の人間になってこの世に来てくださいました。そして、私たちが守ることのできない十戒を全部神様のお心の通りに守り通されました。そして、神様のお心の通りに従って、私たちの罪の罰を、私たちの代わりに十字架の上で全部受けてくださって、私たちの身代わりとなって死んでくださいました。そして、死の力に打ち勝たれて、私たちのために、私たちが後に続くことができるようによみがえってくださいました。

「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」とは、「律法学者やファリサイ派の人たちよりももっと細かく、律法の戒めを全部守らないと天国に行けませんよ!」ということではありません。私たちに代わって律法を全部守ってくださって、私たちのために死んでよみがえってくださったイエス様を信じる人に与えられる「信仰による義」をいただきましょう、ということなのです。イエス様が私たちの身代わりとなって全部律法を守ってくださ

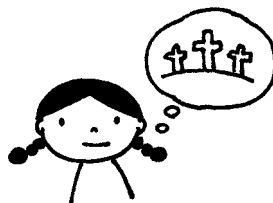
って、私たちの罪のために死んでよみがえってくださったから、イエス様を信じる人はイエス様のおかげで全部律法を守った人として認めていただいて、罪の無い正しい人と認めていただいて、天国に行くことができるのです。私たちはこのイエス様が与えてくださった恵みを心から喜び、感謝したいと思います。

安心しましたか? でもね、「律法を全部守らないと救われませんよ!」ということではないのですが、「イエス様を信じるだけで天国に行けるから、行いなんてどうでもいいや」と考えることもまた、間違いなのです。この私のためにイエス様が命を捨ててくださった。それほどまでにイエス様は、この私のことを愛してくださっている。このことを本当に知った人は、心からイエス様に感謝して、イエス様を愛して、愛するイエス様に喜ばれるものになりたいと願うようになるはずです。そして、イエス様に従おうと努力するようになるはずです。イエス様を信じるということと、イエス様に従うということは別々のことではなくて、一つのことなのです。十戒は、そのようにイエス様を信じた私たちが喜んでイエス様に従っていくための道しるべなのです。もちろんイエス様を信じてすべての罪を赦されても、私たちに罪がありますから、十戒をちゃんと全部守ることはやっぱりできません。でも、どうせ無理だとあきらめるのではなく、自分の力で得点稼ぎをしようとするのではなく、イエス様の十字架の恵みによって赦されながら、毎日、新しい気持ちでイエス様に従っていきましょう。(吉田 実)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章17節

わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ

てはならない。
廃止するためではなく、完成するためである。



〈ねらい〉

私たちは、自分の行いによって救われるのではなく、イエス様を信じる心によって救われることを知る。

〈お話〉

みんなの中に、罪を一つも持っていない人はいますか？ 私たちは、みんな罪を持っています。みんなのように小さな子どもも、先生たちのように大きな大人の人も、みんな罪を持っています。だからイエス様は、そんな私たちみんなのために、私たちの代わりに十字架で死んでくださいました。

神様は、私たちがいろんな悪から守られるための道しるべとして、十戒をくださいました。でも残念ながら、私たちは誰も十戒をすべてきっちり守ることができません。私たちみんなに、罪があるからです。たった一人だけ、すべての律法を守ることのできる人がいました。罪が一つもなかった、イエス様です。イエス様だけは、神様がくださった十戒をすべて守ることができました。

では、十戒を守ることのできない私たちのこと

を、神様はどうされるでしょうか？ 十戒を守ることができない私たちのことを、もうダメだ！と言って見捨ててしまわれるでしょうか？ いいえ。イエス様を信じてイエス様に従う人は、イエス様と同じように、罪がなく、律法をすべて守った人として、神様に認めていただけます。イエス様が私たちの代わりにすべての律法を守り、私たちの罪のために代わりに死んでよみがえってくださったからです。

私たちは、自分の力で十戒を守ることはできません。でも、イエス様を信じて従っていくのならば、イエス様と同じように神様の子どもとしていただけるのです。

〈お祈り〉

神様、私たちは自分の力だけで十戒を守ることができません。私たちが、私たちの罪のために代わりに死んでよみがえってくださったイエス様を信じて、従っていくことができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**夏休みの思い出絵日記****■用意するもの**

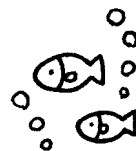
- ・画用紙
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・折り紙

■作り方

画用紙に夏休みの思い出の絵を描く。

好みに応じて、文章を書き足したり、折り紙を貼って立体的にしたりしても良い。

最後に、楽しい思い出をくださった神様に感謝のお祈りをして終える。



〈ねらい〉

十戒の全部を完全に守りとおしてくださったキリストによって、十戒を守ることでできない私たちが正しいものとされている恵みを教える。

〈展開例〉

1. 考えよう

①十戒はきびしすぎるので、完全に守れなくても、少し守れればそれでよい。

(はい・いいえ)

②私たちは十戒を完全に守ることが、

(できる・できない)

③どうして私たちは十戒を完全に守ることができないのかな？

④十戒を完全に守ることができない私たちが神様に正しいものと認めていただく方法が一つだけあります。それは十戒を完全に守ることができた方を信じることによってです。その方とは誰ですか。

⑤十戒を守ろうとしても、なかなか守ることができないとき、どうしたらいいと思いますか。

() できるはずがないとあきらめる。

() イエス様によりたのむ。

() もっともっと自分の力でがんばる。

3. イエス様のように

私たちが十戒を完全に守ることができないのは、心が罪で汚れているからです。(真っ白い布を油性の黒いマジックでぬっておく)これは、私たちの心です。この汚れを落としてみましょう。(水や石けんで洗ってみる)少しは汚れが落ちますが、元のような白さに戻すことはできません。

私たちの心は、この布のようです。今までしてきた悪いこと、嘘をついたこと、お友だちにいじわるしたこと、その一つひとつが汚れとなって残っています。なかったことにしようと思って隠そうとしたり、良いことをしたとしても、しみついた汚れは取れません。

でも、私たちがイエス様を信じる時、イエス様の心のようなきれいな真っ白い心を着せていただけなのです。(真っ白な布を上からかぶせる)

イエス様によって、神様は、十戒を完全に守ることができた人、今まで一度も悪いことをしたことの無い人のように、私たちを見てくださいます。イエス様が、私たちの代わりに十戒を完全に守ってくださいましたからです。

この素晴らしいイエス様を見つめながら、感謝をもって信仰の道を歩いていきましょう。

4. 「じのないほんのうた」の工作

『ふくいんこどもさんびか』61番の「じのないほんのうた」の工作を作って、くるくる回しながら歌おう。(p.91参照)

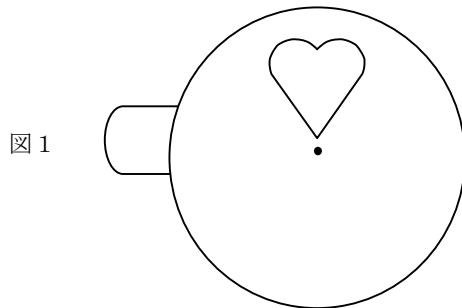


「じのないほんのうた」の工作

〈材料〉画用紙か色紙（黒・赤・金）、緑と白の画用紙、カッター、ハサミ、のり、めうち、わりピン

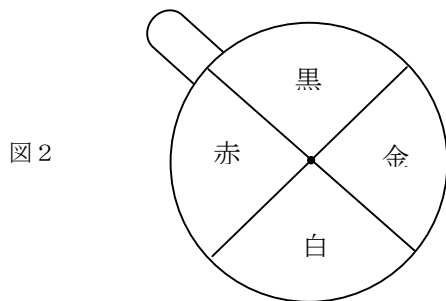
〈作り方〉

- ① 緑の画用紙を図1のように切り、カッターでハート型の穴をあける。



- ② 白い画用紙を図2の形に切る（図1より少し小さめの円にする）。
（ここまです教師がやっておく）

- ③ 黒・赤・金の画用紙（色紙）を貼る。（白の部分は貼らなくてよい）



- ④ 図1と図2のまん中に穴をあけ、図1を図2の上に重ねてわりピンでとめる。
⑤ 図1の飛び出ている部分を左手で持ち、右手で図2の飛び出ている部分を持ち、くるくる回しながら、『ふくいんこどもさんびか』61番の「じのないほんのうた」を歌う。

（黒） つみによごれ くらいこころも
（赤） しゅイエスさまの ちであらえば
（白） しろいゆきのように きれいになり
（金） かがやくてんの くへゆける

〈ねらい〉

律法を完全に守れる人は一人もいないのに、なぜ律法を学ばなければならないかを教える

〈展開例〉**○完璧な人間はどこにもいません**

先週みんなで考えたことは、聖書に記されている神さまの教え（とくにモーセの十戒）は、わたしたちがそれを勉強しましたというだけで終わりにしてよいものではなく、教えられたことをきちんと守ることが大切ですよということでした。

「無理。こんなこと私は守れっこない」とか言ってあきらめないでください。わたしたちの神さまは、あなたが聖書の教えを100%完璧に守れないことを厳しく責めるような冷たい怖い方ではありません。ですから、「自分は神さまの前で完璧な生き方ができていない」ということを苦にする必要はありません。

また（ちょっとややこしいことを言いますが）「完璧に守れないことが初めから分かっているようなことは最初から守らない」と聞き直ることも間違っています。

学校の成績が良い人たちのなかに「100点を取れば0点と同じだ」と言い出す人が時々いますが、これはおそろしい考え方です。もし皆さんの学校の先生が生徒に向かってそんなことを言い出したら、その学校には行きたくないですよ。いつも100点をとれる人たちには楽しいかもしれませんが、そうでない人たちにとっては毎日地獄の苦しみです。また100点の人たちも、今回は全問正解だったかもしれませんが、今回は一つ間違えるかもしれません。一つ間違えることが0点と同じなら、100点の人たちも、明日は地獄の苦しみです。

どうか皆さんは「わたしは完璧（100点人間）ではないからダメ人間（0点人間）である」という誤った考え方を持って自分を責めるようなことはしないでください。これは真面目な人生を送りたいと願う人たちが陥る危険な落とし穴です。完璧な人間はどこにもいません（わたしたちの救い

主イエス・キリストは完璧な人間でしたが完璧な神さまでもあられましたので例外です）。人類の歴史上いまだかつて存在したことがありません。「わたしは完璧です」とか「あの人は完璧です」とか言い出す人が実際にいるので困りますが、そのこと自体が罪（うそをつくこと）なのですから、そういうことを大きな声で言い張る人たちに惑わされてはなりません。

○大切なのは「次第次第に」成長することです

今お話ししたことはキリスト教だけの話ではありませんが、これと同じことが、わたしたちが聖書の教えを守って生きていかなければならないという話の場合にも当てはまります。

モーセの十戒のような、だれもそれを完璧に守ることができない教えなのに、そのようなものをなぜ神さまは人間に（教会の説教を通して）お命じになるのかという誰でも当然感じる疑問の答えが、ハイデルベルク信仰問答の中に記されています（問115の答え）。

長いので全部を引用することはできませんが、注目していただきたいのは、二回繰り返されている「次第次第に」（吉田隆先生の訳）という言葉です。「次第次第に」とは「だんだん」です。わたしたちは、今は完璧ではないし、これからも決して完璧になることはできません。「完璧であること」は神さまがわたしたち人間に求めておられることではないからです。

しかしその一方で、わたしたちはそれぞれの人生の中で、毎日の努力や苦勞を通して「次第次第に」神さまの御心に適う生き方を貫く人間へと成長していくことができます。そのことが大事なのです。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちはたびたびあやまちや罪を犯す不完全な者ですが、あなたの御心に適う者へと日々成長させてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

イエスが完全に律法を守って私たちのために完璧な義を獲得してくださったことを理解する。
私たちが律法を守る、あるべき態度について学ぶ。

〈展開例〉

質問1 イエスは何のために来られたと言っておられるか。

質問2 天の国で大いなる者と呼ばれるのは、何を
をする者か。

質問3 律法学者やファリサイ派の義とは、どんな義か。

質問4 イエスの弟子たちの義は、どんな義か。
それはどういう点で律法学者たちの義にまさっているか。

質問5 イエスは、罪人であり律法を守る力のない私たちになぜ律法学者たちにまさる義を求められるのか。

まとめ

イエスは、地上生涯の間、安息日の遵守、病人の癒し、罪人たちとの交わりなど様々な点で律法学者、ファリサイ派から非難を受け続けられた。一見、自由に律法から離れて生きておられるように思われたイエスであるが、それは、律法をお与えになった父なる神の御心を完璧に理解して、それに全く従順に従われた結果であった。イエスは、ここではっきりと律法が廃止されることはない、

むしろ、それを完成するために来られたと言っておられる。新約の恵みの時代にあっても、律法は依然有効であり、それを守り、人にもそのように教える者が天の国では大いなる者と呼ばれるとも語られた。では、律法学者やファリサイ派に代表される旧約の義と新約のイエスの弟子たちの義とはどう違うのであろうか。旧約の義は、行いによる義、人間自らの力で救いを獲得するための義、罰と滅びの影に付きまどわれる義、そしてそれだけでは決して救いを獲得できない不完全な義であった。それに対し、新約の義は、心の底からのきよめに満ちた義、神から着せられる義、すでに赦された者たちの喜びにつつまれた義、キリストの贖いによる完璧な義である。新約の救いの恵みに与っている者たちは、キリストの優れた義をいただいて、喜びと自由に満ちて自発的に心から神の律法に従うべきであり、また聖霊はそうできるように私たちを変えてくださる。イエスは、律法を完全に守って完璧な義を獲得してくださった。その完璧な義に与る私たちがイエスに倣って地上生涯を歩むのは当然のことなのである。

〈祈り〉

神様、私たちのためにイエス様をくださって、ありがとうございます。イエス様は、地上生涯の間、あなたに完全に従って、私たちのために完全な義を獲得していただきました。私たちが無償でその義をあなたから着せていただけることを感謝します。その感謝と喜びに満ちて、私たちが心からあなたの戒めに従って歩めるよう力をお与えください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



1. 神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして

主イエス・キリストによって、罪と死の中から贖われたキリスト者には、キリストとその御霊による新たな生活が始まります。信仰による救いは、具体的な日常生活の中に、生き生きと適用されなければなりません。信仰生活は、「体」を用いて生きる極めて現実性を帯びた歩みだからです。

キリスト者の生活は、体を用いてなされる「日常生活」と「礼拝生活」です。体に属し、体を用い、体を通して神と隣人に出会う生活です。言い換えれば、信仰がそのまま生活となるような、徹底した献身の生活を、神は私たちに求めておられます。もとより、信仰と生活の分離やズレに悩まないキリスト者はいません。聖化の恵みは、地上で「体」に属しつつ生きる限り、たえず途上にある恵みです。すでに開始された恵みの生活は、同時に、いまだ完成に至らないゆえの苦難と行き詰まりを抱える生活でもあります。

そこで、自分の体を神に献げる生活は、常に祈りと戦いを包み込んでいます。「この世に倣ってはなりません」という切なる警告をたえず受けているのです。この世は、信仰に生きるキリスト者に襲いかかり、世と調子を合わせキリストから離れるよう日々誘惑するからです。

そこで「自分を変えていただく」ことが不可欠の課題となります。キリストに属する私たちは、もはや「自分」という砦を死守する古い生活から解かれました。自己追及、自己実現という縄目から解かれ、キリストを主とする新たな人生の意味と目当てが生まれました。キリストの主権が、日常生活と礼拝生活の隔々に及ぶよう、聖霊の恵みに自分を明け渡せばよいのです。

2. キリストに結ばれて一つの体を形作り

キリストにある新たな生活は、個人としての献身と共に、共同の献身という側面をもっています。共同の献身、つまり教会を形作り教会に生きる生活です。贖いを受け、聖霊に導かれるキリスト者

は、例外なく「キリストの体」である教会に結ばれます。イエス・キリストは復活して天に上げられましたが、地上に、ご自身の体として教会を形成しておられます。教会は、復活昇天されたキリストの恵みを映す器であり、キリストの現実を指差し担う共同体です。すべてのキリスト者は、この共同体の成員として、復活されたキリストの体の「部分」とされています。

キリストという体の部分として生きる私たちは、豊かな多様性と同時に、他の共同体には見られない一致へと招かれています。多様性と一致という、この共同体の本質を確かなものにするには、この共同体独自の「生の習慣」を身につけることが必要です。その一つが、「自分を過大に評価しない」ことです。自分を正しく評価することは、とても難しいことです。過大評価は、優越感と他者への裁きとなり、過小評価は劣等感となって、健やかな奉仕の芽を摘み取ることになるでしょう。この迷路に迷い込まないためには、「互いに愛し、尊敬をもって」(10) 歩む以外に確かな道はありません。

キリストという一つの体の「部分」として歩むことは、地上の信仰生活を確かであり多岐のものにする唯一の道です。教会という集いによって、励ましと慰めを受け、何よりも御言葉と礼典の祝福に与ります。神の栄光を現し、永遠に神を喜ぶ人生の、もっとも確かな基礎、崩れない囲い。それがキリストの教会です。

もちろん、共同体の形成には、体の他の部分を思いやり労わる、すぐれた感覚が求められます。礼拝と教育、伝道と相互の牧会など、キリストの体は種々の奉仕と献身によって支えられているからです。この共同体に生きるには、「各自は互いに部分なのです」という相互性を、深く学ぶことが大切です。一つの体を生き抜く霊的な修練を積みましょう。互いの賜物と奉仕への愛と尊敬を育て合うのが、教会に生きる心です。(小野静雄)

子どもカテキズム

問65 神さまの戒めを守ることができない罪人が、

どうして十戒を喜んで生きることができるのですか。

答 聖霊なる神さまが、私たちを造り変えて主イエス・キリストと一つに結び合わせ、

キリストの体なる教会として建て上げてくださいます。

私たちには、教会において、罪から救い出され、十戒を喜んで生きる道が与えられています。

参考教理問答 ウ小教理85、ハイデルベルグ54

かつて宗教改革者カルヴァンは、「聖化」や「敬虔」という事柄を、決して共同体から切り離された個人において考えることなく、それをキリストの体としての教会と、その教会の肢体をかたちづくる者としての個々人という枠組みで考え、それをジュネーヴ市全体としての「共同体的聖化」という形で具現化すべく改革に取り組んだ。

この問65が指し示す十戒の戒めに従って歩む信仰者の歩みとは、個人プレーの如き孤独なそして独力による歩みではなく、正しくカルヴァンが目指したような、主の民がチームプレーを為すことによって、具体的にはかしらなるキリストに結び合わされた肢体として、その姿を具体的な地上における教会というかたちで現してゆく歩みである。

この問答が問うている、十戒が罪人にとっての喜びの道となるような文脈は、その罪人が教会にこそあるキリストによる罪の赦しの福音の只中現場を持っていない限り、決して成立しない。問

65の答えが語っているように、罪人は教会においてこそキリストによって新しく生きる者に根本から造り変えられ、神の掟に背く者から、それに積極的に従い行く者へと変えられて、また神様との交わりを失った罪人は、しかしこの教会においてこそ、キリストの体を織りなす大切な一部分に組み入れられることでキリストと結合し、キリストから教会に注がれ、教会を建て上げる聖霊を受け取るのである。

教会において罪から解放され、神の御意志に従って生きることこそ自分が真の生き方であると知るに至った者にとっては、十戒はもはや自らを責め立て、罪を突きつけ、喜びよりも自らの悲惨を認識させ、悲痛に追い込むものではなくなる。十戒は神様の御意志に従って歩むことの、その喜びと祝福に満ちた歩みへの道を、非常に明確かつ的確、簡潔に私たちに示してくれる故に、教会に結ばれた者にとっては、十戒は他にはない喜びの使信となるのである。 (吉岡契典)



9月6日

「教会に生きる（一）」

説教展開例

テキスト ローマの信徒への手紙 12章1～8節
カテキズム 子どもカテキズム 問65

〔単元のねらい〕

この単元では、クリスチアンの生活の基本は、自分なりの仕方でも神様に自分自身をささげる献身であり、そのことを通して聖なる神様によって新しく造り変えていただくときに、日々の生活の中で神様のみ心がどこにあるのかを判断することができるようになるということ。そして、何よりも、そのような者として教会の中で互いにキリストの体の一部として仕えあって生きることがクリスチャンには求められているということを伝えたいと願います。小さな私にも、キリストの体の一部としての果たすべき役割があることをぜひ覚えて欲しいと願っています。

「イエス様の体的一部分として」

今日の箇所には、「イエス様を信じた人たちがどういうふう生きるべきか」ということが教えられています。イエス様を信じている私たちは、どういうふう毎日を過ごせばよいのでしょうか。

最初に教えられていることは、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」ということです。これはどういう意味でしょうか。「体を献げなさい」ということは、心も体もひっくるめた自分自身の全部を神様に献げなさいということ。イエス様の十字架によってわたしの罪は全部赦されたということを知ってイエス様を信じた人は、イエス様に心から感謝して、イエス様に喜ばれる人になりたいと思うようになります。自分中心に自分の好きなように生きるのではなく、イエス様のために、イエス様の素晴らしさを表したいと願うようになります。そのように生きることが、自分の体を神様に献げることなのです。そのようにして自分の全部を感謝して献げることが神様を礼拝することなのです。

それは、自分の力でできることではありません。「神の憐れみによって」と書かれています。聖なる神様が私たちの心をそのように造り変えてくださるのです。そして、そのようにして新しく造りかえられた人は、毎日の生活の中で何が善いことか、何が神様に喜ばれることなのかが分かるよ

うになってくるのです。私たちは毎日の生活の中で、「どうしようかなあ、どちらを選ぼうかなあ」と迷うことがありますね。そういう時は、心の中で祈って見ましょう。「イエス様、私を正しく導いてください」。そしてどちらがイエス様に喜ばれることだろうかと考えて見ましょう。きっとイエス様は善い方にあなただけを導いてくださいます。

そして、そのようにして自分を神様にささげて生きる人は、何よりもまず教会の中でそれぞれの仕方でも仕えあいなさい、ということが教えられています。イエス様を信じた人たちは、イエス様にしっかりとつながった人たちです。でも、それはばらばらに一人ひとりがイエス様につながっているわけではありません。ちょうど体には頭が一つあって、手や足や目や口など色々な部分がつながっているように、私たちはイエス様を頭としてお互いにつながっている体のようなものなのです。みんなが学校に行って勉強するということも、足がさぼって歩かないと学校に行けません。手がノートに大切なことを書こうとしても、耳や目がサボったら書くこともできませんね。同じように私たちは神様からそれぞれ違った役割が与えられています。私たちはそれぞれがその役割を果たしながら、誰かのお世話をしたり、反対に誰かにお世話をさせていただいたりして、イエス様を中心に一緒に生きていくのです。人は一人ぼっちでは生

きていくことはできません。イエス様を中心に、お互いがお互いのために仕えあうときに、教会は、イエス様の体として、イエス様に喜ばれることのために働くことができるようになるのです。

そのために、小さな私たち一人ひとりも、とっても大切な役目が与えられているのです。「自分を過大評価してはなりません」というのは、「私は何もできません」と言って遠慮しなさいということではありません。お互いが体の一部分のようにお互いを必要としているということ忘れて、「僕は別に人に助けってもらわなくても大丈夫だもんね。自分で何でもできるさ」と思うようなことが「過大評価」なのです。

教会の牧師先生が小さな赤ちゃんの微笑みにとっても励まされることもあります。障がいを持った方のお世話をすることで、逆にお世話をしている人のほうが沢山の恵みをいただくということもあります。どんなに大きく強く見える人も、誰かの助けが必要ですし、どんなに小さく弱く見える人も、誰かを助けることができます。イエス様が一人ひとりにちゃんと役割を与えてくださっているからです。

「神が各自に分け与えてくださった信仰の度合

いに応じて慎み深く評価すべきです」という言葉は、言い換えれば「信仰というはかりで計って、自分の役割を本気で一生懸命考えなさい」ということです。自分というはかりで自分を計ったら、「僕はだめだ」と思ってしまうかもしれません。でも、イエス様を信じる信仰というはかりで自分を計るなら、違う自分が見えてきます。自分の大切さが分かってきます。そして僕にも、私にも、イエス様が与えてくださった大切な役割があるということを感じて、教会の中でその役割がどこにあるのか、真剣に考えることが大切なのです。

「誰かがやってくれる」ではなくて、「僕の役割は何だろう」「私には何ができるだろう」と真剣に考えて見ましょう。「イエス様に喜ばれることのために、今僕にできること私にできることは何だろう」といつも考えて、そのことのために一生懸命努力できる人になりたいですね。それが自分自身を神様に献げることなのです。そして教会は、そのようにしてイエス様を中心にお互いに仕えあいながら一緒に生きていくことを学ぶところ。その喜びを実際に味わうことができるころなのです。 (吉田 実)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 12章1節 (後半)

自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。

これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。



〈ねらい〉

私たちはイエス様を頭とする教会の一員であり、一人ひとりが体の大切な一部であることを知る。

〈お話〉

みんなは、サッカーや野球の試合を見たことがありますか？ サッカーや野球ではたくさんの選手が一緒に戦っていますが、みんなが好き勝手にプレーしているわけではありません。監督やキャプテンがチームのリーダーとなって、ちゃんと選手に指示を出しているのです。チームのリーダーは、選手みんなのことをよく知っています。この人はこれが得意だな、あの人はあれが上手になってきたな、というように、選手一人ひとりのことをよく見てよく知っているのです。みんなに指示を出すことができます。そうやってリーダーを中心にみんなで協力していくと、良いチーム、強いチームになっていくことができます。

教会にもリーダーがいます。誰だと思えますか？ イエス様です。私たちの救い主となってくださったイエス様が、私たちの教会のリーダーです。イエス様も、私たちのことをとてもよく知っていらっやいます。

聖書には、教会は人の体のようです、と書いて

あります。リーダーのイエス様が頭で、私たち一人ひとりが体の一部になっているのです。○○ちゃんは右耳、○○くんは左手……というように、みんなが集まって一つの体になっています。目・耳・鼻・口・手・足など、体の部分はそれぞれが違う形、違う役割をしていますが、その一つひとつがとても大切です。私たちも、一人ひとりが違う人間ですが、みんなが大切な一人です。誰も、他の人の代わりにはなれません。

サッカーや野球のチームが、みんなで力を合わせることで大きな力を出すことができるように、体の部分がみんなで協力すると、体全部でめいいっぱい動くことができます。私たちの教会も同じです。私たち一人ひとりが力を合わせることで、神様のためにもっともっと良い働きをしていくことができます。

〈お祈り〉

神様、私たち一人ひとりのことをよく知っていてくださって、ありがとうございます。私たちがイエス様を信じて、イエス様につながっていることができるように、そして、リーダーのイエス様についていくことができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**教会パズル****■用意するもの**

- ・厚紙
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・はさみ

■作り方

厚紙に教会の建物の形を描き、切り抜く。窓やドアを描いても良い。

切り抜いた教会の形をさらに10～15ピースに切り分ける。直線・曲線を織り交ぜて、色んな形のピースにする。

一つひとつのピースの裏面に、教会に来ている人たちの名前を書き出す。子ども本人にとって身近な人の名前から書いていくと良い（イエス様の名前も忘れずに！）。

バラバラにして、パズルとして遊ぶ。

〈ねらい〉

教会の一人ひとはキリストの体の一部であることを、体の働きをとおして学ぶ。

〈展開例〉**1. どこがおかしい？**

孝くんは、レストランへ行きました。さっそく注文した料理が運ばれてきました。

孝くんのお鼻がくくん。「おいしそうないい匂い！」すると、孝くんのお腹がグーっとなりました。「お腹がすいたよ」と言っています。孝くんの目はお料理がとってもきれいなので見とれています。「なんてステキなかがりつけ！」お祈りをしてから、手でフォークを持ち、お料理を口にもっていきました。

でもそのとき、孝くんの口が言いました。「ぼく、めんどくさいから、料理をかむのがいやなんだ」孝くんは、結局、おいしそうなお料理を食べることができませんでした。

さて、このお話は、どこがおかしいでしょう。そうですね、私たちの体は、それぞれの働きが違っていても、いつも協力し合っています。口が「今日は疲れたからかむのはいやだ」などとは言いません。手も足も鼻も目も口もそれぞれがバラバラではなく、一つの体として助け合っています。

2. 教会はキリストの体

聖書には、教会はイエス様の体ですと書いてあります。教会にはいろいろな人がいます。牧師先生や教会学校の先生、オルガンをひく人、受付をする人、お食事を作る人、お掃除をする人など、教会にはいろいろな働きをする人がいます。働きは違っていても、みんな神様から力をいただいてイエス様のために働くのです。

自分の持っている力や得意なことは、自分を喜ばせるために与えられているものではありません。神様が教会というイエス様の体を形づくるために与えてくださったものです。

教会はキリストの体なので、私たち一人ひとは、イエス様の手や足として、みんなと力を合わせて働きます。

小さな子どもたちも、イエス様の体の一部です。それぞれがイエス様のために何ができるか、考えてみましょう。

たとえば……

- ・教会学校の礼拝で献金のお祈りをする
- ・献金の袋をまわす係
- ・食事の配膳のお手伝い
- ・掃除の手伝い
- ・おもちゃの整理整頓
- ・赤ちゃんと遊ぶ

3. 「合わせ絵」をして遊ぼう！

三人一組になって、体を完成させよう。

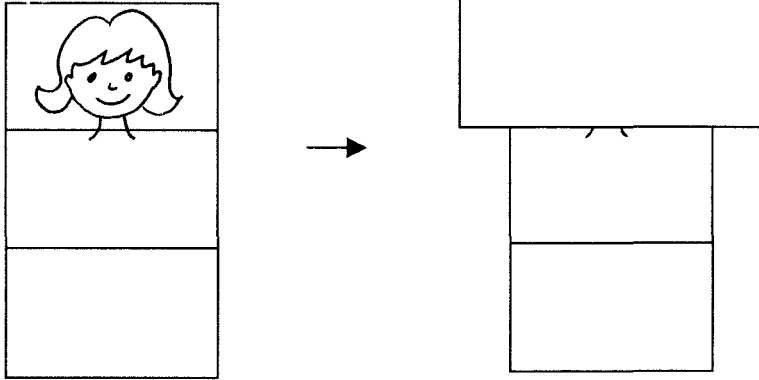
(p. 103参照)



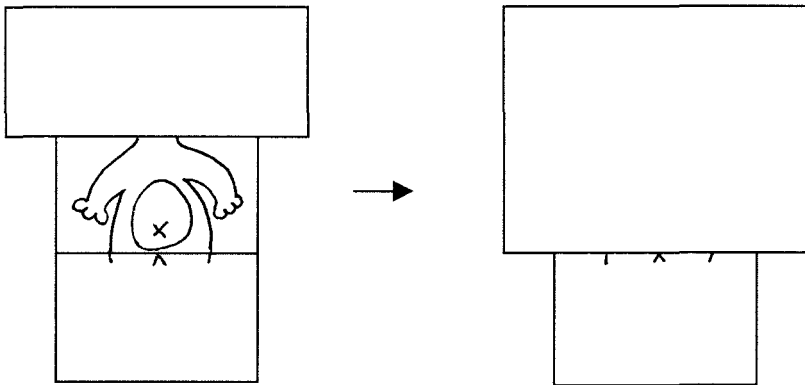
「合わせ絵」の遊び方

3人ずつのグループに分かれる。

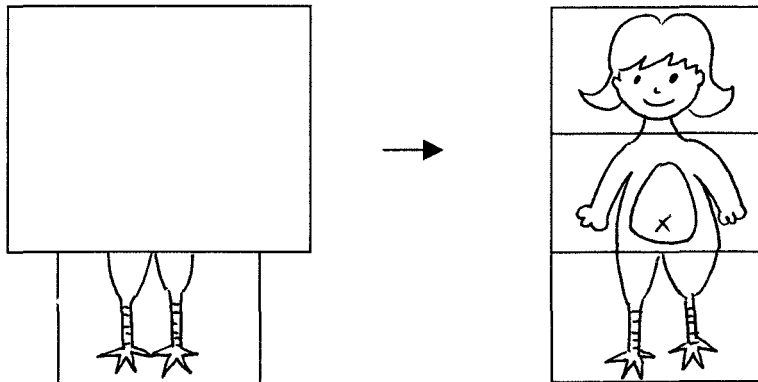
- ①紙に三つに分ける線をひく。
- ②最初の人みんなに隠れて顔を描き、別の紙で隠す（次の部分が描きやすいようにつなぎ目の線を出して描く）



③次の人が隠れて胴体を描き、また紙で隠す



④次の人が隠れて足を描き、できたら紙を広げてみんなで見ると見る。



(体の部分ではなく、眉と目、鼻、口の部分を描いて遊ぶこともできます)

〈ねらい〉

聖霊の恵みに信頼することを学ぶ

〈展開例〉**○神様の栄光をあらわすために**

主イエス・キリストは、私たちを罪と死の中から贖いだしてくださり、ご自身の聖霊を与えてくださいました。聖霊の恵みと働きによって、私たちの言葉や行いをとおして、神様の栄光をあらわしてくださるのです。

それは、毎週の主の日の礼拝をとおしてだけでなく、学校や家庭での日々の生活をとおして、生活の全てのことをとおして働いてくださる聖霊の働きです。

そのことは、心や言葉だけのことではなく、「体」をとおしても、生活の隅々まで、人生のすべての日々にも働いてくださるのです。

○聖霊の恵みに信頼する

私たちは、神様の栄光をあらわそうと、自分の知恵や力で頑張るのではありません。すでに私たちのうちに生きて働いてくださっている聖霊の恵みに謙虚に信頼することが大切なのです。

聖霊の恵みこそ、教会に生きる私たちの力の源です。聖霊の恵みと働きなしに、礼拝や奉仕を生き生きと献げることができません。

聖霊の恵みと働きがあるので、教会の活動も、学びや伝道も、力強く進めていくことができるのです。

教会に生きる私たちは、このすばらしい聖霊の恵みに謙虚に信頼して、生活のすべてのことにおいて、神様の御心に従っていくことができます。

教会の働きや奉仕は、自分の力や頑張りでおこなうものではなく、私たちのうちに生きて働いてくださっている聖霊の恵みに助けられておこなうのです。

また、自分の知恵や経験よりも、私たちのうちに生きて働いてくださっている聖霊の恵みに導かれておこなうのです。

ですから、自分には他の人のような力がないとか、経験がないということで、悲しんだり悩んだりしなくても良いのです。まだ一度も人を乗せた人のないロバの子でさえ、主イエス・キリストは、エルサレム入城という大切なできごとのために用いてくださいました。

み言葉と聖霊をとおして働かれる主イエス・キリストは、私たち一人一人を用いて、ご自身の教会を建てあげてくださるのです。

○十戒を喜んで生きる道

神様の御心は、聖書において、特に十戒において、はっきりとあらわされました。聖霊の恵みに信頼することによって、この十戒を喜びつつ生きることができるのです。

聖霊は、私たちの心の板に十戒を記してください、何が神様を愛することであるか、どれが人を愛することであるかを、み言葉と共に示してくださるからです。

聖霊の恵みに信頼することによって、私たちの心も体も、十戒を喜んで生きるようにされるのです。

このことは、もともと神様に創られたときから人間に意図されていた、人間本来の生き方、もっとも人間として輝く、人間らしい生き方をはじめられるのです。

十戒を喜んで生きることは、人が人として、いちばん自然で、人として生き生きと生きることなのです。

聖霊の恵みに謙虚に信頼して、教会につながり、礼拝の生活を送ること、神様の御心を喜んで生きることこそ、神様の栄光をあらわす生き方なのです。

〈お祈り〉

神さま、どうかわたしたちがこれからも教会に生きることができるよう、そして十戒を喜んで生きるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

キリストにある新しい歩みとは、自分自身のために生きるのではなく、神の御心を求めて生きる歩みであるということを理解する。

教会は体に例えられているが、その類似点を理解し、教会の中で他の兄弟姉妹と共に主に仕える上での心構えを理解する。

〈展開例〉

質問1 自分の体を聖なる生けるいけにえとして献げるとはどういう意味か。

質問2 この世に倣うとはどういう意味か。神の御心をわきまえるとはどういう意味か。

質問3 自分を過大に評価するとはどういう意味か。信仰の度合いに応じて慎み深く評価するとはどういう意味か。

質問4 パウロは、教会を体に例えているが、教会の信徒と体の各部分の働きの似ている点はどのようなところか。

質問5 あなたは、神からどんな賜物を与えられているか。それをどのように教会で活かしているか。

まとめ

パウロは、ここでキリストにおける新しい生活の指針をローマの信徒たちに与えている。それは、ひとり孤独な歩みではなく、キリストの体なる教会に連なって神に仕える生活である。救われた者は、もはや自分自身のために生きることなく、その人生は神のために生きるものへと変えられる。この世と歩調を合わせて、この世の人々や自分自

身を喜ばせるものを求める生活から神が喜ばれるものを求める生活へと変わるのである。ただし、地上生活は、罪との戦いの中にある生活であり、ひとりでそれに立ち向かいつつ歩むのは至難の業である。神は、そのために、共に歩み共に支え合う信仰の共同体を私たちのために備えられた。それが教会である。教会において、信徒一人ひとり、体の部分のように互いに助け合い支え合う。もし、特定の部分だけが突出し他の部分を無視するようなことがあれば、体は機能しなくなる。互いに相手を認め合い、尊敬し合い、愛し合うことなくして、キリストの体なる教会は機能しないのだ。そこでは、自分自身と他者の過大・過小な評価は体の機能を損なうことにつながる。それぞれ賜物は違えど、各人の賜物は全て神からいただいたものであり、それらは教会で神のために働くために与えられたものである。各人が、自分の賜物も他者の賜物もありのままに評価し、認め合い、互いに互いを必要としていることを確認しながら互いに感謝して奉仕する時、キリストの体なる教会は、成長していくのである。

〈祈り〉

神様、私たちに教会を与えてくださってありがとうございます。私たちは、それぞれ違った賜物をあなたから与えられています。それは教会で兄弟姉妹と共にあなたに仕えるために与えられたものです。私たちは、ともすれば高ぶって一人で何でもできると錯覚したり、他の兄弟姉妹の働きを軽んじたりする愚かな者ですが、互いに謙遜になって、認め合い、尊敬し合いながら、共にあなたに仕えて、共に成長していくことができますようどうかお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

テキスト マタイによる福音書 28章16～20節

(1) 「山に登った」

山上の説教で、イエスは「山に登られた」(5:1)のでした。その山上の説教を皮切りに、イエスは五つの大きな説教をしています。そしてその五つの大説教の結びはいつも同じ言葉で統一されています。まず、7章28節「イエスがこれらの言葉を語り終えられると」、そして11章1節「イエスは指図を与え終わると」、3回目が13章53節「イエスはこれらのたとえを語り終えると」、4回目が19章1節「イエスはこれらの言葉を語り終えると」、最後の5回目が26章1節「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると」です。このことが強く暗示するように、マタイ福音書はイエスの教えを新しいモーセ五書・モーセ律法として捉えています。モーセがシナイ山に登ったように、イエスは「山に登って」新しい律法を授与するのです。

さらに、マタイ福音書は、復活を伝えるさいにもモーセのイメージをだぶらせています。「三日目の朝」を描くエジプト記19章16節以下は、「三日目の朝になると、雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。しかし、モーセが民を神に合わせるために宿営から連れ出したので、彼らは山のふもとに立った。シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた」と語ります。マタイ福音書は、この「激しい地震」と「稲妻」と「民の震え」に重ねるようにして、「三日目の朝」の出来事を次のように語ります。「すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり……」(28:2以下)。マタイによれば、復活は新しい律法授与なのです。モーセ律法はイスラエルに「命と幸い」(申命記30:15)を与えるためのものでした。今のわたしたちにとっては

復活を信じることこそが「命と幸い」にはかなりません。この復活の主イエスが、最後にもう一度「山に登って」、わたしたちの「命と幸い」のために、新しいモーセとして命じてくださっているお言葉が今日の御言葉です。

(2) 「天と地の一切の権能」

「権能」と訳されている言葉は「権威」と訳されている言葉と同じ言葉です。イザヤ書9章5節に「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある」と言われていた、救い主の「権威」です。マタイ福音書は7章29節で「権威ある者としてお教えになった」と書いた後、一貫して「罪を赦す権威」(9:6)、「これほどの権威」(9:8)、「何の権威でこのようなことをしているのか」(21:23, 24, 27)と、この「権威」を強調し続けています。旧約の時代に「一切の権威」はモーセ律法にあったように、新約の時代には「一切の権威」は復活の主イエス・キリストにあります。

(3) 「世の終わりまで」

「世の終わりまで」は、5章18節で「天地が消え失せるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」と言われたときの「天地が消え失せるまで」と呼応しています。そこで「それを守り、そうするように教える」(5:19)ことが命じられていたように、福音書末尾でも「命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と、同じことが言われます。モーセが「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない」(申命記18:15)と予告していたとおり、わたしたちが「聞き従わねばならない」言葉です。イエス・キリストの言葉を人々に「教える」使命がわたしたちに委ねられたのです。(赤石純也)

子どもカテキズム

問66 罪から救い出されるために、神さまが私たちに求めておられることは何ですか。

答 イエスさまが勝ち取ってくださった祝福を与えていただくために、
教会に与えられた恵みの手段を用いて、
イエスさまを信じ、いのちに至る悔い改めをすることです。

参考教理問答 ウ小教理85, 86、ハイデルベルグ65

まず目が留められるべきは、問66が「神様が私たちに求めておられることは何ですか」と問うていることである。ここに、神様がこの私たち人間について求め願っておられることが示される。これまでの問答において、人間は十戒の前に全くの罪人であり、人間自らがその力によって救いを勝ち取ることでできる余地はないということが確認されてきた。よって私たちの救いについての望みの一切は、私たちそのものの中からは発生せず、ただ神様からのみ期待され、上からの力によってのみ、私たちについての希望は切り開かれるものである。そこで神様は、問66の答えに見られるように、人間に主イエスが勝ち取られた救いを与え、教会を恵みに生かし、人間に主イエスへの信仰を与え、悔い改めへと導き、即ち命の救いに至らしめることを、御自分の方から私たちに対して求めてくださっている。私たち罪人たる人間を、しかし命へと救うこと、これこそが問66によって明示されている神様の御心なのである。

人をその命の救いへと至らせるために、まず主イエス・キリストによって打ち立てられた贖いの御業を、そして神様は次に、キリストの救いを私たちに当てはめるために、教会に与えてくださった恵みの手段を用いてくださる。人は如何にすれば命に至る信仰を与えられることができるのか、その問いへの答えが、まさにここに語られている。信仰が何であるのかは、教会にそれを尋ねれば、その内容、その賜物の在りかが解るのである。命に至る信仰を私たちに与えるという、神様の求めを実現すべく、そこでは教会が用いられ、教会に与えられた恵みの手段が用いられるのである。教会には恵みの手段としての御言葉の説教と礼典が与えられている。そして命に至る信仰は、教会において語られ、礼典を通して示される主イエス・キリストの救いについての御言葉を聞くことで、アーメンと言ってそれを受け入れる時に生まれるのである。 (吉岡契典)



テキスト マタイによる福音書 28章16～20節
カテキズム 子どもカテキズム 問66

〔単元のねらい〕

この単元では、この地上に真の人間としてこれ、人間の苦しみも悲しみも全て味わわれた後に、父のみ心に従って十字架に死なれ、三日目によみがえられ、天に昇られ、天と地の一切の権能を授けられた主イエス・キリストが私たちと共にいてくださることを伝え、そして主御自身が勝ち取られた祝福を豊かに注いでくださることを信じて、勇気を持ってイエス様に従い、子どもたちなりの仕方ではイエス様を証していく毎日の生活へと励まし送り出したいと思えます。またイエス様を知るといことは肉の目で見るのではなくて、御言葉に聴き従う生活へと踏み出していくときに、いよいよ豊かにされるのだということを伝えたいと願っています。

「いつも共にいてくださるイエス様」

よみがえられたイエス様は、イエス様が十字架につけられる様子を最後まで見届けていた女性たちに、真っ先に現れてくださいました。そして、「ガリラヤに行くように。そこでわたしに会うことになる」とお弟子さんたちに言いなさいとおっしゃいました。それで、お弟子さんたちは、イエス様のお言葉どおりにガリラヤに行ったのです。本当なら、「イエス様は死んでしまった」とがっかりして、とぼとぼと帰る場所であった彼らの故郷ガリラヤに、イエス様が先回りしてお弟子さんたちを迎えてくださったのです。お弟子さんたちはよみがえられたイエス様と、ガリラヤの山の上でお会いすることができました。それは、どれほど嬉しかったことでしょう。

でも、今日の箇所には意外なことが書かれています。それは、「しかし、疑う者もいた」という言葉です。この言葉は、「しかし、彼らは疑った」とも読める言葉です。よみがえられたイエス様を目の前に見ながら、それでもお弟子さんたちの心の中には疑う心があったのです。不思議ですね。このことは、イエス様を知るといことは、この肉の目で見たり、びっくりするような奇跡を見たりすることじゃないということを教えてください。では、イエス様を知るためにはどうすればよいのでしょうか。

よみがえられたイエス様は、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」とおっしゃいました。神様が全ての権利や力をお持ちであるということは当たり前のことですね。でもイエス様はそれらを「授かっている」とおっしゃいました。それは、一時そういう権利や力を失っておられたということです。イエス様は神様の独り子、つまり神様でいらっしゃったのに、その神様としての力も素晴らしさも捨てて、本当の人間となってこの世に来てくださいました。そして、私たちの苦しみや悲しみも全部味わわれて、そして、最後には私たちの罪の責任を全部背負われて、私たちの身代わりとなって十字架の上で死んでくださいました。そして、私たちが後に続くことができるように、死の力に打ち勝って、よみがえってくださいました。そんなイエス様が、この世界の本当の王様として、この世界を守り導いていてくださるのです。このことを知るだけで私たちは勇気が出てきますね。

そして、そのようなイエス様がお弟子さんたちに命令をなさいました。それは、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」という命令でした。イエス様が本当

の救い主だということを世界中に伝えて、イエス様を信じる人たちを起こし、教えなさいということです。

この命令を聞いたお弟子さんたちは、一瞬頭がくらくらして目が回るような思いがしたかもしれませんが。お弟子さんたちはガリラヤの漁師とか、徴税人とか、ごく普通の人たちだったからです。そんなお弟子さんたちが世界中の人たちをイエス様の弟子にするということは、めまいがするような大きな話です。でも、イエス様は彼らにできないような無理な重荷を背負わされたのではありません。続いてイエス様はこう言われたからです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。この「いつも」とは「全ての日」という意味です。一日もイエス様が一緒にいてくださらない日はないということです。イエス様を信じて、イエス様に従って歩む私たちと、イエス様はいつも、全ての日に、一緒にいてくださいます。そして小さな私たちを通してイエス様は働いてくださるのです。

やがてお弟子さんたちは分かりました。イエス様の霊に満たされて、イエス様のお言葉に従って、イエス様を信じて歩み始めたときに、この肉の目

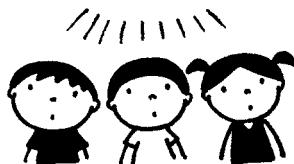
で見る以上の確かさで、イエス様が一緒にいてくださって、守り導いてくださって、自分たちの働きを通してイエス様を信じる人たちを起こしてくださるということ。ローマ帝国という強い外国に征服されて、どこを見ても小さな弱い自分たちには希望が見えないような中で、じつはイエス様が本当の王様なのだということ。

イエス様を知るといことは、この肉の目で見ることではありません。びっくりするような奇跡を体験することでもありません。イエス様の御言葉を信じて従っていくときに、「ああ、イエス様は本当に私と一緒にいてくださって、私を守ってくださるんだ。そして小さな私でも、イエス様のご用のために用いてくださるんだ」と分かるのです。どんなにつらいときも、どんなに苦しく悲しい日でも、イエス様が一緒にいてくださらない日は一日もありません。私たちはそのことを信じて、勇気を出して、今日もイエス様に従って行きたいと思います。そんな私たちをイエス様は豊かに祝福してくださって、すべての人にイエス様のことをお伝えするという、とっても大切な素晴らしいご用のために、私たちを用いてくださるのです。

(吉田 実)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章20節 (後半)

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。



〈ねらい〉

イエス様が、私たちを伝道の働きに召していること、また、そのためにいつも一緒にいて助けてくださることを知る。

〈お話〉

みんなには、幼稚園や保育園で決められた係や役割がありますか？ お花に水をあげたり、動物にえさをあげたりしている人はいるでしょうか？ みんなが交代で先生たちのお手伝いしたりすることも、あるかも知れませんね。

では、みんなが神様からいただいている役割は何だと思えますか？ よみがえられたイエス様は、天に戻られる前に、私たちに大切な役割をくださいました。それは、イエス様のことをたくさんの人に伝える役割です。私たちのお友だちを、日曜学校や教会に来るように誘う役割です。

私たちは自分たちの力だけでは、神様との約束を守ったり、神様がくださった役割を果たしたりすることができません。でも神様は、いつも私たちと一緒にいて、私たちを助けてくださると約束

してくださいました。

私たちと同じ人間になってくださったイエス様は、私たちの気持ちをとてもよく分かってくださいます。そして、神様の子どもであるイエス様には、できないことは何もありません。私たちがイエス様のことをお友だちに話す時は、イエス様が私たちのそばにいて助けてくださることを思い出しましょう。

神様は、神様のためにがんばる私たちのことを、必ず助けてくださいます。罪でいっぱい私たちの心を変えてくださったのは、神様でした。同じように、神様は私たちのお友だちの心も変えてくださるのです。

〈お祈り〉

神様、イエス様のことをたくさんの人たちに伝えるという大切な役割を、私たちにくださってありがとうございます。私たちは自分たちだけではできませんが、イエス様がいつも一緒にいて助けてくださるから、大丈夫です。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**おじいちゃん・おばあちゃんへのお手紙カード****■用意するもの**

- ・B5あるいはA4の色画用紙
- ・クレヨン・色鉛筆など
- ・リボン・シール・折り紙など

■作り方

画用紙を半分に折り、カードにする。

カードの内側に、おじいちゃん・おばあちゃん宛の手紙を書く。日曜学校や自分のことなどについて、子どもたちの言葉で書けると良い。

教会で敬老の日に関連した集会を予定していれば、案内やお誘いの言葉も書き添える。

絵やリボン・シール・折り紙などを使って、カードを飾る。日曜学校での様子が写っている写真などを添えても良い。

おじいちゃん・おばあちゃんに手渡し、あるいは、郵送する。

〈ねらい〉

この世界の中で最も力がある方が、世の終わりで共にいてくださることを伝えたい。

〈展開例〉**1. 共におられるという約束**

よみがえられたイエス様が天に昇られるとき、素晴らしい約束をしてくださいました。それはどんな約束でしたか。

「わたしは世の終わりで、
_____」

2. イエス様は本当に共にいてくださるの？

しょうたくんはお父さんに聞きました。

「イエス様は目には見えないんだよね。なのにどうして僕たちといっしょにいてくださるってわかるの？」

すると、お父さんは答えました。「しょうた、電気は目にみえないよね。でも、電気製品のスイッチを入れるとどうなるかな。部屋に灯りがつき、テレビが映り、電子レンジはごはんを温めてくれる。目には見えないけれど、電気が確かにそこに流れていることがわかるだろう。

イエス様の働きがその人にあらわれるとき、信じる人と共にいてくださることがわかるんだよ。」

3. イエス様が共におられることは、どのようにしてわかりますか？

- ① イエス様のことを考えると喜びがあふれてくる。
- ② 自分の中に罪があることがわかる。
- ③ 聖書のみことばが本当だと信じることができる。
- ④ 困ったときに、お祈りするように導かれる
- ⑤ 聖書のみことばによって力づけられる。
- ⑥ 天国（神様のいらっしゃるところ）へ行く希望

が与えられる。

⑦ 罪から離れる力が与えられる。

⑧ 正しいことができる力が与えられる。

4. あしあとの詩

ある夜、わたしは夢を見た。わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。一つはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとだった。これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。そこには一つのあしあとしかなかった。わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。このことがいつもわたしの心を乱していたのでわたしはその悩みについて主にお尋ねした。「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、わたしと語り合ってくださいと約束されました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません。」主は、ささやかれた。「わたしは大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。あしあとが一つだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた。」

マーガレット・F・パワーズ作 松代恵美訳

太平洋放送協会発行『あしあと』より

5. 「主イエスとともに」のイス取りゲーム

『ふくいんこどもさんびか』90番「主イエスとともに」の歌を歌いながらイスの周りを歩き、教師が笛をふいたら、みんな一斉にイスに座る。（イスは人数分より一つ少なくしておく）座れなかった人はぬける。

〈ねらい〉

いつも共にいてくださるイエス様を覚える

〈展開例〉

○主イエス・キリストと結ばれる

教会に生きることは、主イエス・キリストにつながり続けることです。自分の力で離れないように、何とか頑張って、しがみつくものではありません。

そうではなくて、主イエス・キリストのほうから、私たちを招いてくださって、ご自身と結びつけてくださるのです。

ヨハネによる福音書15章1節から5節で、イエスさまは、このように言われました。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

どんなに細く、短く、枯れそうな枝であっても、幹である主イエス・キリストに接ぎ木されるなら、幹からの力によって、豊かに葉を繁らせ、実を結ぶようにしていただけるのです。

大切なことは、主イエス・キリストに繋がっていることなのです。

教会に生きるとは、教会の頭なる主イエス・キリストに結ばれて、キリストによって生かされることなのです。

○教会に与えられた恵みの手段

キリストに結ばれていることは、どのようにして確認することができるのでしょうか。自分の信仰の確信でしょうか。それとも、信仰的な体験でしょうか。そうではなく、それは、洗礼によって確かなものとして保証されています。

洗礼を受けるとき、その感覚をとおして、私たちは、自分が主イエス・キリストに結ばれていること、永遠の愛で愛されていることを実感することが出来るのです。

洗礼は、一回限りのものですが、聖餐によって、何度も何度も、いつもイエス様が共にいてくださること、罪が完全に赦され、永遠の命が与えられ、神の子とされていることを実感することができるのです。

さらに、教会に生きる私たちには、恵みの手段として、み言葉が与えられています。聖霊は、み言葉と共に働かれます。折々になかった、み言葉を思い起こさせてくださり、時には慰め、時には戒め、時には励ましてくださるのです。

そして、祈りもまた、教会に生きる私たちに与えられた恵みの手段です。神様に祈ることによって、自分の心を神様に分かっていたただけでなく、自分の心を変えられて、神様の御心に従っていくことができるようにされるのです。

いつも共にいてくださるイエス様は、み言葉と祈りと礼典をとおして、豊かに聖霊の恵みを注いでくださいます。

○キリストの体としての教会

私たちがキリストに結ばれるとき、私たちは様々な違いを越えて、一つにされていきます。男性も女性も、どの国の人も、どの世代の人も、キリストの体の一部です。こうして、時代と言葉を超える神の家族の一員とされるのです。

〈お祈り〉

神さま、どうか私たちがこれからも教会に生きるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

イエスの大宣教命令の内容について学ぶ。
全ての権威を持つイエスの臨在と助けによって伝道する力をいただいて私たちは伝道するのだということを学ぶ。

〈展開例〉

質問1 イエスが天と地の権能を一切授かっているとはどういうことを意味しているか。

質問2 イエスは、弟子たちに何をどのように命じられたか。

質問3 全ての民をイエスの弟子にするとはどういう意味だろうか。

質問4 イエスは昇天されて、今は肉体を取って私たちと一緒ににはおられないのに、なぜ世の終わりまでいつも共にいると言われるのだろうか。

質問5 あなたは、イエスのこの宣教命令に従って、周りの人々に伝道しているか。できていないとしたら、それはなぜか。どうしたら、できるようになるのだろうか。

まとめ

復活されたイエスは、ここで旧約を代表する人物であるモーセのように山に登り、弟子たちに新しい宣教命令を与えられる。それは、全ての民をイエスの弟子にするようにとの命令であった。具

体的には、彼らに洗礼を授け、イエスが弟子たちに守るよう命じておいた事柄を守るように教えよということであった。イエスは、全ての民が神の福音を信じて、イエスの足跡に倣って歩むことを望まれた。弟子たちにとって、それは簡単な命令ではなかったが、イエスが地上の全ての権威を持っておられること、そしてそのイエスが聖霊の臨在という形でいつまでも彼らと共にいてくださること、この約束によって彼らは奮い立ち、全世界にキリストの福音を伝える者となった。全世界の権威を持つお方が私たちといつも共にいてくださるということは、何物も私たちを負かすことはできないということの意味する。私たちは、必ず勝利する。周りの人々に対する伝道は難しいかもしれない。しかし、イエスが共にいてくださるなら、必ず伝道する力が与えられ、人々は救われていく。私たちも目に見える状況に意気消沈することなく、イエスに目を注いで、弟子たちのように大胆に伝道する者とならせていただきたい。

〈祈り〉

神様、聖霊様のご臨在をありがとうございます。私たちは、いつも一人ではなく、全ての権威を持ったイエス様と一緒にいます。たとえ目に見える状況は、不可能のように思えても、イエス様が共にいてくださるならば、必ず、人々の心は開かれ、福音を受け入れるようになっていきます。どうか私たちが目に見える状況に失望することなく、イエス様の臨在と助けに信頼して、周りの人々に大胆に福音を伝える者とならせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



(1) 背景と語釈

サマリア教においてはモーセ五書だけが正典ですから、ダビデが「神なる主の神殿はここにこそあるべきだ」と言って、エルサレムに神殿建築の場所を選んだことを記す、歴代誌上22章1節は問題になりません。そこで、「あなたが入って得ようとしている土地に、あなたの神、主が導き入れられるとき、ゲリジム山に祝福を[……]置きなさい」(申命記11:29)、あるいは「あなたたちがヨルダン川を渡ったならば、民を祝福するために、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ヨセフ、ベニヤミンはゲリジム山に立ち」なさい(申命記27:12)というモーセ五書内の個所に即して、ゲリジム山で礼拝をしました。サマリアの女が「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しました」(4:20)と言っているのはゲリジム山のことです。それに対して主イエスは「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」(21)と言い、その時を「まことの礼拝をする者たちが霊と真理をもって父を礼拝する時」(23)と言い、「今がその時である」と言われたのでした。

「生きた水」(10)とはヘブライ語では「流水」のことです。第二神殿時代には礼拝前の沐浴は「生きた水」でなければならなかったことが、真の礼拝の始まりへと話題が進む土台になっているようです。井戸の水は流れていませんから「生きた水」ではありません。ですから「あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」とあるのは、「その人」は「井戸の水ではなく」生きた水を与えたことであろう、という対比です。それは「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない」という対比を準備するものです。そして「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とあるのも、生きた流水だから井戸水ではなく「泉となり」、永遠の命「へと流

れ込む」水というイメージです。

(2) 御言葉をていねいに聞くこと

このサマリアの女の人生はなかなかうまくいかない人生だったようです。そのはてに、彼女はすさんだような気持ちになっていたかもしれません。しかし、主イエスは狙い澄ましたように、その彼女に話しかけてくださいました。私たちの人生にも、なかなかうまくいかないときがあり、気持ちがすさんでくることもあるでしょう。しかしそのようなときこそ、まず語りかけてくださる主イエスの御言葉に心を込めて耳を傾けることです。そのとき、主イエスは私たちの苦しい状況を完全に射抜くような御言葉をくださるでしょう。そして、私たち自身の心の、主イエスに対する飢え渴きを知らせてくださるでしょう。そのとき、私たちは「わたしにもその水をください」と主イエスに向かって一步を踏み出すようにして、求めることができるようにされます。

「求めよ」と言われても私たちはなかなか自分自身の本当の魂の求めを明らかにすることができません。しかし、礼拝においていつも主イエスの方から語りかけてくださる御声にていねいに耳を傾けると、主の方から私たちの本当の求めを明らかにしてくださり、求めることができるようにしてくださり、そして与えてくださるのです。

そのようにして私たちは、礼拝における主イエスとの魂の会話こそ、尽きることのない命の泉であることを知ります。それが霊と真理をもってする礼拝にほかなりません。イエス・キリストの到来とともに、そのように「礼拝する時」が来ました。そして今や、わたしが礼拝に集うそのたびに、主イエスは「今がその時である」と言ってくださっているのです。いつも礼拝の中で新しく主イエスに出会い、あふれるような霊の水をいただいて、神のみ前に立ち帰りしたいと思います。

(赤石純也)

子どもカテキズム

子どもカテキズム

問67 信仰と悔い改めとは何ですか。

答 聖霊のお働きによって与えられる、救いの恵みです。

イエスさまを救い主として受け入れ、信頼することと、

罪を認め、罪を憎み、神さまに向かって歩むことです。

参考教理問答 ウ小教理86、ハイデルベルグ60

信仰とは何かを問うこの問いに対して、それは「聖霊のお働きによって与えられる、救いの恵み」であると言われている。信仰とは「救いの恵み」なのであって、それは私たちが自力で獲得していく類のものではなく、上から与えられる賜物である。

そして、その信仰の内容とは、聖書が語っている内容を信じ受け入れること、即ち他の何事でもなく、ただイエス・キリストという方を自分の唯一の救い主と信じ受け入れることである。このキリストへの信頼を欠く信仰は、聖書においては想定され得ないものであり、キリスト以外の何者についても、たとえその対象をどれだけ熱心に受け入れようとも、それは聖書的救いとは関係のない、従って救いとは関係のない事柄となってしまう。

また、この問いの答えには「信頼」という言葉が含まれているように、信仰とは、イエス・キリストを自分の唯一の救い主として知るということに留まるものではなく、キリストを信頼し、キリストと人格的に出会い、彼に全面的に依り頼み、

自らを委ねるといふところまでを含んだ、自らの生涯と人格の全体を左右する事柄である。

そして、答えの後半部に記されている「悔い改め」ということもまた、聖霊なる神の導きによる救いの恵みである。そしてこれによって、「罪を認め、罪を憎み、神さまに向かって歩むこと」とあるように、これは「改心」という意味の振り返りではなく、「回心」という言葉によって表現される、これまでの歩みからの訣別であり、神さまに向かっての生き方の全面的方向転換を意味している。そしてこの意味において、悔い改めは信仰が必然的に生み出す神様への方向転換であると共に、その際に神様から与えられる上からの賜物であると言することができる。信仰による悔い改めは、一回的なものではなく継続的な営みである。私たちが地上にある限り、悔い改めの歩みは止むことがなく、そこにある霊的渴望と共なる豊かな満たしが、信仰者の歩みを前に推し進めると同時に支え続けるのである。(吉岡契典)



テキスト ヨハネによる福音書 4章1～30節
カテキズム 子どもカテキズム 問67

〔単元のねらい〕

敬虔主義の伝統にある教会は、悔い改めの「体験」を重んじる。これまで犯して来た罪とその行いを、十字架のイエスさまの前に、ひとつ一つ告白し、悔い改めるように導く。時に、具体的な償いや謝罪をも求める。そのようにして、主イエスの赦しの確信へと導こうとする。そこでの一回限りの体験が生涯にわたって重んじられるのである。また、この二つを分けて取り扱おうとするきらいもある。私どもは、この二つを並置して取り扱う。一回限りの体験を決して軽んじはしないが、むしろ、生涯にわたる深化を祈り求めて行く。

契約の子どもたちにとっては、いつどこでそのような体験を持ったのか、不明である場合が多い。彼らにもまた、この厳かな体験が起こることを祈り求めよう。しかし我々は、主の日の礼拝式の体験を中心に、日ごとに確かなものとなることを確信して、彼らに向き合う。そのとき、何よりも問われるのは、教師自身が、この経験を深めているかどうかである。

「水がめを置いたまま」

イエスさまは、その日もまたお弟子さんたちといっしょに、いっしょうけんめい、伝道の旅を続けていました。イエスさまは、とつても疲れておられました。弟子たちは、イエスさまをひとり、井戸のほとりに残して、町に買い出しに出かけました。

そんな真昼間に、ひとりのサマリアの女の人が、水を汲みに来ました。イエスさまは、すぐに、「すみません。その桶で、水を汲んで、私にも飲ませてくたさいませんか。」とお願いされました。女の方は、びっくり。「ユダヤ人のあなたが、サマリア人のわたしに、しかも女のわたしに声をかけるなんて！」すると、イエスさまは、またまた、女の方を驚かせます。「残念ですね。わたしが誰なのか知っていたなら、あなたの方から、わたしに、水をくださいと頼んだでしょうね。そうしたらわたしは喜んで、あなたに生きた水を与えるはずですよ。」サマリアの女性は、ますます怪しい目つきで、イエスさまを見ます。「いきなり、何を偉そうに言うの。水をくださいって言うておきながら、今度は、水をあげるだなんて！おかしなユダヤ人！」そしてこう言い放ちました。「あな

たは、あのヤコブよりも偉いのですか？そんなはずないじゃないですか！」するとどうでしょう。イエスさまは、宣言されます。「この井戸水を飲んだら、また喉が渇くようになります。でも、わたしが与える水を飲むなら、渇きません。そればかりか、その人の中に、泉となって、しかも永遠の命に至る水がわきでるのです。」

ここまで会話を進めて、ついに、この女性は、イエスさまのことを、もしかするとおかしな人ではないのかもしれないと思い始めます。でもまだよく分からないのです。まだ半分、からかい気味に、言います。「こんなところまで汲みに来なくても済むのでしたら、その水をくたさいませんか。」するとどうでしょう。いきなりこう仰います。「あなたの夫を呼んできなさい。」彼女は、正直に答えます。「夫なんかいません。」すると、さらにイエスさまは、仰います。「あなたには五人の夫がいたが、今、一緒に暮らしている男性は、結婚しているのではないからね。」この女性がどのような人なのかを言い当ててしまわれました。

どうとう、この女性は、イエスさまのことを神さまから遣わされた神さまの言葉を語る人だと認

めます。それでもまだ、サマリア人の誇りにこだわります。「ユダヤ人たちは、エルサレムで礼拝すべきだと言っていますが、わたしたちは、目の前にそびえるこの山で礼拝してきましたよ。」そのとき、イエスさまは、ずばり、いちばん大切なことを仰います。「わたしを信じなさい！神さまは、心からの正しい礼拝をささげる人をお求めになっておられます。」彼女も、心が激しくゆさぶられました。「こんな、わたしだって、キリストと呼ばれる救い主が来られることを知っています。そのすばらしいお方が来られた時には、わたしたちにすべての真理を教えてください。」イエスさまは、ここでもう一度、いちばん大切なことを宣言されました。「救い主。それは、あなたと話をしているこのわたしのことなのです！」

イエスさまは、本物の人間ですから、体も疲れ、お水も飲まなければ、動けないときがあります。けれども、イエスさまは、本物の神さまですから、サマリアのこの女性をどうしてもお救いになろうと、ギラギラした太陽よりも、もっと熱くなって、この人を神さまの救いに導こうとされるのです。ですからイエスさまの方から、この女性に声をかけます。「救ってあげましょう」ではなく、「お水をください！」と頼むのです。この女性だって、お水がどれほど大事かは、よく分かっています。だから、知らない人であっても、水を汲んであげようとしたのだと思います。

実は、この女の人は、皆から、悪口を言われていました。「あんなふしだらな女は、嫌だね」でも、自分でも自分をどうすることもできません。皆と、特に、同じ女性に会いたくないので、いちばん暑いお昼にお水を汲みに来るのです。とても孤独です。でも、イエスさまはそんなこの人のことをなにもかご存じだったのです。だから、「このままでは、ダメ。このままでは、神さまの救いから離れて、干からびてしまう。死んでしまう。」そうお考えなのです。体にとってお水なしには、生きら

れません。しかし、人間にとって、お水よりも大切なことがあることを教えてくださいました。

さて、この女性は、イエスさまにお会いしてどうなったのでしょうか。それが今朝、皆さんと一番、考えたいことです。この女性は、今、水を汲みに来たはずなのに、おけを置いて、町に戻って行きました。町には、自分のことを悪く言う人たちがいます。彼らに会いたくないから、一番暑くて大変なとき、たった一人で井戸のほとりに来たのです。ところが、町の人たちに、救い主が来られたと告げに行くのです。今や、彼女は、お水より大事なものを発見したのです。それほどすばらしいものを頂いたからです。

この女性は、イエスさまに出会って、たちまち変わってしまいました。イエスさまを信じたら、これまでの生き方、生きる方向が変化したのです。180度、方向を変えました。生きる方向を変えることを悔い改めると言います。自分を第一に、自分を中心に、自分を優先することしか知らない生き方から、神さまを第一に、神さまを中心に、神さまを優先する生き方に、解き放たれたのです。心の中に、神さまから与えられる命の水が注がれたのです。もう、空しくなくなっているのです。イエスさまで心が満たされたからです。

今、僕たち私たちの目の前にも、聖霊なる神さまがいらっしゃいます。つまりイエスさまがおられます。このイエスさまを信じましょう。必ず、古い自分から新しい自分へと変えられます。イエスさまを信じることで悔い改めることは、一生涯、続き、どんどん、成長します。その為に、イエスさまが今朝、サマリアの女性に教えてくださいましたことを、決して忘れてたくありません。礼拝することです。今、人間にとって、いちばん大切なことを、皆さんと一緒にしているのです。なんと幸せなのでしょうか。神さまに心から感謝します。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 20章21節

神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、
ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。

〈ねらい〉

私たちは、聖霊によってイエス様を信じる心が与えられ、神様に従う者へと変えていただけることを知る。

〈お話〉

みんなの好きなテレビ番組は、何ですか？ みんなは、どんなヒーローが好きですか？ アンパンマンやプリキュアが好きな子、ウルトラマンやシンケンジャーが好きな子もいますね。テレビに出てくるヒーローは、みんな強くて、悪い人をやっつけることができ、とってもカッコいいですね。でも、そんな強くてカッコいいヒーローたちも、最初から強かった人たちばかりではありません。変身をしたり、どこかから特別な力をもらったりして、魔法やすごい技のできる強いヒーローになれるのです。

聖書にも、変身をした人のお話が出てきました。この女の人は、アンパンマンのように悪い人たちをやっつけられるヒーローになったわけではありませんでした。でも、イエス様に会って、イエ

ス様が救い主であることを信じたときに、全く別の人のようになりました。聖霊の神様が、この女の人にイエス様を信じる心をくださり、イエス様に従う人へと変身させてくださったのです。

テレビのヒーローたちが変身をして強くなったように、聖霊の力が私たちのことを強くしてください。私たちはイエス様を信じるから、強いのです。私たちはイエス様に頼るから、強いのです。聖霊の神様は、私たちがイエス様を信じられるように、イエス様に頼ることができるように、そして、イエス様に従うことができるようにしてください。聖霊の神様が、私たちを変身させてくださるのです。

〈お祈り〉

神様、私たちがイエス様を信じて、イエス様に従っていかれるようにしてください。ありがとうございます。聖霊の神様が、私たちを変身させてください。これからもイエス様を信じて、イエス様に頼れるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**イエス様に頼って立ち上がるう****■用意するもの**

なし

■やり方

二人一組で、背中合わせになって床に座る。できるだけ、体格の近い子同士がペアになるようにする。背中をくっつけて、お互いの腕を組む（自分の右腕と相手の左腕、自分の左腕と相手の右腕を組む）。背中合わせに腕を組んだままで、立ち上がれるか試してみる（しかし、腕を組んでいると立ち上がることができず、そのまま自分の足で立ち上がろうとすると腕がほどけてしまう）。

今度は、「自分の足で」立ち上がろうとするのではなく、腕を組んだまま「相手によりかかりながら」立ち上がってみる（お互いに、背中に体重をかけ合いながら、よりかかり合う方が上手く立ち上がることができる）。

最後に、私たちも自分の力で何とかしようとするよりも、イエス様に依り頼んだ方がすべてのことが上手くいくことを伝える。

〈ねらい〉

サマリアの女は、飲んでもまた渴く水ではなく、永遠の命に至る生きた水を求める者へと変えられた。私たちも生ける水を求める者となろう。

〈展開例〉

1. いのちを守るたいせつな水

暑いとき、のどがカラカラになったことがありますか。そんなとき、もし、飲む水がなかったらどうですか。普通、人間は、食べ物がなくとも一カ月は生きていられるそうですが、もし水がなかったら、五、六日しか生きることができないそうです。

イエス様もずっと歩き続けてきたので、のどがカラカラでした。そこへサマリアの女の人が井戸に水をくみにきました。そのころは水道はありませんから、地面に穴を掘って作った井戸から水をくむのです。

2. 二つの水

ここには二つの水が出てきます。一つはのどが渴いたときに飲む水、もう一つはイエス様がくださる水です。次のうちイエス様がくださる水に○をつけましょう。

- () 飲んでしばらくするとまたのどが渴く
 () 一度飲むと、いつまでも渴かない
 () 井戸や水道のじゃぐちから飲む
 () 永遠のいのちへの水
 () 次から次へとわいてくる生きた水

3. イエス様がくださる水を飲むとは？

「いのちの水」を飲むとは、永遠の命を与えて

くださるイエス様を信じることです。

このサマリアの女の人、イエス様と話しているうちに、この「いのちの水」がほしくなりました。この女の人はみんなから嫌われるような悪いことをしていたので、いつも心の中がさびしく、悲しい気持ちでいっぱいでした。でも、そんな自分のしてきたことをイエス様に全部言い当てられて、イエス様こそ、心を満たしてくださる救い主にちがいないと思いました。女の人の心に喜びが泉のようにわきあふれました。

4. イエス様との出会いによって変えられる

この人は、今まで人に会うのが嫌だったのに、うれしくて、もうじっとしていられなくなりました。みずがめをそこにおいて、「イエス様は救い主です」とみんなに知らせに行きました。それを聞いてたくさんの人がイエス様を信じました。

イエス様は私たちにもいのちの水を飲んでほしいと願っておられます。イエス様に自分の罪をわからせていただき、「いのちの水」をくださいとイエス様のところに行きましょう。

イエス様を信じるとき（いのちの水を飲むとき）、この女に与えられたように、いつまでもなくならない、「いのちの水」をいただくことができます。

5. 紙粘土でみずがめを作ろう

紙粘土、空き瓶、タイル（ビーズ）、粘土板、ラップの芯、ヘラを用意。

- ① 粘土を瓶の大きさに合わせ、ラップの芯で8mmの厚さに伸ばす。
- ② 粘土を空き瓶に巻きつけ、余った粘土を瓶の口に飾りつける。（取ってをつけてもよい）
- ③ タイルやビーズを埋め込み、乾燥させる。



〈ねらい〉

罪を認め、神様に向かうことを学ぶ

〈展開例〉

○主イエス・キリストを信じる信仰

私たち人間は、聖霊なる神様の働きがなければ、どの人も、主イエス・キリストを信じるようにはなりません。主イエス・キリストを信じたいという心も、自分の内側から自然におきることではありません。そしてまた、私たちの力で他の人の心に起こさせることもできないものです。それはただ、聖霊なる神様によって、私たちの心のうちに与えられるものなのです。

ですから信仰は、神様からの深い恵みです。神様からの賜物です。(エフェソ2章8節)

このように、まず、神様からの先立った働きがあり、それに応えて人間の応答が生まれるのです。そして信仰は、まず福音を聞くことから始まります。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」(ローマ10章17節)

ですから、主イエス・キリストを正しく理解することが大切です。正しくイエス・キリストを知るためには、「聖書だけ」から、福音を知ることです。

○信仰の二つの面

信仰は、二つの面を持っています。それは、「正しく神様を知ること」と、「正しく神様を信頼すること」です。

聖書による「正しい知識」をもたないまま、ただ信しじるといっても、それはまちがった信仰、つまり、迷信となって、信仰の純粋さを失ってしまいます。

反対に、どんなに「正しく神様についての知識」を持っていても、「神様に信頼すること」がなければ、それは情報だけで、信仰ではありません。

聖霊なる神様は、み言葉と祈りによって、「正

しく神様を知ること」と、「正しく神様を信頼する」信仰の二つの面をバランス良く導いてくださいます。

○命に至る悔い改め

み言葉を聞き、聖霊が心に働かれると、心に罪の自覚が与えられます。聖霊によらなければ神様に対して自分が罪人であることを自覚したり、神様の刑罰を恐れる心は起こらないのです。

讃美歌239番の1節の歌詞は、このように書かれています。

「さまよう人々、たちかえりて、

あめなる御国の 父をみよや。

罪とがくやめる ころこそは、

父より与うる たまものなれ。」

主イエス・キリストを信じる信仰が与えられると、神様の愛と恵みを理解できるようにされます。それによって、それまで気づかなかった自分の罪に気づくようになるのです。

そして、罪は悲しく憎むべきものという自覚が起きてきます。罪を自覚させられたときに大切なことは、その時こそ、自分の罪のために十字架にかかってくださった主イエス・キリストを信じて、受け入れることです。

罪に死に、義に生きる新たな決意をして、新しい心でイエス・キリストを「主」と告白して、主イエス・キリストに従っていきます。これが命に至る悔い改めです。

これからは、み言葉に従い、罪を背にして神様に向かって歩んでいきます。今までの罪の歩みから方向転換をして、神様との新しい交わりに生きる歩みを始めます。罪と戦いキリストに仕える生き方です。

〈お祈り〉

神さま、どうか私たちがこれからも主イエス・キリストを信じ、罪を悔い改めて、教会に生きるようにしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

信仰が聖霊の働きによって与えられる救いの恵みであるということを理解する。
悔い改めとは、どういう事かを理解する。

〈展開例〉

質問1 イエスは、サマリアの女に何を求められたか。サマリアの女はそれに対して何と答えたか。

質問2 イエスは、サマリアの女に御自分が与える生きた水について語られたが、この生きた水とは何を指しているか。

質問3 イエスが言う、霊と真理を持ってするまことの礼拝とは、どういうことを指しているか。

質問4 サマリアの女によると、キリストと呼ばれるメシアはどんな方か。

質問5 他の人々を避けて真昼に水を汲みに来たはずのサマリアの女は、なぜ水がめを置いて町の人々にイエスのことを教えに行ったのか。彼女の心はどのように変化したと思うか。

まとめ

イエスは、ユダヤからガリラヤへ抜けられる途中で、サマリアのシカルの井戸端に腰を下して休まれた。そこへ水を汲みに来たサマリアの女に水を所望される。ユダヤ人とサマリア人は犬猿の仲ゆえ彼女はそれを断るが、イエスは、逆に彼女に御自分が与える生きた水について語られる。生きた水とは、イエスを信じる者に与えられる聖霊の

ことで、この方によって私たちは、神の御言葉について理解し、神と交わりを持つことができる。この方が内在される時、神から離れて渴ききった私たちの心は、泉の水を飲んだ時のように豊かに潤される。その後、礼拝する場所について話題が移るが、イエスは、礼拝する場所はゲリジム山でもエルサレムでもないと言われる。新約時代の私たちは、自分の内に聖霊をいただき、同じ信仰を持つ兄弟姉妹たちと共に教会で礼拝をする。聖霊の力によって導かれ、御言葉を通して教えられるこのような礼拝がまことの礼拝である。サマリアの女は、イエスの言葉に驚いて、約束のメシアはあなたなのかと問う。メシアは一切の事を知らせてくださる方で、この方が来る時イスラエルに救いがもたらされると彼女も知っていた。イエスが御自分がメシアであると言われると、彼女は汲んだ水も放り出して町の人々にメシアの到来を知らせに飛んでいく。自分の悪口を言う人々を避けて真昼に水を汲みに来たはずの彼女が、自ら人々の所に飛んでいく様は、イエスの言葉を信じて彼女の中に生きた水が注がれ、彼女の心が変えられたことを生き生きと表している。私たちもサマリアの女のように生きた水をいただいて変えられ、主の福音を大胆に人々に告げ知らせる者とさせていただきたい。

〈祈り〉

神様、聖霊様を私たちの内に与えてくださって、ありがとうございます。私たちが、いつも聖霊に従って、御言葉を深く悟り、罪を悔い改め、心から神様を礼拝し、サマリアの女のように大胆に人々に福音を告げ知らせる者とならせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。

(1) 大きな流れ

42節の「彼ら」とは、前節の「ペトロの言葉を受け入れた人々」、つまり教会が行った最初の説教を聞いた「天下のあらゆる国から帰ってきた」「大勢の人」のうち、御言葉を受け入れて洗礼を受けた「三千人ほど」の人たちです。イエスを「あなたがたが十字架につけて殺したのだ」(2:23, 2:36)と告げる説教を聞いた人々は「心臓を刺し貫かれ(原文直訳)」、「わたしたちはどうしたらよいか」(2:37)というところに追い詰められました。

このことを、ルカは主イエスご自身のお言葉の実現として描いています。つまり主イエスは、アベルの血からゼカルヤの血に及ぶ罪なき血について「今の時代の者たちがその責任を問われる」ことを二度繰り返して(ルカ11:50, 51)おられました。そして十字架裁判の時、それが罪なき血を流すことになることをピラトが三度繰り返して強調するのです。つまり「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」(ルカ23:4)、「訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった……この男は死刑に当たるようなことは何もしていない」(23:14-15)、そして「三度目に」(23:22)、「この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった」と告げていたのでした。主イエスを十字架に付けるという、罪なき血を流してしまったことの「責任を問う」ための伏線です。それはアベルの血を流してしまったときカインが「わたしの罪は重すぎて負いきれません」(創世記4:13)とっていたように、重すぎて負いきれない罪です。

それほど重い責任を、「今の時代の者たち」に問うと主イエスが言っておられたとおりに、ペトロは説教をしました。「あなたがたが十字架につけて殺したのだ」。このように迫られた人々が「わたしたちはどうしたらよいか」と言ったとき、

人々は皆、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」というカインになったのです。本当にどうしたらよいか。ペトロはそこに高らかに福音を告げ知らせました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」(2:38)。「重すぎて負いきれない」罪に対してその「赦し」が告げられるのです。それはとりもなおさず「邪悪なこの時代からの救い」(2:40)でした。主イエスは邪悪なこの時代に「責任を問う」と言われていたのですが、そこから救い出されたということは、もはや罪の責任を問われないということです。この福音を受け入れることによって「三千人ほど」が罪を赦され、救われたのでした。

(2) 救われた者の教会生活

罪赦され、救われた者の喜びはどのような「熱心」となって現れたのでしょうか。それは「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」の熱心となって現れました。これこそ教会の誕生の出来事です。「使徒の教え」とは御言葉です。「相互に交わりパンを裂くこと」とは聖餐式です。つまり御言葉と聖餐と祈りが、教会を教会にする本質です。この教会の「仲間に加わる」(41)ことは、「洗礼を受ける」(41)ことであり、「洗礼」と「聖餐」は新約の「礼典」ですから、これは「御言葉」と「礼典」と「祈り」という三つにまとめることができます。罪赦され、もはや罪の責任を問われないという、普通では考えられない恵みにあずかった私たちにとって、救いの喜びは教会生活の熱心となって現れます。救われた私たちに、なおも恵みを与え続けてくださる神を、いつも生き生きと感じながら、感謝と喜びの教会生活を送りたいと思います。(赤石純也)

子どもカテキズム

問68 恵みの手段とは何ですか。

答 御言葉と礼典とお祈りです。

父なる神さまは、聖霊のお働きによって、特にこの三つを通して、

私たちに、イエスさまがいっしょにいてくださることを信じさせてくださいます。

こうして、私たちはイエスさまと一緒に結び合わせられ、

キリストの体なる教会として建て上げられます。

参考教理問答 ウ小教理88、ハイデルベルグ65

この問68の答えは、しばしば教会の標識、すなわち教会が教会であるために欠かせないしるしであると言われる。つまりこれらのことを通してこそ教会は教会たり得るのであり、教会とは何かという問いに答えるところの、教会の本質論がここに語られているととることができる。

教会で行なわれることの主たるものは、御言葉の説教と、洗礼・聖餐による礼典の執行と、神を中心に据えた祈りの交わりであり、それらが「恵みの手段」という言葉で総括されている。つまりこの「恵みの手段」という言葉が示している通り、教会の中で行なわれることは、神様が私たちに恵みを注いでくださる手段となっているのであって、私たちが教会に行く理由は、根本的に義務や強制ではなく、神様が私たちに恵みを与えてくださるために、招きの中に入ることであり、恵みの付与にあずかるために、私たちは教会に行き、そして教会はそのことのために建てられているのである。その恵みの手段は、もちろん他にも多くの事柄を考えることが出来るが、主として御言葉と、礼典と、祈りであると言われている。

まず御言葉とは、最も大切で重要な恵みの手段

である。御言葉によって、私たちは神様がどのようなお方であり、何を求めておられるのかを知ることができ、それが解らなければ、信仰の成立する基盤がなく、続く礼典も祈りも考えることさえできない。御言葉を通して語られている恵みと真理をより確かなものとするために、礼典と祈りはあるからである。この御言葉は、聖霊なる神の助けの中で、私たちの魂と命の糧となる。

次に礼典とは洗礼と聖餐のことであり、これはキリストによって制定され、命じられた、恵みと祝福が確かに神様から与えられていることの、目に見える証印である。

そして祈りとは、罪人であり神の御前に近付き得ない者となった私たちに対して、神様が恵みによって与えてくださった、恵みの交わりの場所であり、祈りは私たちにとって不可欠な、恵みによって養われつつ歩むための大切な恵みの手段なのである。聖書には私たちが常に祈るようにと勧められているが、それは祈りを通して神様との交わりを常に保つことなしには、私たちは何一つ為しうる事柄を持たないからである。 (吉岡契典)



テキスト 使徒言行録 2章42～47節
カテキズム 子どもカテキズム 問68

〔単元のねらい〕

私ども罪人は、神の聖なる怒りとのろいを受けるべき存在です。ところが、神の聖なる愛は、御子とのみ業を通し、ご自身の恵みによって、信仰と悔い改めへと導き、お救いくださいます。奇跡のような出来事です。父なる神の御子による救いは、一方的なのです。救われた者は、成長へと駆り立てられます。父なる神は、聖霊を通して、成長させてくださいます。その方法は、奇跡的な仕方ではなく、恵みの外的手段と呼ばれる「御言葉・礼典・お祈り」によって、なしてくださるのです。ここに信仰教育の課題と責任が生じます。子どもたちもまた、この道にのっとって、その信仰を養い、成長させて行くことが、私どもの基本線です。契約の子や地域の子たちを、「主日の礼拝」における御言葉と祈り、そして毎日の「いのちのパン」へと励ましましょう。

「成長させてくださる神さまとその方法」

この日曜日も、愛する皆さんと一緒に、礼拝をささげることができることを、心から嬉しく思います。先週の一週間、この日を目指して、外でお仕事をしたり、家庭のなかで働いたりしてきました。今朝、このように元気に、皆さんと礼拝ができることを、心から神さまに感謝します！

僕たち私たちは、なぜ、今朝、神さまの教会、イエスさまの教会に来ることができたのでしょうか。それは、天のお父さまが、僕たち私たちの名前を、一人ひとりの名前をお呼びくださったからです。「○○ちゃん、あなたはわたしの子どもです。神さまの子どもです。日曜日は、イエスさまの復活されたお祝いの日、神さまを礼拝しに教会にいらっしやい。」このように、神さまにお招きを受けないと、教会には来れなかったはずです。

もしかするとこのように考えるお友だちはいますか。「先生、わたしは今日も、自分の力で来ました。自分で、起きて、自分で支度をして来ました。」とってもすばらしいですよ。日曜学校が大好きなお友だちは、本当にほんとうにうれしいです。神さまも大喜びしておられます。あるいは、こんな風に考えるお友だちおられるかもしれません。「先生、わたしは今日も、お父さんとお母さんに、『早くはやく』と言われて、連れてきて

もらっただけです。ほんとは、もうちょっと、お寝坊したかったんだけどなあ」

確かにそのように思う気持ちはわかります。確かに先生も、神さまからのお招きの声を、この二つの耳で聞いたことがありません。けれども、先生は、聖書を通して、礼拝のお話を通して、「ああ、今朝も、教会に来ることができて、みんなと一緒に礼拝できて、み言葉を学べるのは、神さまの一方的な恵みなんだなあ」と確信しています。心から信じています。

今日の聖書の箇所は、生まれたばかりの教会、ユダヤのエルサレムで生まれたばかりのイエスさまの教会の生活について記されています。

使徒のペトロさんは、聖霊なる神さまに満たされて、このような説教をしました。「皆さん、あなたがたは、イエスさまを十字架につけて殺してしまいました。ところが、神さまは、そのイエスさまを復活させられました。イエスさまは今も生きておられます。イエスさまこそが、ただおひとりの救い主なのです。十字架につけた、私たちの罪を悔い改めなさい。悔い改めるといのは、心を自分に向かわせるのではなく、ただ神さまへと向かうことです。神さまに向き合うことです。

そして、イエスさまを信じるのです。信じれば、イエスさまは、あなたがたのすべての罪を引き受けて十字架で死んでくださったのですから、誰でも罪が赦されます。ですから、皆さん、イエスさまを信じて、洗礼を受けなさい。そうすれば、聖霊なる神さまがあなたの心の内に注がれて、あなたも神さまの子どもにさせていただきます！」

イエスさまを殺した人たちが大勢いるのにもかかわらず、愛と勇気に満たされて、ペトロさんは、力強く訴えました。すると、3000人以上の人たちが洗礼を受けて、教会の仲間に加わったのです。

僕たち私たちの教会の正面には、大きなさくらの木でつくったテーブルがありますね。その左側には、洗礼盤がありますね。最初の教会の仲間たちも、21世紀の僕たち私たちの教会も、誰でもイエスさまを信じて、教会の仲間になるためには、この洗礼盤の中の水を注いでもらって、——つまりそれが洗礼です——初めて教会員になるのです。赤ちゃんのときに洗礼を受けたお友だちもいるわけです。

そしてこの大きな机は、何をするためにあるのか、知らないお友だちもいるでしょう。これは、聖餐桌と言います。そのことは、また、学びます。子どもの礼拝には、この聖餐桌を用いることはありませんが、でも、とっても大切なのです。一日も早く、洗礼を受けて、この聖餐桌の上でなされる神さまの恵みにあずかりなさいと、神さまは、今朝も、僕たち私たちに呼び掛けておられます。

それなら、どうしたら洗礼や、聖餐をうけられるように、神さまに喜ばれるような、僕たち私たちに成れるのでしょうか。それは、イエスさまへの信仰と悔い改めの恵みを受けることです。どうしたら、その恵みを受けることができるのでしょうか。

イエスさまは、そんな僕たち私たちのために先回りをして、教えていてくださいます。それが、今日の、「子どもカテキズム」問68です。「御言

葉と礼典とお祈り」の三つです。

神さまは、僕たち私たちが、自分の力や自分の考え、計画ではなく、一方的に、教会に、日曜学校に来るように導いてくださいました。最初にお話ししたように、まったく神さまのおかげです。神さまのお恵みによるのです。でも、そのことを知った僕たち私たちは、「そうか、神さまが、勝手に恵みを与えてくださっているのだから、僕は、なんにもしなくても大丈夫なのかな」と思いますか？

違います。確かに聖霊なる神さまが一方的に僕たち私たちに聖書のみ言葉とお祈りによってイエスさまのことを教え、信じるように導き、励ましてくださいました。でも、それは、僕たち私たちがもう何もしなくても良いというわけではありません。むしろ、僕たち私たちは、喜んで信仰と悔い改めへと成長したいし、する必要があります。

そのために、イエスさまの方でちゃんと定めてくださった道があります。聖書のみ言葉と、今している先生のお話を聴くことです。そしてその語りかけに言葉をもって答えること、つまりお祈りです。このことを日曜日には教会で、明日からはお家で、続けることです。そうすると、僕たち私たちの信仰は、成長していくのです。

そこに、僕たち私たちの努力する場所が与えられています。ちゃんとしなければ、成長どころか、イエスさまから心が離れていってしまいます。けれども、イエスさまの定めてくださった「信仰を育ててくださる方法」を用いれば、大丈夫です。聖霊なる神さまが、豊かに注がれて、信仰を元気にしてくださいます。イエスさまのことを信じて、頼れるようにしていただけるのです。従えるようにしてくださいます。そのとき、成長しているかどうか、自分で自分のことを心配したり、判断したりする必要はありません。聖書の約束通り、御言葉とお祈りによって、礼拝によってイエスさまを見続けていけば、必ず、神さまが、成長させてくださるからです。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 一 3章7節

ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。

〈ねらい〉

私たちは、御言葉・礼典・お祈りによって成長することを学ぶ。

〈お話〉

みんなは、花や野菜を育てたことがありますか？ 花や野菜が大きくなるためには、どうすれば良いでしょうか？ きれいな花が咲いて、おいしい野菜が育つためには、太陽の光・水・栄養のある土が必要です。

では、私たちが元気に大きくなるためには、何が重要だと思いますか？ ご飯を食べることやたくさん寝ることは、元気でいるために必要です。いっぱい遊ぶこと、家族やお友だちを大事にすることも大切です。でも、それだけでは足りません。私たちが体も心も魂も元気で成長していくためには、神様とつながっていることがとても大切なのです。

神様の御言葉である聖書を読むと、私たちは神様のことがもっとよく分かるようになります。私

たちのことを愛して大切にしてくださっている神様は、私たちがイエス様を信じて、洗礼や聖餐式を受けられるように招いてくださっています。そして、私たちはみんな、お祈りの中で神様とお話しすることができます。

神様の御言葉を読んで、神様とお話しすることは、私たちの魂のご飯です。だから私たちは、毎日ご飯を食べて元気に大きくなるように、毎日聖書の言葉を読んで心と魂にも元気をいただきます。そうして、聖霊の神様が、私たちがイエス様を信じて、イエス様を頼って、そしてイエス様に従えるように成長させてくださるのです。

〈お祈り〉

神様、私たちが体も心も魂も元気に大きくなるために、御言葉をくださってありがとうございます。毎日ご飯を食べるのと同じように、聖書の言葉を毎日読むことができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**花壇作り****■用意するもの**

- ・秋植えの球根（チューリップ、スイセン、ヒヤシンス、ムスカリ、クロッカスなど）
- ・花用培養土
- ・鉢あるいはプランター（深めのもの）
- ・鉢底ネット（鉢穴の大きさに合わせて切っておく）

■やり方

鉢穴に鉢底ネットをかぶせ、培養土を入れる。

球根の頭がちょうど表土の高さになるくらい、浅めに植える（球根の上下を間違えないように注意する）。

1つの鉢に複数の球根を植える場合、球根と球根の間隔は球根1個分弱くらい開けておく（直径15cmの5号鉢であれば、チューリップ3球くらい植えられる）。品種の異なる球根植物を組み合わせる場合は、品種によって背丈や開花期が異なるので、球根に添付された表示を確認する。

植えつけ後は水をたっぷり与え、その後も鉢土の表面が乾いたら与える。水枯れさせると花芽が死んでしまうので、水切れに注意する。しかし、過湿も良くないので、受け皿に水を溜めないように注意する。また、球根植物は冬の寒さに2週間以上あたることで花芽が出るため、戸外で冬越しさせる（暖房された室内に置くと開花しない場合がある）。なお、植え方・育て方についての詳細は、球根に添付された表示に従うこと。

〈ねらい〉

神様は、「御言葉・礼典・祈り」という恵みの手段によって信仰を成長させてくださる。

〈展開例〉**1. 私たちの体が成長するために必要なこと**

みんなは生まれてから毎日少しずつ、背が伸びて、体重も増えてこんなに大きくなりました。体が大きくなるためには、いろんな栄養が必要です。どんなものがあるか言えますか。

ごはんやパン……………体を動かすエネルギーになる
魚や肉、卵、豆腐…体をつくる
野菜や果物……………体の調子をととのえる

2. 私たちの信仰が成長するために必要なこと

同じように、私たちの信仰が成長するためにも栄養が必要です。その栄養（神様の恵み）はどんな方法で与えられるのでしょうか。それは御言葉と礼典（洗礼式と聖餐式）と祈りです。神様は、信じた人がこれらの方法を用いることによって、ますます信仰を強められて清い生き方ができるように導いてくださいます。

3. 御言葉によって

聖書の御言葉をとおして神様は、私たちに何をすべきかを教えてください。悩んでいるとき、励ましてくださいます。イエス様がどんなに私たちを愛してくださっているかを教えてください。

教会の礼拝で、御言葉が語られます。家族で、また一人で聖書を読むとき、神様が今、私に何を語ってくださいろうとしているのか、静かに心の耳を傾けましょう。

4. 礼典によって

礼典とは神様がくださったきよいしるしです。神様が目に見えるかたちで、救いが確かなものであることを教えてください。礼典には「洗

礼式」と「聖餐式」の二つがあります。

洗礼式を見たことがありますか。牧師先生が頭に水を注ぎます。この水は、イエス様の血がイエス様を信じる人の罪をゆるし、きよくしてくださるしるしです。

聖餐式ではパンを食べ、ブドウ酒を飲みます。パンは十字架につけられたイエス様の体をあらわします。ブドウ酒は十字架で流されたイエス様の血をあらわします。イエス様の十字架の死によって、私たちの罪が本当にゆるされたことを信じ、感謝するのです。

5. 祈りによって

お祈りをするときは、静かにして心を神様の方に向けましょう。うれしいこと、悲しいこと、困っていること、心の中にあることを神様にお話ししましょう。あなたが心を開いて神様に話すのを、神様は待っておられます。

また、お祈りをとおして、あなたが何をしたらよいのかを教えてください。あなたが神様のみこころに従って生きることができるように導いてくださいます。

6. 絵を描こう！

洗礼式、聖餐式などの絵を描いてみよう。

大人の礼拝に出席したことがある人は、洗礼式や聖餐式を見たことがあると思います。そのときのことを思い出して、絵を描いてみましょう。それを見ていて、どんなことを感じましたか。（子供たちにとって、礼典は、まだ身近なものではないかもしれませんが、でも、神様の恵みが注がれていることを、きっと霊的に感じているはず。子供にとって絵を描くことは、思っていることを表すよい表現方法の一つです。）

礼典を見たことのない人は、礼拝で説教を聞いている様子や、お祈りをしている絵を描きましょう。

〈ねらい〉

恵みの手段を用いることを学ぶ

〈展開例〉

○恵みの手段

主イエス・キリストは、いつも私たちと共にいてくださいます。私たちは、主イエス・キリストとの交わりをとおして、ますます成長していくことができるのです。

それはちょうど、ぶどうの木のとえ（ヨハネによる福音書15章）で教えられているように、幹である主イエス・キリストに接ぎ木された私たちに、主イエス・キリストが、聖霊によって私たちに恵みを豊かに注いでくださるのです。

聖霊なる神様が、まず普通に用いられる手段は、「み言葉」と「礼典」と「祈り」の三つです。もちろん、聖霊なる神様の働きが、この三つの手段だけに限られるわけではありませんが、聖書によって明らかに教えられていることは、この三つの手段なのです。

○み言葉と聖霊の働き

聖霊なる神様は、み言葉と共に働かれます。聖霊なる神様は、み言葉を聞く人の心を開き、み言葉を正しく理解できるように、私たちの心とみ言葉を照らしてください。ですから、私たちは、み言葉を読む時、聞く時には、聖霊なる神様の導きと助けを祈り求めるのです。

さらに、聖霊なる神様は、特に、み言葉の「説教」を通してみ言葉を用い、救いの働きを進められます。ですから、説教をする牧師は、聖霊なる神様の助けを祈り求めつつ説教の準備をし、聞く人も聖霊なる神様の働きを願いながら聞くことが求められるのです。

心の中に、み言葉をたくさん蓄えて、聖書を見なくても暗唱できるようにしましょう。聖霊なる神様は、いろいろな時に、ふさわしい聖書の言葉を私たちの心に思い起こさせてくださって、励ましてくださったり、慰めてくださったり、罪に気

づかせて悔い改めに導いてくださったりするからです。

詩編1編では、幸いな人として、み言葉をいつも口ずさむ人を次のように表わしています。

「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。」(詩編1編2節と3節)

○礼典と聖霊の働き

聖霊なる神様は、礼典によっても、恵みを与えてくださいます。

私たちに与えられている礼典は、洗礼と聖餐です。礼典は、感覚（五感）をとおして与えられる恵みでもありますから、洗礼や聖餐に預かるときは、しっかりと見て、触れて、聴いて、味わいましょう。

み言葉を読み、祈ることは家でもできますが、礼典は主の日の礼拝においておこなわれますから、そういう意味でも主の日の礼拝が大切な恵みの時であることが分かります。

○祈りと聖霊の働き

聖霊なる神様は、祈りによっても、恵みを与えてくださいます。

祈りは、神様との会話です。自分の心を開いて、真心から神様に祈りましょう。自分の感謝や願い、悔い改めを祈るだけでなく、神様への讚美や他の人たちのためのとりなしの祈りもいたしましょう。

どう祈ったらよいか分からないときにも、聖霊は弱いわたしたちを助け、執り成してくださいませ。(ローマ8章26節)

〈お祈り〉

神さま、どうか私たちが恵みの手段を豊かに用いて、教会に生き続ける者としてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

初代教会に注がれた主の恵みがどのようなものであったかを理解する。

三つの恵みの手段とその内容を学ぶ。

〈展開例〉

質問1 ペトロの説教を聞いて悔い改めた人々はまず何をしたとあるか。

質問2 彼らは三つのことに熱心だったとあるが、それらは何か。

質問3 第一の使徒の教えとは何か。

質問4 第二の相互の交わり、パンを裂くこととは何か。

質問5 弟子たちの周りの人々は、彼らに対してどのような反応をしたか。また、主は彼らに何をしてくださったか。

まとめ

神の約束の通りに聖霊が弟子たちの上に降られた後、ペトロは、そこにいた人々にキリストの贖いと復活について説教をし、それを聞いて罪を悔い改めた人々が3000人も起こされた。彼らは、洗礼を受けて、神の民の群れに加わった。これが初代教会の誕生である。この人々は、三つのことに熱心だったとある。まず、使徒の教え、これは御言葉の教えである。教会の礎は、神の御言葉で

あり、これを学び生活の中で実践すること、これがクリスチャン生活では不可欠である。次に相互の交わり、パンを裂くこととあるが、これは現在の聖餐式に相当する。最後に、祈りに熱心だったとある。このように、御言葉を学んで神の御心を理解し、聖餐式を行って神の契約の恵みを確認し、祈りによって神と交わること、これが教会の本質的な機能である。彼らがこの三つに熱心だった結果、周りの人々はみな彼らに好意を持ち、神は救われる人々を日々仲間に加えてくださった。この三つは神が信じる者たちに恵みを注いでくださるための恵みの手段と呼ばれるが、教会が教会の本質的な事柄に熱心になる時、神は豊かな祝福をもって教会を祝福し、伝道の実を増し加えてくださる。私達も初代教会の人々のように御言葉・礼典・祈りに熱心になり、神から豊かな恵みを注がれ、人々を神に導く者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちに恵みの手段を与えてくださって、ありがとうございます。時に怠惰に陥り、あなたから恵みの手段を与えられておりながら、熱心になろうとしない私たちですが、どうか私たちに初代教会の信徒たちのような熱心を与えてください、あなたの恵みの手段を十分に用いて、あなたから豊かに霊的な恵みをいただく者とならせてください。また、私たちの周りの人々が大勢あなたのもとに導かれることができるよう私たちをお用いください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



2009年10～12月カリキュラム（第35号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月4日	生ける神の御言葉	問69	ウ小89、ハイデ155
		ルカ24:13-35	ルカ24:27
主イエス・キリストの語りかけに耳を傾けて、心燃やされる幸いに生きる			
11日	御言葉への聴従	問70	ウ小90、ハイデ156-160
		ヤコブ1:19-25	ヤコブ1:22
神への愛と奉仕として、御言葉に聴き従い、御言葉を行う歩みに励む			
18日	礼 典	問71	ウ小91-93、ハイデ66-68
		ルカ24:13-35	ルカ24:30-31
礼典によってわたしたちの信仰が強められる。聖霊の祝福をいただいて生きる			
25日 宗教改革記念	宗教改革	—	ウ小33
		ローマ1:16-17	コリント一1:18
宗教改革とわたしたちの教会の歴史を学び、その精神を受け継いで歩む			
11月1日	洗 礼	問72、73	ウ小94-95、ハイデ69-74
		使徒2:37-42	使徒2:38 一部
子どもも洗礼を受けることへと招かれている。洗礼の恵みを知り、受洗を志す			
8日	聖 餐	問74、75	ウ小96-97、ハイデ75-82
		使徒2:37-42	使徒2:42
教会は聖餐共同体である。聖餐の恵みと喜びを知り、あこがれを持つ			
15日	祈りとは何か（一）	問76	ハイデ117
		創世記12:1-9	創世記12:8 後半
神の御言葉に聴き従い、主の御名を呼ぶことこそ祈りである。主の御名を呼ぼう			
22日	祈りとは何か（二）	問76	ハイデ128
		使徒12:1-17	使徒12:5 後半
わたしたちの祈りは神に確かに聞かれている。神に信頼して祈る幸いを知る			
29日 アドベント	待降・ダビデとの契約	—	—
		サムエル下7:8-17	サムエル下7:13
ダビデの子孫として、救い主メシアが与えられた。ダビデの子をほめたたえる			
12月6日 アドベント	待降・キリストの系図	—	—
		マタイ1:1-17	ルカ19:9
神の民の歴史はキリストへと至る。キリストが与えられていることを喜ぶ			
13日 アドベント	待降・ヨセフへの告知	—	—
		マタイ1:18-25	ルカ1:32
「神は我々と共におられる」。インマヌエルのおとずれを喜ぼう			
20日 降誕祭	降誕・東方の学者たち	—	—
		マタイ2:1-12	ヨハネ黙示録22:16
キリストの前にひれ伏し、すべてをささげて、神をほめたたえよう			
27日 年末	一年の感謝	—	—
		詩編124	詩編124:8
一年の歩みを振り返り、主に感謝をささげよう。主の導きと助けに感謝する			

2009年度 年間カリキュラム

二年サイクル第2年（子どもカテキズム問37～85）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2009年 第33号	4月5日	受難週 進級式	キリストの受難	—
	4月12日	復活祭	復活のキリスト	—
	4月19日		第三部 生活の道 感謝の生活	問37
	4月26日		感謝としての服従	問38
	5月3日		十戒—感謝の道標	問39
	5月10日	母の日	神と人への愛	問40
	5月17日		贖いのみわざ—過越	問41、42
	5月24日		過越の成就—キリスト	問41、42
	5月31日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—
	6月7日		第一戒 神を神とする	問43、44
	6月14日	花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45、46
	6月22日	父の日	第三戒 神の御名	問47、48
	6月28日		第四戒 主の日の安息	問49、50
	第34号	7月5日		第五戒 父母を敬う
7月12日			第六戒 殺してはならない	問53、54
7月19日			第七戒 姦淫してはならない	問55、56
7月26日			第八戒 盗んではならない	問57、58
8月2日			第九戒 偽証してはならない	問59、60
8月9日		(平和)	平和を創り出す	—
8月16日			第十戒 むさぼりの禁止	問61、62
8月23日			神のおきてを喜ぶ生活	問63
8月30日			十戒の完成者キリスト	問64
9月6日			教会に生きる (一)	問65
9月13日			教会に生きる (二)	問66
9月20日		(敬老の日)	信仰と悔い改め	問67
9月27日			恵みの手段	問68

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
第35号	10月4日		生ける神の御言葉	問69
	10月11日		御言葉への聴従	問70
	10月18日		礼典	問71
	10月25日	宗教改革記念	宗教改革	—
	11月1日		洗礼	問72、73
	11月8日		聖餐	問74、75
	11月15日		祈りとは何か（一）	問76
	11月22日		祈りとは何か（二）	問76
	11月29日	アドベント	待降節	—
	12月6日	アドベント	待降節	—
	12月13日	アドベント	待降節	—
	12月20日	降誕祭	待降祭	—
	12月27日	年末	一年の感謝	—
2010年 第36号	1月3日	新年	新しい一年に向けて	—
	1月10日		祈りのお手本	問77
	1月17日		天の父よ	問78
	1月24日		御名をあげさせたまえ	問79
	1月31日		御国を来たらせたまえ	問80
	2月7日	(信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月14日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月21日	レント	我らの罪を赦したまえ	問83
	2月28日	レント	悪より救い出したまえ	問84
	3月7日	レント	頌栄	問85
	3月14日	レント	アーメン	問85
	3月21日	レント	受難節	—
	3月28日	受難週主日	受難週	—

教案誌会計報告

中部中会日曜学校委員会発行『教会学校教案誌』は、日本キリスト改革派教会中部中会の事業として、中部中会に会計報告をし、会計監査を受けています。けれども、収入の多くが教案誌の売り上げと自由募金であり、教案誌上において会計報告をすることが必要であると判断し、2006年度分より報告しております。2008年度の教案誌会計は以下の通りです。なお、内容は、中部中会2009年度第一回定期会において報告したものと同一です。

中部中会日曜学校委員会

教案誌会計（2008年2月16日～2009年3月2日）

収入		支出	
中会財務より	100,000	出版費	1,636,950
売り上げ	1,351,890	送料	122,140
自由募金（※）	306,840	謝礼	104,400
		庶務費	7,670
		会議費	22,431
		交通費	27,040
		雑費	46,915
小計	1,758,730	小計	1,967,546
繰越金	844,525	繰越金	635,709
合計	2,603,255	合計	2,603,255

※教案誌自由募金 34教会団体・6個人

教会団体分内訳

【改革派教会】

名古屋教会（3口）、宝塚教会、多治見教会、四日市教会、桑名伝道所、関キリスト教会日曜学校、灘教会日曜学校（3口）、新座志木教会、山田教会、高蔵寺教会（3口）、札幌伝道所、仙台カナン教会、那加教会、厚木教会、神港教会、湖北台教会、銚子栄光伝道所、筑波みことば伝道所、北神戸キリスト伝道所、青葉台キリスト教会教会学校、仙台教会、稲毛海岸教会、坂戸教会日曜学校（3口）、千里摂理教会、津島教会、豊明教会、高松教会、大屋伝道所、滋賀摂理伝道所、南浦和教会、山梨栄光教会、名古屋教会婦人会、名古屋岩の上传道所、新浦安教会

【その他の教会】

なし

〈執筆者よりひとこと〉

- ひと夏の間大きく成長する、子どもたちの心身霊のためにお祈りしています（山浦裕子）
- 子どもたちのおかれている状況は様々です。子どもたちに合わせて、さらに展開例を工夫してくださいと思えます。子どもたちの心の深みに福音が届けられることを願っています。（漆崎英之・春美）
- 子どもたち向けに十戒の解説を書かせていただきながら、自分自身の欠けや弱さを（もちろん罪を）深く自覚させられました。良い機会を与えていただき、ありがとうございました。（関口 康）
- 聖書の御言葉にじっくりと耳を傾けながら、教案も参考にして学んでいただけると幸いです（吉田通志子）
- 子どもたちとともに、み言葉をていねいに聞き取っていきたいと願います。（木下裕也）
- 子どもたちの成長に驚かされる毎日を送っています。聖書のみ言葉を蓄え、祈る子どもたちの姿に励まされています。子どもたちがイエスさまを信じると告白する日を待ち望んで。（望月 信）

〈あとがき〉

- 三川栄二教師より、教会の教育ということの原点を確認させられる寄稿をいただきました。ありがとうございました。
- CRC メディア・ミニストリーの紹介を掲載しました。キッズコーナーはこの6月をもって終了ということが残念ですが、過去の番組を聴くことができるようですので、ぜひお聴きください。また、SNS など、新しい取り組みにぜひご参加ください。教会の青年たちに宣伝していただくと感謝です。
- まもなく暑い夏になります。夏にはキャンプや夏季学校が行われます。それらの営みに主の祝福が豊かであるようお祈り申し上げます。全国高校生キャンプ“Summer Days 2009”も行われます。中会や大会で行われるキャンプにご参加くださるよう、ぜひ呼びかけましょう。信仰の学びと信仰の交わりの形成に努めて参りましょう。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。
- 申し込みの受け付けと送付の担当者が変わりました。大垣伝道所の辻幸宏教師が担当します。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼い』のお買い求めも下記までお願いします。
大垣伝道所 辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
- 『いのちのパン（子ども聖書日課）』（相馬伸郎）のお買い求めは、引き続き相馬伸郎教師にご連絡ください。
名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで
〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	説教展開例
長谷川潤 (四日市教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)
巻頭説教	木下裕也 (名古屋教会牧師)
中山仰 (東広島伝道所宣教教師)	望月信 (高蔵寺教会牧師)
教会学校・日曜学校訪問	辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
山下正雄 (CRC メディア・ミニストリー)	吉田実 (神戸長田教会牧師)
寄稿	相馬伸郎 (名古屋岩の上传道所宣教教師)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	分級展開例
講演への応答	幼稚科
長谷川潤 (四日市教会牧師)	山浦裕子 (稲毛海岸教会日曜学校教師)
聖書研究	小学科下級
後藤公子 (前インドネシア派遣女性宣教教師)	漆崎英之 (金沢伝道所宣教教師)
芦田高之 (新浦安伝道所宣教教師)	漆崎春美 (金沢伝道所日曜学校教師)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	小学科上級
小野静雄 (多治見教会牧師)	7・8月 関口康 (松戸小金原教会牧師)
赤石純也 (西神伝道所協力牧師)	9月 持田浩次 (三郷教会牧師)
カテキズム研究	中学科
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	吉田通志子 (仙台教会日曜学校教師)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	イラスト作画
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	表紙 松田裕子 (秩父教会)
	本文 岡野美佳 (青葉台教会)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2009年7・8・9月号 (季刊)
第34号
2009年5月31日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
